Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-14

身体接触行動における中日比較

呉, 映妍

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2009-03-25
(Date of Publication)
2011-08-30
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲4622
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004622

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

博　士　論　文

身体接触行動における中日比較

平成 20 年 12 月

神戸大学大学院総合人間科学研究科

呉　映妍

目　　次

第１章　はじめに 1
引用文献 4

第２章　先行研究 5
2-1　初期の研究 5
2-2　異文化比較研究 7
2-3　接触する身体部位を考慮した研究 8
2-4　接触部位を考慮した文化比較研究 12
2-5　観察による研究 15
2-6　実験的研究 16
2-7　まとめ 17
引用文献 18

第３章　研究方法の検討 21
3-1　先行研究で使用された方法 21
3-2　接触行動を決定する要因 23
3-3　分析法の基本概念 26
引用文献 27

第４章　接触部位と接触率 28
4-1　はじめに 28
4-2　方法 28
4-3　接触率に関する結果 30
4-4　要因の説明力の比較 68
4-5　クラスター分析 72
4-6　考察 78
引用文献 80

第５章　接触行動と発達 82
5-1　はじめに 82
5-2　方法 84
5-3　結果 85
5-4　考察 90
5-5　まとめ 95
引用文献 97

第６章　まとめ 98
6-1　中国人と日本人の接触行動 98
6-2　人間の接触行動 101
引用文献 103

付録資料
資料 1. 先行研究のまとめ
資料 2. 論文の翻訳（一つ）
資料 3. 調査地域分布図
資料 4. 調査を実施した大学の一覧表
資料 5. 質問紙「身体接近度についてのアンケート」（日本語）
資料 6. 同（中国語）
資料 7. 同（英語）
資料 8. 同（韓国語）
資料 9. 同（タイ語）

謝辞

図表目次

第 2 章

図 2-1. 調査対象とした「身体の部位 ……10

第 4 章

図 4-1. 性別で比較した身体部位による接触率 ……31

図 4-2. 国別および性別で比較した身体部位による接触率

…a. 正面 ……34

…b. 背面 ……35

図 4-3. 地域および性別で比較した身体部位による接触率

…a. 中国人男性の正面 ……38

…b. 中国人男性の背面 ……39

…c. 中国人女性の正面 ……40

…d. 中国人女性の背面 ……41

…e. 日本人男女の正面 ……42

…f. 日本人男女の背面 ……43

図 4-4. 接触相手および性別で比較した身体部位による接触率

…a. 中国人男性の正面 ……46

…b. 中国人男性の背面 ……47

…c. 日本人男性の正面 ……48

…d. 日本人男性の背面 ……49

…e. 中国人女性の正面 ……50

…f. 中国人女性の背面 ……51

…g. 日本人女性の正面 ……52

…h. 日本人女性の背面 ……53

図 4-5. 場面および接触相手で比較した身体部位による接触率

…a. 男性の私的場面（正面） ……57

…b. 男性の私的場面（背面） ……58

…c. 男性の公的場面（正面） ……59

…d. 男性の公的場面（背面）……60
…e. 女性の私的場面（正面）……61
…f. 女性の私的場面（背面）……62
…g. 女性の公的場面（正面）……63
…h. 女性の公的場面（背面）……64
図 4-6. 性別と接触相手によるグループ間の類似性を表すデンドログラム（日本人）
……73
図 4-7. 性別と接触相手によるグループ間の類似性を表すデンドログラム（中国人）
……73
図 4-8. 場面と接触相手によるグループ間の類似性を表すデンドログラム ……75
図 4-9. 国別と接触相手によるグループ間の類似性を表すデンドログラム ……75
図 4-10. 地域によるグループ間の類似性を表すデンドログラム ……77
図 4-11. 接触相手によるグループ間の類似性を表すデンドログラム ……77

表 4-1. 性別で比較した身体部位による接触率 ……32
表 4-2. 国別および性別で比較した身体部位による接触率 ……36
表 4-3. 地域および性別で比較した身体部位による接触率 ……44
表 4-4. 接触相手および性別で比較した身体部位による接触率
…a.男性 ……54
…b.女性 ……55
表 4-5. 場面および接触相手で比較した身体部位による接触率
…a.男性 ……65
…b.女性 ……66
表 4-6. 性別、場面、相手、国籍の条件で行った分散分析の結果 ……70
表 4-7. 性別、場面、相手、地域の条件で行った分散分析の結果 ……71

第 5 章

図 5-1. 調査地域別の回答者人数のグラフ ……86
図 5-2. 接触相手別の接触行動の発達的変化 ……87
図 5-3. 調査対象地における接触相手別の接触評定値の変化 ……89

第１章　はじめに

人間は主として言語を用いて意思伝達を行っているが、身体的接触やジェスチャー、表情、沈黙などの非言語コミュニケーションは、言語コミュニケーションを補ったり、時には言語よりも強く意思を伝えることがある。非言語コミュニケーションに用いられる非言語行動は多様であるが、中でも、対人的空間に関する行動、とりわけ、対人距離がゼロである身体的接触は、人間関係の中で重要な役割を果たしていると言える。他者に触れたり、他者から触られたりすることを非言語コミュニケーションの一環として、体験したことがない人はいないであろう。そして、おそらく行為の中で、接触行動はもっとも強力なものであろう。窮極の敵対行為が身体的な接触行動によることはいうまでもない。また一方、窮極の親密さを表す行為である握手、キス、抱擁なども身体的接触である。本研究は、この対人的な身体接触行動に焦点を当て、中国と日本における身体接触行動の異同について、主として心理学的な立場からアプローチを試みたものである。

人間の対人空間行動についての観察から、プロクセミックス（proxemics；近接学、接近空間学）という語が、1960年代に、空間研究の創始者ホールによって用いられ、異文化の混在する米国で発展した（Hall, 1966)。ホールは「人間は動物と同様にテリトリーを占有し、同朋からの距離を一定の方法で取り扱う（邦訳書 pp. 161)。」と述べ、人間の対人距離を４つに分類した。人間は対人関係、パーソナリティ、環境的要素によって、異なる対人距離を用いるが、ホールによれば、それらは大まかに四つの距離帯（ゾーン）に分けることができる。それは：密接距離（intimate distance; 45cm以内)、個体距離（personal distance; 45～120cm)、社会距離（social distance; 120～360cm)、公衆距離（public distance; 360cm以上）である（Hall, 1966 邦訳書 pp. 160-181)。

ホールによって述べられた最も短い対人距離--「密接距離」の内に、対人距離が０ｃｍでの交渉、すなわちタッチング（身体接触）がある。身体接触は日常的に行われ、親密な人間関係の中で、お互いに影響を与え合い、非常に重要な役割を果たしていると考えられる。

人類が誕生し、人間社会が形成されて以来、人と人との接触は避けることができず、常に存在している。人は生まれてから死ぬまで、周りの人々とさまざまな形で身体的接触を行い、何らかのメッセージを発信し、また受け取っている。さまざまな身体接触を体験しながらその意味を理解していき、人は成長していく。特に、大人同士の間では、身体の接触によるコミュニケーションによって、さまざまな意味を伝達することができる。多くの場合において、このような他者への接触はことばより強力である。

モンタギューは、身体的接触は単なる皮膚への圧力ではなく、コミュニケーションチャンネルとなり、相手に自分が「どう感じているか」を示すメッセージで、他者に対して能動的に働きかけるコミュニケーションの手段であると考えた（Montagu, 1977）。敵同士はめったに互いに近寄らないし、身体が接するのは相互への敵対行為の場合に限られている。また、見知らぬ同士も互いに距離を置いて立つのが普通であり、儀礼的な身体の接触以外は避けるであろう。知り合いの間では、もっと気楽に自然な接触を行う。親友は普通以上に接触しあうため、それと分かる場合が良くある（Barnlund, 1979）。

体や肌のふれあいは深い安らぎや心のつながりをもたらす。子供のころ、よく母親に抱き付いた経験はおそらく誰にでもある。母親からの身体的接触は子供にとって不安を和らげる安静剤になるものである（例えば山口, 2003）。しかし、現代社会の過密状態にある都会ではいちいち親密性を示すことは禁止される傾向にある（Morris, 1971）。

身体的接触行動の重要さにもかかわらず、接触行動に関する研究はそれほど多くはない。その大きな理由のひとつは、身体的接触行動が主として親密な間柄の対人関係において行われるものであるために、実験することが困難であり、また、観察にも限界があるということである。これまで行われてきた身体的接触行動の研究、調査に用いられた研究方法にも、それぞれ長所があるものの、また、欠点を指摘することができる。

本論文においては、まず、第 2 章で身体的接触行動に関する先行研究を、初期の研究、身体部位に関する研究、文化比較に関する研究など 6 つの側面からまとめる。とりわけ、接触行動研究の発端を作ったジュラード（Jourard, 1966）の研究と、先に述

べたバーンランドの研究について詳述する。また、これらの知見に基づいて中国と日本の接触行動を比較する研究に必要かつ妥当な方法について第3章で述べ、第4章と第5章ではその方法に基づいて実施された調査の結果について述べる。

その上で、バーンランドの研究を土台に、中国人大学生と日本人大学生を対象にして、身体接触行動に関する質問紙調査を行い、調査結果を統計的に分析し、考察を加える。分析に際しては、国レベルの比較だけでなく、同一国内の地域差にも焦点を当てる。これらの分析と考察は、まず接触行動の対象となる身体部位別の接触頻度に関して行う。次いで、複数の接触相手を対象として、接触行動の発達的変化について調べる。最後に、得られた結果と先行研究の結果とを総合的に考察する。

引用文献

Barnlund, D. C. (1975). Public and private self in Japan and the United States : communicative styles of two cultures. Tokyo: Simul Press. (西山千・佐野雅子(訳) (1979)『日本人の表現構造』 サイマル出版会)

Hall, E. T. (1966). The hidden dimension. New York: Doubleday & Co., Inc. (日高敏隆・佐藤信行 (訳) (1970)『かくれた次元』みすず書房)

Jourard, S. M. (1966). An Exploratory study of Body-Accessibility. British Journal of Social and Clinical Psychology, 5, 221-231.

Montagu, A. (1971). Touching: The human significance of the skin. New York : Columbia University Press. (佐藤信行・佐藤方代 (訳) (1977)『タッチング : 親と子のふれあい』平凡社)

Morris, D. (1977). Man watching. New York: Harry N. Abrams, Inc. (藤田統 (訳) (1980) 『マンウォッチング』小学館)

山口 創 (2003). 「愛撫・人の心に触れる力」 NHKブックス 959 日本放送出版協会

第2章　先行研究

本章においては、接触行動に関する、主として心理学的立場から行われた研究について概観し、接触行動に関する知見をまとめる。これらの先行研究から得られた方法論の問題については次の第3章で記述する。

2-1　初期の研究

2-1-1　エドワード・ホール（Hall, E.T.）の研究

文化人類学者としてのホールはプロクセミックスの研究で名高いが、彼は著書「かくれた次元」の第2章で動物のなわばり行動について触れ、ヘディガー（Hediger）の”Studies of the Psychology and Behavior of Captive Animals in Zoos and Circuses”の記述を引用し（Hall, 1966 邦訳書 pp. 14)、動物の個体間距離について、2つのパターン、すなわち「接触性」と「非接触性」の違いを示したあと、第10章で人間の個体間距離に話しを進め、「非接触性で中間層の・・・アメリカ合衆国北東沿岸生まれの人々」の対人距離について4つの距離帯を区別している（邦訳書 pp. 164)。

ホールによれば、被接触性のヨーロッパ人に比べ、アラブの人々は、(a)　相互作用のために近い距離を保ち、(b) 正面からの対面姿勢を好み、(c)　頻繁に身体接触をし、(d)　相手を直視する人が多い、と言われる（邦訳書 pp. 213-227)。それに対し、非接触文化は、遠い距離をおいてコミュニケートすることが常であり、接触行動そのものを嫌う傾向があるという（邦訳書 第12章)。またホールによると、接触文化と非接触文化の人が相互にコミュニケートする時、接触文化に属す人は非接触文化の人びとから「冷たさ」や「遠い感じ」の印象を受けることがあるとされている。このホールの著作は、「接触文化」と「非接触文化」について述べた古典としてよく引用される。しかしホール自身は、接触行動について実証的な研究をしたわけではない。

2-1-2　モンタギュー（Montagu, A.）の研究

文化人類学者ではなく人類学者であるモンタギューは、”Touching”と題する著書の中で接触行動がもつ生理的効果について多くのページを割いているが、文化差についても述べている（Montagu, 1971)。モンタギューは、アメリカ人と日本人の養育行動を比較した研究を引用して、アメリカの幼児に比べて日本の幼児のほうがはるかに親から多くの接触刺激を受けているが、その後は突然に皮膚接触が禁じられると述べている（邦訳書 pp. 255-259)。彼はまた、「アングロサクソン系の人々はラテン系の人々に比べ、はるかに非接触的である･･･（中略）オーストリアの男性は、ドイツ人とは異なり、皮膚接触をずっとあからさまに行った･･･（中略）アングロサクソン系のカナダ人は、おそらく皮膚接触を行わない点で、イギリス人を凌いでいるだろう。他方、フランス系カナダ人は、母国のフランス人と同様に皮膚接触を盛んに行う」と述べている（邦訳書 pp. 260-267)。

この本は1977年に第2版が、また1986年には第3版が出ている。なお第3版では初版に対して”Physiological Effects of Touching”と”Touch and Age”の2章が加えられ、他の章も大幅に加筆されている。残念なことに、邦訳は1971年の初版に対するものだけである。

2-1-3　モリス（Morris, D. ）の研究

デズモンド・モリス（Morris, D.）は1977年に「マンウォッチング（Man watching)」という人間の非言語的コミュニケーションに関する本を書いた（Morris, 1977)。この本の中では92ページから10ページが接触行動の説明に充てられている。モリスは人間の接触行動を14種に区別した。それらは、握手、身体誘導、軽打、腕組み、肩抱き、抱擁、手つなぎ、腰抱き、キス、頭部への接触、頭部同士の接触、愛撫、抱きかかえ、攻撃の模倣の14種である。これらの分類は接触行為の意味的側面に関して行われており興味深いが、それぞれの行動の現象面について簡単な説明があるだけであるため、研究の指針としては参考になるが、資料性に乏しく、先行研究として比較の対象になるものではない。

2-2　異文化比較研究

2-2-1　仁平らによる異文化比較研究

一般に、日本文化は非接触文化であるとされるが、心理学の立場から日本人の接触行動を他文化における接触行動と比較した実証的研究は多くない。比較的最近、仁平らは、非接触文化である日本と接触文化とされるラテン系のボリビアを比較した。この研究について述べる。

仁平らによる「身体的接触に反映された親子関係の文化的差異」研究は、日本と、ラテン系文化を継承していると考えられるボリビアの2カ国の接触行動調査結果を比較したものである（仁平・残間・平田・Foster, 1997a, b, c)。調査対象者は、ボリビア国、ラ・パス市内の国立大学生102人、市立高校生72人、中学生108人；日本は仙台市内の大学（院）生175人、高校2年生152人であった。

質問紙は、仁平と残間による質問紙（仁平・残間, 1997）のうち、文化バイアスが比較的小さい24項目が使用された。質問項目には、「握手をする」「抱きしめる」「腕を組む」「おでこ（額）に手を当てる」「頭をなでる」などがあり、相手に自分が接触する（能動的接触）と、相手から自分が接触される（受動的接触）の2種類の接触について、好悪度を「うれしい」から「いや」までの5段階評定で、また身体的接触の頻度を「よくある」から「ない」までの5段階評定で回答を求めた。接触の対象者は父親、母親、同性友人の3種類である。彼らが得た主要な3つの結果について以下にまとめる。

(1) 親子間の身体接触に対する反応の因子構造

受動・能動両タイプの接触に対する好悪度について因子分析を行った結果、それぞれの文化に特有の因子が抽出された。日本では、高校生でも大学生でも、最大の因子は、接触全般にわたる「接触一般」因子であり、また、「友人関係の表現」を意味する接触が因子として抽出された。ボリビアでは、どの年代においても、「親との密着」や、「親の愛情表現」を意味する因子が抽出された。日本では、青年期以降、「親から友人へ」の関係移行を身体接触という目に見える行動によって明示する傾向がある。他方、ボリビアでは、青年期以前に引き続いて、友人より親との接触が重視される傾向があると仁平らは考えている。

(2) 親子間の身体接触に対する反応（好悪度）についての発達的変化

仁平らは日本とボリビアの2カ国それぞれの発達的変化について検討し、身体接触に対する好悪度の意識（5段階評定の全項目評定平均値）について、学年×性×対象の3要因分散分析を行った。その結果、ボリビアでは、能動的接触、受動的接触ともに対象（接触相手）の主効果があった。日本では、能動的接触、受動的接触ともに性×対象の交互作用があった。全般にボリビアの方が接触行動に対する好感度が高く、日本の方が低かった。つまり日本に比べ、ボリビアの方が身体接触に対して好意的であった。日本は女性友人同士の接触の場合に好意度が高く、一方ボリビアでは「親」との接触に対する好感度が高かった。

(3) 親子間の身体接触頻度の発達的変化

身体接触の頻度について比較した結果、身体接触の頻度（5段階評定の全項目評定平均値）について、学年×性×対象の3要因分散分析が行われた。その結果、日本、ボリビアのいずれにおいても、能動的接触と受動的接触とは全体として類似していた。

全体的にボリビアに比べて、日本では接触頻度が低い。両国間で相手の違いによる接触頻度の差異が見られた。日本の大学生は両親よりも友人との接触が多いのに対して、ボリビアでは反対に両親との接触の方が多い。さらに日本では成長に伴い人間関係の重心が両親から友人へ移るのに対して、ボリビアでは成長しても親子の絆は相変わらず固い。ボリビアにおいても、特に男子において、発達に伴い父親との接触が減少傾向にあるのに対して、母親との接触は減少しない。こうした結果は、ボリビアにおいては母親が特別な存在であるということを伺わせる。

因子分析による結果も分散分析による結果も、ボリビアの学生が両親との接触を維持しており、かつそれを重要であると考えていること、それに対して、日本の学生が両親との接触を少なくしようとしていることを示唆している。

2-3 接触する身体部位を考慮した研究

これまで述べてきた研究では、一般的な接触頻度が問題にされている。日本とボリビアの接触行動を調査した仁平らも、接触部位については検討をしていない。しかし、おそらく、身体の部位によって、接触行動は異なるであろう。接触対象となる身体部位別に接触

行動を調べた研究は、ジュラードの研究が最初であると思われる。

2-3-1　ジュラード（Jourard, S.M.）の研究

人体を24の部位に分け、身体接触を量的に調査することを初めて試みたのはジュラードである（Jourard, 1966）。調査の目的は、大学生が彼らの親や同性・異性の友人に対して、どの程度これらの対象者を見たり触ったりするのか、またこれらの対象者からどの程度見られ、触られるのかを測定することである。

ジュラードは、フロリダ大学の、18歳から22歳までの学生380人（男子180名、女子140名）を対象に、質問紙調査を行った（Jourard, 1966）。接触の相手は、父親、母親、同性の友人、異性の友人の4種であった。質問紙は「身体接近度質問表（Body Accessibility Questionnaire）」と呼ばれている。人の身体を24の部分に分けた図（図2-1）が示され、その下に4列（4種類の接触相手）、24行（24の身体の部位）の表が書かれている。被調査者は、視覚的な接触（visual contact）について、接触相手の身体のどの領域を見たか、見られたかを、また、触覚的な接触（touching）について「接触相手の身体のどの領域（身体の部分）を触ったか、触られたか、についてそれぞれ表の適切な欄に印をつけて回答した。また、過去12ヶ月の範囲で起こった身体的接触について回答した。

ジュラードの研究では、提出された回答から、ランダムに選び出された男女25人ずつの接触について分散分析が行われている。おそらくこれは、サンプル数が多数の、しかも比較群におけるサンプル数が異なるデータについての分散分析が当時は容易ではなかったことに起因する手続きであろう。その結果、身体接触の形態（視覚的な接触と身体的接触）と接触相手の間に有意差が見られた（$p<0.001$）。そして、接触相手と接触形態、接触相手と接触形態及び性別の交互作用も有意であった。接触の形態別に分析した結果、異性友人を除いて、触覚的な接触より、視覚的な接触は比較的自由に、気楽に行われることが分かった。身体接触の相手別に分析した結果、男女とも異性の友人との身体接触は、他の3種類の相手（父親、母親、同性の友人）に比べて、より多く接触することが報告された。

親と身体的接触の交換（接触する、されるの両方向）を分析した結果、男子学生は女子学生と同じ程度に多くの部分を母親から触られるが、彼らは、母親から触られる程度（ほど）には母親を触らない。また、女子学生は、男子学生と同じ程度に父親を触るが、男子学生よりも多く父親に触られた。さらに、女子学生は異性の友人からも良く触られていた。

つまり、女子学生は誰からも良く触られていた。

ジュラードは、さらに宗教や、自己評価された魅力の程度という側面からも分析を試みた（Jourard, 1966）。分析の結果、異なる宗教によって、特に女子学生において、受動的な身体接触の得点の平均値に有意差があった。プロテスタントとカトリックの女子学生では、異性の友人から触られる身体部位の平均は20ヶ所であったが、ユダヤ教の女子学生は平均16ヶ所であった。また、自分が魅力的であると判断している男子学生は、普通だと判断している学生よりも、接触相手から全体的により多く触られているという結果であった。

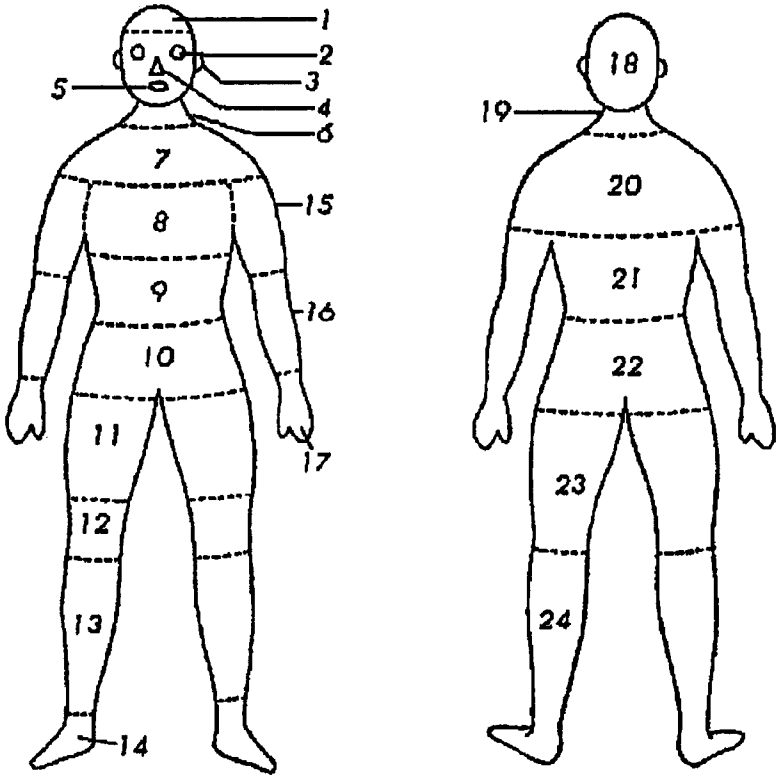


図 2-1　対象とした「身体の部位」

（バーンランド（1975）に基づいて作成）

2-3-2　鈴木と春木の研究

鈴木と春木はジュラードが行った調査（Jourard, 1966）に基づいて、日本人大学生を対象に質問紙調査を行った。調査対象（被験者）は日本にある5つの大学に在学している大学生550名（男子305名、女子245名）である（鈴木・春木, 1989）。研究の目的は、過去においてどのような身体接触を経験し現在に至っているのかについて、両親、友人という人間関係において調査し、日本人大学生の身体接触の現状を把握することであった。

質問紙は2つの部分から構成された。調査1は回答者に自分の両親、同性・異性友人を対象として、その4者の各人の1から24までの身体部位について、自分が過去1年間に、よく触った、よく触られた、よく見た、あるいはよく見られた部分を、複数回答を許して回答表に記入を求めた。調査2は回答者に、生まれてから現在に至るまでの、6つの時期において、どの程度触られたかを1（全く触られなかった）から10（非常によく触られた）の10段階で回答を求めた。その結果、身体部位別の接触頻度をみると、比較的良く触られているのは頭頂部、肩、上腕、前腕、手、背中などであり、骨盤の前・後部、足の部位などは全体的に触られない傾向にあった。接触される部位の数はジュラードの結果（Jourard, 1966）より少ないだけでなく、頻度においても少なかった。女子学生は男子学生に比較して、母親、同性の友人、異性の友人から良く触られている傾向が見られた。

接触頻度では、女子は母親、同性の友人に対しては男子より高頻度で接触していた。男子は同性、異性の友人に比べ、父親、母親には接触しない傾向が見られた。つまり、過去1年間では父親、母親、同性の友人にはあまり接触されていないが、異性の友人による多くの幅広い身体部位への接触が見られた。

成長段階別接触の自己評定について、男子学生では、幼稚園までは、父親、母親、同性の友人、異性の友人の順で接触頻度が低下する傾向があった。つまり、友人よりも両親から触られていた。しかし、大学生になった時点で、両親からは友人よりも触られなくなった。女子は相手が父親の場合を除いて、男子と同様の傾向を示した。父親は他の3者の接触相手に比較して、有意に接触が少ないことが示された。また、年齢が増加するにつれて両親や同性の友人との接触が減り、異性の友人との接触において増加していくことが過去の接触行動の評定から示された。

2-4 接触部位を考慮した文化比較研究

2-4-1 バーンランド（Barnlund, D.C.）の日米比較研究

バーンランドはコミュニケーション研究者として、日本とアメリカの大学生合計240名（男女各60名）を調査協力者に、身体接触のパターンを計量的に調査し、その結果を著書『日本人の表現構造』に発表した（Barnlund, 1975）。バーンランドは、日米文化のプロフィール、言語による自己表現など、いくつかの内容を調査することによって、日米両国の人々のPublic Self（開かれた自己）とPrivate Self（私的自己）の比較を行った。彼は非言語的自己表現の大きな一部分を占める「個人間接触の文化的慣習」について資料を集めるため、「非言語的行為表」を用いたが、これは、上記ジュラードの身体接近度質問表（Body Accessibility Questionnaire）を改定したものである。人間の身体の前姿と後ろ姿の図 各1枚を回答者に提示し、記憶の誤差を少なくし、子供の頃の行動を除くため、14歳以後の「非言語的接触」だけを回答させた。また、偶然の身体的接触や、スポーツをしている時の接触を除いて、意識的なコミュニケーションを目的とした行為において、具体的に身体のどの部位に触ったかを報告させた。質問表の中で設けられた「接触相手」は父親、母親、同性友人及び異性友人の4種類であった。

彼の研究結果に示されているように、「良く接触する身体の部位」と「めったに触らない身体部位」とが著しい対照を見せていることが分かった。この点において日米文化はほとんど全面的に一致している。より多く接触されている身体部位は手、肩、額、頭、首の後部、腕であって、避けられている部位は骨盤の前部、後部、太腿の後部、すねの後部（ふくらはぎ）などであると報告された。

また、アメリカ人の全体としての身体接触量は日本人の約2倍であり、母親との接触が2倍弱、父親との接触が2倍強であった。また、異性との接触も2倍以上であったが、同性との接触では日米で大差がなかった。バーンランドは「アメリカと比べ、日本人の間では接触頻度が低く、より孤立していることが分かった。アメリカ人にとって最も好ましくない相手との非言語的接触が、日本人の最も好ましいと思う相手との接触よりも大きいことに注目すべきだ」と指摘した（Barnlund, 1975）。つまり、モンタギューの言う「非接触的な北米人」よりも、日本人はさらに非接触的であるということになる。

この研究結果では、接触相手について日米大学生とも、最も好ましい接触相手として異性の友人を選び、父親を最も低く評価している。日本人は、異性の友人との接触が最も多

く、その次に母親と同性友人が続き、父親との接触は遥かに少ない。アメリカ人大学生の好ましい接触相手は、異性友人、母親、それから同性の友人、最後に父親の順になっている。

男性と女性が身体的接触をする場合に同様の規則に従うかどうかを見るための比較も行われた。その結果、アメリカ人男性は異性友人との接触が圧倒的に多く、他の三者間にはそれほどの差はない。一方、日本人男性は、好ましい相手の順位は同じだが、異性と同性友人にそれほど差をつけていない。女性の場合、アメリカ人女性の最も接触度が高いのは異性友人で、2 番目は母親で、次が同性友人、最後が父親であった。日本人女性の場合、順番は同じであるが、異性友人との接触頻度はそれほど高くない。

バーンランドの「非言語的行為表」は「触る」ことと、「触られる」ことを区別しているが、この二つの頻度の増減の仕方はよく似ていた。

異なる成長段階ごとの身体接触にも違いがあった。幼児期の接触量は日米とも身体接触頻度が高いが、青年期ごろから両国の接触行動は急速に違ってくる。アメリカ人学生では高い身体的接触度が保たれて、かつ接触が自分の態度を示す重要な方法であるが、日本では自分の態度表現の方法として、接触を用いることが減ってくるとバーンランドは述べている。

最後に、バーンランドは日本とアメリカの両文化のプロフィールと非言語的行為の結果を付き合わせ、両者が一致していると考えた。つまり、アメリカ人は、身体的活発さ、豊かな顔の表情、ジェスチャーのはなばなしさなどで有名であって、「ボディ・イングリッシュ」に頼ることが大であるのに対し、日本人は顔の表情も少なく、ことばを補強するための身振りでさえ控えめだと述べ、日米二つの文化にはかなりの差が見られると結論した（Barnlund, 1975）。

2-4-2　林の日韓比較研究

林は日本人大学生と韓国人大学生の接触行動の比較研究を行った（林, 1984）。調査対象は東海大学文学部英文学科学生（男女 60 人ずつ）、ソウルの成均館大学英文科学生（男性 60 人、女性 49 人）であった。この研究はバーンランド（1975）の日米比較の手法を使用することによって、日本人と韓国人の開かれた自己（Public Self）と私的自己（Private Self）を比較し、そこから日本人と韓国人のコミュニケーションスタイルの相違あるいは

異同を明らかにしようとするものであった。

調査の結果、日本人大学生と韓国人大学生の身体的接触量は、ほとんど等しかった。バーンランドが調査したアメリカ人大学生の身体的接触量は日本人や、韓国人の約2倍であり、アメリカ人大学生と比べると、日本人と韓国人は自分をより少なく表現しており、「開かれた自己」を制限していると林は考察している(林, 1984)。

接触相手別で見たところ、日・韓の父親はともに極端に接触が少ない。日本の場合、父親との接触は最多接触相手である異性友人の半分であり、韓国の場合、最多接触相手である母親の半分に過ぎない（林, 1984)。

林によれば、韓国人にとって母親の存在は圧倒的に大きい。林は、『ジャパニーズ・マインド（Christopher, 1983)』の中で、日本人の性格形成に果たす母親の存在と役割の絶対性が強調されていることに言及し、調査結果から「接触指数（量）を見る限り、韓国人にとっての母親の存在は、日本人のそれさえもはるかに圧倒していることが明瞭となる」と述べている（林, 1984)。

一方、父親についてであるが、バーンランドは日本の父親について、「父親を非常に軽んじているか、さもなければ恐ろしく敬意を払っているかのどちらかである」と考察している（Barnlund, 1975)。これはそのまま韓国の父親の存在にも妥当するようである。日・韓の若い世代にとって、父親の存在は儒教的敬意の対象ではなく、“頼りにならない”“当てにできない”存在と映り始めている証とも見られると、林は指摘している。しかし、両親を接触相手にした場合の男女別での比較について、林は詳しく述べていない（林, 1984)。同性友人、異性友人の間の身体接触量を比較した結果、韓国では、異性友人との接触は父親に次いで少ないという。この結果について、林は韓国の「男女7歳にして席を同じくせず」という儒教的伝統が、若い男女の間でもなお根強いことの反映だと考察している(林, 1984)。

注）以上に挙げた量的な質問紙調査を中心とした先行研究は資料1.（先行研究のまとめ）にまとめた。

2-4-3　比較研究のまとめ

これらの比較研究の結果を簡単にまとめると、北米でも日本でも韓国でも、よく接触される部位、接触されない部位は一致しているが、接触頻度については北米が圧倒的に多く、

日本や韓国の学生の接触行動はごく少ない。日本と韓国の大きな違いは、バーンランドの調査では日本人は異性友人にもっともよく接触するが、韓国においては異性友人への接触がごく少ないという点であろう。

この後者の問題について、考えられることは、「異性友人」がもつ意味の曖昧さである。接触行動は、基本的に、保育行動として高頻度に行われるが成長するに従って低下し、次に生殖行動として再び高頻度で現れると考えられる。もし「異性友人」が「恋人」あるいは英語の“girl friend”を意味するならば相当高頻度の接触行動があると期待できるが、「異性友人」が単に性を異にする友人を意味する場合には、「恋人」との区別を明確にする必要があり、むしろ接触行動は抑制されるかもしれない。

本研究では、第4章以下で述べるように、接触相手として「恋人」と「異性友人」を別カテゴリーとして区別することを方針として立てる。

2-5 観察による研究

これまで述べてきた実証的研究は、いずれも、質問紙による接触行動の調査であった。質問紙への回答であるから、回答者が実際に回答したような接触行動を行っているかどうかは検証できない。McDaniel と Andersen (1998) は、国際空港における送迎者の接触行動を観察し、事後面接を行うという方法を用いて出身地別の接触行動を比較している。

彼らはアメリカ合衆国西部の国際空港の出発ターミナルにおいて出発する旅行者とそれを見送る人との異性ペア間の接触行動を観察し、その後、見送った人物にインタビューして両者の出身地や人間関係の型について資料を得るという方法を用いた。彼らは最終的に、26カ国の異性ペア、154例についてデータを得た。国ごとの分析を行うには例数が少ないため、世界各地を5つの地域に分けてデータの分析を行っている。それらの5地域は、東北アジア、東南アジア、カリブ・ラテン、北ヨーロッパ、アメリカ合衆国である。文化的背景をコントロールするため、分析対象ペアは同一国の出身であると申告された場合に限った。

彼らが検証しようとした仮説は主として2つあり、一つは出身地域によって接触行動が異なるかどうかを観察によって検証すること、もうひとつは、地理学上の緯度が接触行動に影響するという仮説 (Hecht ら, 1989) を検証することであった。彼らの検証仮説の中には、Hall (1966) による、北米は非接触文化であるという記述の検証も含まれていた。

彼らによれば Shuter (1977) はドイツ、イタリア、アメリカ合衆国を比較して、イタリア人の接触行動が多いこと、ドイツ人とアメリカ人の違いがわずかであることを見いだした。一方、Remland, Jones, & Brinkan (1991) は、イギリスとオランダ、フランスを比較し、南方のほうが接触が多いという Hall の仮説は検証できなかったと述べているという。

McDaniel & Andersen の観察結果によれば、これまでしばしば言われてきたように日本を含む東北アジアのペアは接触が少ない。接触の順位は、少ない方から、東北アジア、東南アジア、カリブ・ラテン、北ヨーロッパ、アメリカ合衆国の順であった。ただし、東北アジアと他の地域との間には有意差があったが、残りの 4 つの地域の間には有意な差はみられなかった。彼らは、アメリカ合衆国が非接触文化であるという根拠はなく、また、出身地の緯度と接触行動との間には関係がみられないと結論している。一方、調査対象ペアの人間関係に関する分析から、もっとも接触が多いのは友人・恋人群であり、家族、配偶者、他人・知人より有意に接触行動が多かったと述べている。

この研究結果は、バーンランド (1975) が見いだした日本とアメリカ合衆国における接触行動の調査結果や、林 (1984) が見いだした日本と韓国の接触行動の調査結果を、一つには日米の接触行動の差の大きさについて、もうひとつは日韓の接触行動に大きな差がないことについて、支持を与えるものである。しかし、調査対象が異性ペアだけであることから、この結果をすべての対人関係に拡張することはできないであろう。

2-6 実験的研究

人間の接触行動を実験的に検討した研究は、心理学の分野では少ない。比較的最近行われた Floyd による実験は、身体接触の意味を実験的に見いだそうとする実験として興味深い (Floyd, 2001)。この実験は、抱擁形式 (3 種) と長さ (1 秒、3 秒、5 秒) と抱擁者の性 (男性同士または女性同士) についてコントロールされたビデオ画像を実験参加者に提示し、その印象を尋ねたものである。しかしこの場合も、抱擁場面の当事者は演技者であり、実験参加者ではない。すでに述べたモンタギューの著書も、動物実験の結果、あるいは新生児から乳幼児に対する接触の効果について述べたもので、成人の接触行動については観察や逸話の紹介にとどまっていると言える。接触行動について比較的最近の研究を紹介した山口の概説書 (山口, 2003) においても、臨床的、治療的側面からの接触を除いて、成人の接触行動の実験例はほとんど紹介されていない。

Knapp と Hall は非言語コミュニケーションの教科書の中で、接触行動おけるやや実験的な研究を 3 つ挙げている (Knapp & Hall, 1997)。その一つは、書籍の借出し手続き時に学生に対して、図書館員が学生の手に軽く接触するかどうかという条件を操作した実験である (Fisher, Rytting, & Heslin, 1976)。この研究では約 50 名ずつの男女大学生に対して、図書借出し直後に現在の感情状態評価、図書館職員の評価、図書館の環境評価を依頼した。その結果、いずれの項目においても接触の効果は有意であったが、その効果は主として女子学生に対する効果であった。

また、別の実験では、2 つのレストランのウェイトレスが客に釣り銭を渡すときに客の手または肩に触れるかどうかという条件が用いられた (Crusco and Wetzel, 1984)。接触がある場合のほうがチップの額が多かったが、ウェイトレス自身に対する評価、レストランに対する評価、またレストランへの支出額とは無関係であった。

3 つめの実験は性格検査を実施したあと、被験者に対して実験助手の採点作業を手伝ってほしいが手伝わなくてもよいという依頼を行う事態で行われた(Patterson, Powell, and Lenihan, 1986)。依頼の際に実験者が被験者の肩にさわるかどうかによって依頼が実行されるかどうかを調べた。被験者は 120 名の男女学生であり、実験者は女性または男性であった。実験の結果、肩への接触がある条件のほうが実験者の依頼に従って採点作業への手伝い行動が有意に増加したが、これは主として女性実験者が女子学生に対して依頼する場合に手伝い行動が増加したからであった。

2-7 まとめ

成人の接触行動の実験例が少ないのは、実験的なコントロールのもとで成人男女の身体の各部位に実際に接触することが倫理的に困難であることが原因であろう。そして、接触実験が倫理的に困難であるというそのこと自体が、接触行動がもつ社会的重要性と、また、接触行動に対して適用される社会的規範の厳しさを示しているといえるだろう。つまり、それぞれの接触行動には社会的な意味があるということである。次章以降で述べる筆者の調査も、直接に接触行動を取り扱うのではなく、接触行動の有無について尋ねる方法を用いる。

引用文献

Barnlund, D.C. (1975). Public and private self in Japan and the United States : communicative styles of two cultures. Tokyo: Simul Press. (西山千・佐野雅子(訳)(1979)『日本人の表現構造』 サイマル出版会)

Christopher, R. C. (1983) (クリストファーR.C.(著)、徳山二郎(訳)(1983)『ジャパニーズ・マインド』講談社)
(林(1984)による引用)

Crusco, A.H. and Wetzel, C.G. (1984). The Midas Touch: The effects of interpersonal touch on restaurant tipping. Personality and Social Psychology Bulletin, 10, 512-517. Cited in Knapp & Hall (1997).

Fisher, J.D., Rytting, M. and Heslin, R. (1976). Hands touching hands: Affective and evaluative effects of an interpersonal touch. Sociometry 39, 416-421. Cited in Knapp & Hall (1997).

Floyd, K. (1999). All touches are not created equal: Effects of form and durations on observers' interpretations of an embrace. Journal of Nonverbal Behavior, 23, 283-299.

Hall, E.T. (1966). The hidden dimension. New York: Doubleday & Co., Inc. (日高敏隆・佐藤信行(訳)(1970)『かくれた次元』みすず書房)

林建彦 (1984). 「日本人と韓国人との表現構造比較研究 ーD.C.バーンランドの日・米比較を基礎としてー」東海大学文学部紀要

Hecht, M.L., Andersen, P.A., & Ribeau, S.A. (1989). The cultural dimensions of nonverbal communication. In M.K. Asante & W.B. Gudykunst (Eds.), Handbook of

international and intercultural communication. Newbury, CA: Sage. Cited in McDaniel & Andersen (1998).

Jourard, S.M. (1966). An Exploratory study of Body-Accessibility. British Journal of Social and Clinical Psychology, 5, 221-231.

Knapp, M.L. and Hall, J.A. (1997). Nonverbal communication in human interaction (4th Ed.). Florida: Harcourt Brace College Publishers.

McDaniel, E. and Andersen, P.A. (1998). International Patterns of Interpersonal Tactile communication: A field Study. Journal of Nonverbal Behavior, 22, 59-75.

Montagu, A. (1971). Touching: The human significance of the skin. New York : Columbia University Press. (佐藤信行・佐藤方代 (訳) (1977)『タッチング：親と子のふれあい』平凡社)

Morris, D. (1977). Man watching. New York: Harry N. Abrams, Inc. (藤田統 (訳) (1980)『マンウォッチング』小学館)

仁平義明・残間理恵・平田忠・Foster, M. (1997a).「身体的接触に反映された親子関係の文化的差異(1)」『東北心理学研究』 47, pp. 46

仁平義明・残間理恵・平田忠・Foster, M. (1997b)「身体的接触に反映された親子関係の文化的差異(2)」『東北心理学研究』 47, pp. 47

仁平義明・残間理恵・平田忠・Foster, M. (1997c)「身体的接触に反映された親子関係の文化的差異(3)」『東北心理学研究』 47, pp. 48

仁平・残間, (1997). 仁平義明・残間理恵 (1998)「親子の身体的接触に関する研究(3)」『東北心理学研究』 48, pp. 38

Patterson, M.L., Powell, J.L., and Lenihan, M.G. (1986). Touch, compliance, and interpersonal affect. Journal of Nonverbal Behavior. 10, 41-50. Cited in Knapp & Hall (1997).

Remland, M.S., Jones, T.S., & Brinkan, H. (1991). Proxemic and haptic behavior in three European countries. Journal of Nonverbal Behavior, 15, 215-232. Cited in McDaniel & Petersen (1998).

Shuter, R. (1977). A field study of nonverbal communication in Germaniy, Italy, and the United States. Communication Monographs, 44, 289-305. Cited in McDaniel & Petersen (1998).

鈴木晶夫・春木豊 (1989).「対人接触に関する試験的研究」 早稲田心理学年報, 21, pp. 93-98.

山口 創 (2003). 「愛撫・人の心に触れる力」 NHKブックス 日本放送出版協会

第3章　研究方法の検討

3-1　先行研究で使用された方法

身体的接触に関して、先行研究ではさまざまな研究方法が用いられている。文化人類学は人間の生活や活動の具体的なあり方を研究する。文化人類学的な研究方法は事例調査を用いることが多く、具体的なしぐさやしぐさの意味に注目し、それらを解釈することに重点をおく。観察により、民族・社会間の文化や社会構造などを比較研究することで、問題を明らかにする。この方法で得られる事例研究は具体的で興味深いが、例数が限られるために、接触行動の場合、個々人が接触する相手別の接触頻度や、身体部位ごとの接触頻度などについての量的な調査は必ずしも容易ではないようである。

前章では主として心理学的な研究を中心に主要なものを概観したが、多くは質問紙調査であり、観察研究は多くない。実験的研究はさらに少ないと思われるが、これは実験事態において、実験参加者に、他の参加者や実験協力者との身体接触行動を行わせることが容易ではないからである。

心理学的なアプローチでは、ジュラードがアメリカ合衆国において行った研究が最初であろう（Jourard, 1966）。ジュラードが行った調査は質問紙法による調査であった。彼は人の身体部位を24部分に分け、身体接触を量的に調査することを初めて試みた。彼の研究では、親や友人などの接触相手ごとの接触行動を、接触者の性別を含めて調査することができた。ジュラードはアメリカ合衆国内の大学生のみを調査したが、後継する研究に新しい研究方向を与えた点で重要である。

鈴木らはジュラードの研究手法を用いて、日本での調査を行った（鈴木・春木, 1989）。この調査では日本における大学生の身体接触の現状について、ジュラードとほぼ同一の方法を用いて調査を行っている。接触者の性別と接触相手別に、接触する身体部位や頻度を調べ、その結果をジュラードの調査結果（Jourard, 1966）と比べることができた。接触頻度の高い部位は日米で類似していることが分かったが、ジュラードの研究とは調査時期が異なるため、時代の変化の要因があるとすれば、直接の比較は難しい。

ジュラードや鈴木・春木の研究方法は、言うなれば、ひとつの国や地域、あるいはひとつの民族の特徴を見るために、その国や地域、民族の人たちがどのように身体的接触を行うのかを検討することである。これらの研究結果をいくつか比較することで、いわゆる文

化間比較が可能になる。これに対して、はじめから異文化間比較を意図して、異なる民族や、異なる地域に住む人たちに同一内容の調査を行う例もある。身体接触行動において、国と国、あるいは地域と地域の間には差が存在するかどうか、存在するとすればどのくらい違うのかを調査する研究である。例えば、バーンランドの日米比較研究（1975）や、林の日韓比較研究（1984）がこれにあたる。

これらの質問紙による研究は、特定の接触相手と身体の部位を提示して、「どの部分を触るか（触らないか）」、「どの程度よく触るか」を評定させるものである。比較的短時間に広範囲な接触行動に関する資料を集めることができる反面、実際に回答のような接触行動が生じているのかどうかについては検証ができない。従って、これらの質問紙による調査は、実際の接触行動を反映するのではなく、回答者が持っている社会的規範に照らして、回答してもよい、あるいは回答すべきであると考えた身体部位や接触頻度を反映しているのだと考えねばならないかもしれない。おそらくは、先行研究において、公的場面（公衆の目の前）で行う接触行動と、私的場面での接触行動に、それほど大きな違いがなかったこと（接触頻度の相関が高かったこと）は、この規範の存在が影響しているのであろう。つまり、公的場面であれ私的場面であれ、接触してよいと考えられる身体部位には社会的な制約があると考えてよいであろう。

一方、観察による比較的少数の研究結果は、例えば McDaniel と Andersen（1998）のように、接触者と被接触者は限定されるものの、大きくみれば、質問紙調査の結果を再確認するような結果を示している。もちろんこのことは、McDaniel らの研究が公衆の前で行われる接触行動について観察した結果であることを考慮しなければならない。つまり、公衆の前で行われる接触行動は、当然のことながら、その接触者たちがもつ社会的規範に沿って行われるはずだからである。

従って、観察による調査にせよ質問紙による調査にせよ、調査結果は被調査者が属する社会集団に特有の、接触に関する規範を反映するものとなることはやむを得ない。また、非言語行動そのものが、多くの場合、それぞれの社会の規範の反映であろうと思われるから、接触行動のような非言語行動を複数の社会間で比較することは、たしかに文化の比較であると言うことができるであろうし、また、それぞれの社会の内部における規範の厳しさ（あるいは柔軟性）、地域差、社会的階層差等について知見を得るために役に立つであろう。

3-2　接触行動を決定する要因

多くの先行研究が示すように、接触行動を行った人の属する国や地域、性別、接触相手との人間関係、発達段階における違いによって、身体的接触が異なるであろうことは容易に考えられる。先行研究が示す、あるいはそれらから推測される、身体接触行動に影響すると思われる要因としては、以下のことがらが考えられるだろう。

1) 国籍や地域による違い
2) 接触者・接触対象（接触相手）の性
3) 両者の関係
4) 発達段階
5) 受動的接触と能動的接触
6) 宗教

3-2-1　国籍や地域

多くの先行研究が、国や、いくつかの国を含む広い地理学的地域による接触行動の違いを想定している。例えばHechtら（1989）は、気候とコミュニケーションの仕方には関連があると考えている。同様の考え方は、日本でも、例えば和辻（1971）によって提案されている。

しかし、国の地理学的、気象学的条件から非言語行動の特徴を説明することは、かならずしも有効ではない。第2章で紹介したMcDaniel & Andersen （1998）は、北方では非接触的であり、南方は接触的であるという素朴な認識が正しいとは言えないことを示している。本論文の出発点である呉の研究（2006）においては、同じ国の国内であっても、それぞれの地域により、非言語行動にはかなりの多様性があることがすでに示されている。

3-2-2　性

また、接触者と接触相手の性は、接触行動の要因として重要である。これは、両者の関係性とも関わっている。先行研究の多くは、同性親、異性親、同性友人、異性友人を接触

相手として区別している。第2章で述べたように、異性友人は必ずしも配偶者の候補者ではない。第5章で少し詳しく述べるが、接触行動は基本的に生殖と養育に関わる行為であり、現代社会においては、もっとも接触行動が多くなる対象として配偶者を想定するべきであろう。しかし今回の調査では大学生が対象であり、ほとんどが未婚であると考えられる。従って異性友人以外に、配偶者の候補者として、恋人というカテゴリーを加えて調査を行う必要があると考えられる。

3-2-3　関係性

接触行動においては親疎の要因が関わると考えられる。しかし親しい人間関係を持たない相手との身体的接触は、儀礼として、欧米や現代中国であれば握手を、また日本であればお辞儀をすることがいわば標準であり、それ以外の身体接触がなされるとは考えられないため、本研究においては親疎の条件は考慮しないことにする。

もう一つの要因は上下関係である。疎遠な関係であれば上位・下位にかかわらず身体的接触はほとんど見られないと思われる。親しい上位者、親しい下位者に対する接触行動について調査することは興味深いが、先行研究において比較の対象がないため、これについても考慮の対象とはしなかった。しかし今後、研究を発展させる一つの方向として、この問題は重要であろう。

3-2-4　発達段階

各発達段階における接触行動は、観察による方法がもっとも適当である研究領域であろうと思われる。これについても、比較対象となる先行研究が見あたらないこと、また、各発達段階を網羅的に追って観察を行うことは時間的制約の中ではほとんど不可能であると思われた。第5章で述べられる発達的調査は、大学生に対して、記憶に基づいて接触行動の有無を尋ねるものであるから、決して最適のものであるとは言えないが、先行研究結果との比較が可能であること、接触行動の規範が各発達段階によって異なるという側面については妥当性があると考えられたため、実施した。

3-2-5　受動的接触と能動的接触

ジュラードの研究では能動的接触と受動的接触を区別して調査している（Jourard, 1966)。これについてバーンランドは、「この二つの行為を比較すると、『触ること』と『触られること』の頻度は共に増減して・・・日米ともきわめて一致した一貫性がある。」と述べている（Barnlund, 1975, 邦訳書 pp. 122)。本研究の調査目的が接触行動に関わる規則（規範）の比較である（ごくまれに特殊な身体部位への接触があるかどうかという問題は考えない）ことから、バーンランドの調査と同様に、身体部位について「触るかどうか」のみを調査することにした。

3-2-6　宗教

ジュラードがキリスト教を信じる学生とユダヤ教の学生との間に接触行動の違いを見いだしており（第2章参照)、宗教について尋ねることは、本来は必要なことであろうと思われる。それは、宗教の教義が接触行動に対して規範として作用することがあると考えられるからである。ただ、特定の宗教の信者であることと身体接触行動との間に何らかの関連性が統計処理の結果として見られたとしても、その関連性のメカニズムを心理学の立場から明らかにすることは困難であろう。東アジアの接触行動と儒教の関連について述べた論文もあるが（McDaniel and Andersen, 1998)、儒教は宗教と言うより社会的規範であり、儒教の「信者」に特有な接触行動があるわけではない。つまり、宗教的な規範は社会的規範から特に区別されるわけではないであろう。

心理学の方法論にとっては、接触行動の比較から宗教的要因を含んだ社会的規範の存在を明らかにすることのほうが、本来の研究の場となるであろう。さらに、中日比較に限って言えば、筆者自身の体験上、どちらの国の大学生についても、身体的接触を抑制したりあるいは促進したりする特定の教義をもつ宗教の信仰者はごくわずかであろうと考えられた。これらの理由から、第4、5章でのべる研究の質問項目からは宗教についての質問は省くことにした。

3-3 分析法の基本概念

身体的接触行動：身体接触(タッチング)行動は対人コミュニケーションにおいて、一者の身体の一部を他者の身体の一部に接触させることによって、情報伝達を行う行動のことを指す。本研究では具体的な動作を扱わない(に触れない)が、握手、キス、抱擁など、日常におけるあいさつ行為、または会話の際に発話に伴い、相手の体に触れ、慰めや好意、親近感を表そうとする行為全体を含む。また、基本的に本研究では、手で他者の身体部位に触れることを念頭において調査する。

接触相手の分類：ジュラードの研究(Jourard, 1966)やバーンランドの研究(Barnlund, 1975)においても、質問表の中で設けられた「接触相手」は父親、母親、同性友人及び異性友人の4種類であった。しかし本研究においては「異性友人」は「親しい、仲の良い普通の友だち」を指し、恋愛関係にある対象は「恋人」として区別する。

接触率：本研究で述べる接触率は回答者から得た全ての反応（接触の有無）を合計し、人数で割ったものを、パーセンテージで表す値を指す。

説明要因：接触率の変動を説明する要因として男女の性、国または調査地点、接触相手、接触状況（公的状況または私的状況）を想定した。接触率を示す図を描く時に、先行研究では 0～25％、26～50％、51～75％、76～100％の 4 段階に分けられていた（Jourard, 1966;Barnlund, 1975)。しかし、呉の調査結果（2006）では接触頻度がそれほど高くなかったため、同様の分け方を採用すると部位別の接触率が目に見えず、接触行動の違いがわからない可能性があった。ここでは、0～12.5%、12.6～25%、25.1～50%、50.1～100%の四段階に分けた。

引用文献

Barnlund, D.C. (1975). Public and private self in Japan and the United States : communicative styles of two cultures. Tokyo: Simul Press (西山千・佐野雅子(訳)(1979)『日本人の表現構造』 サイマル出版会)

呉映妍 (2006). 「身体接触行動における中日比較」 未発表修士論文 神戸大学大学院総合人間科学研究科

Hecht, M.L., Andersen, P.A., & Ribeau, S.A. (1989). The cultural dimensions of nonverbal communication. In M.K. Asante & W.B. Gudykunst (Eds.), Handbook of international and intercultural communication. Newbury, CA: Sage. Cited in McDaniel & Andersen (1998).

Jourard, S.M. (1966). An Exploratory study of Body-Accessibility. British Journal of Social and Clinical Psychology, 5, 221-231.

McDaniel, E. and Andersen, P.A. (1998). International Patterns of Interpersonal Tactile communication: A field Study. Journal of Nonverbal Behavior, 22, 59-75.

鈴木晶夫・春木豊 (1989).「対人接触に関する試験的研究」 早稲田心理学年報, 21, pp. 93-98.

和辻哲郎 (1971). 風土 岩波書店 (初版発行は 1935 年、改訂版 1963 年。ここでは第 38 刷による)

第4章　接触部位と接触率

4-1　はじめに

本研究は、呉（2006）において行われた、中国人大学生と日本人大学生の身体接触行動に関する研究を拡張したものである。呉（2006）は、Jourard（1966）、Barnlund（1975）、鈴木と春木（1989）を参考に、日本の大学1校で接触行動一般に関する予備調査をしたあと、中国の4つの地域のと日本の2つの地域の大学生の身体接触行動を、性別、接触対象者（接触相手）の属性別、接触する身体部位別に、接触の有無について質問紙を用いて調査した。本研究ではさらに、中国と日本で調査地域を1カ所ずつ加え、中国の5カ所、日本の3カ所を調査対象地区とした（本論文の巻末に「調査地域分布図」を資料2として収めた）。調査の主眼は中国と日本の大学生の接触行動を男女別に比較することであるが、同一国内における地域差の問題や、公的・私的場面における接触行動の比較にも分析対象を広げる。

4-2　方法

4-2-1　調査用質問紙

調査には、呉（2006）と同様に、Jourard（1966）と Barnlund（1975）において使用された身体部位の図（図2-1）を用いた。調査に用いた質問紙は、呉（2006）と同様であり、本論文の巻末に、日本語版「身体接近度についてのアンケート」を資料5として、また中国語版「关于身体接近度的调查」を資料6として収めた。

4-2-2　調査対象地域と対象者

調査対象地域は、中国においては北京、南京、武漢、蘭州、廈門の5カ所であり、日本においては神戸、大阪、仙台の3カ所である。呉（2006）では中国の4カ所、日本の2カ所が調査対象であった。これらに中国の比較的南に位置する廈門と、日本の比較的北に位置する仙台を加え、同一国内における接触行動の多様性の検討をさらに進めることにした。

調査は、大学の授業中に調査用紙を配布し、回答時間を設け、その場で回収するという方法をとった。調査時期は2005年の秋である。中国における調査対象者は、北京市では北京林業大学と北京航空航天大学の学生を対象に 99 名、蘭州では蘭州大学の学生を対象に100名、南京では南京理工大学を対象に99名、武漢では武漢大学を対象に96名、廈門では廈門大学を対象に92名であった。日本における調査対象者は、神戸大学の学生を対象に210名、大阪国際大学の学生を対象に60名、仙台の東北学院大学の学生を対象に112名であった。

4-2-3 調査内容

調査では、調査時点における接触行動について調べるほか、記憶に基づいて小学校入学以前からの接触行動についても訪ねた。まず出身地、学年、年齢、性別、家族構成、魅力度の自己評価について尋ねた。次に調査項目1として、被調査者の父親、母親、同性友人、異性友人、恋人の5種を接触相手として選び、これらの人物の各身体部位について、過去1年間に、公的場面、あるいは私的場面において接触した、あるいは接触された場合は 1 を記入し、接触がなかった場合には0を記入するよう求めた。

調査項目2としては、同様の接触相手ごとに、過去1年間に接触したかった、あるいは接触されたかった部位に「2」を、触られたくなかった部位に「0」を、どちらでもない部位に「1」を記入するよう求めた。

調査項目3としては、自分が生まれてから現在に至るまでの期間を発達的に6段階に分け、それぞれの段階において、5通りの接触相手ごとに、接触を受けた程度を10段階で評価させた。なお、発達の6段階は、幼稚園（小学校入学以前）、小学校1年ー3年、小学校4年ー6年、中学生、高校生、大学生（現在）である。

本章では調査項目1の結果について分析し、結果を示して考察を加える。調査項目3については、次章の第5章で詳述する。調査項目2については、本論文では分析の対象としていない。

なお、本章でとりあつかう資料は、身体の各部位ごとに、特定の相手との間に接触行動があったかどうかを「ある」「ない」で答えさせたものである。例えば同性友人を対象にして、仮に被調査者全員が「手」の部位について接触が「ある」と答えた場合、接触率は100%になる。また、仮に「足首」について、被調査者の全員が「ない」と答えたとすれば、接

触率は0%になる。

4-3　接触率に関する結果

4-3-1　部位別接触率の男女比較

第1章で触れたように、接触行動には社会的な意味以前に生物学的な意味がある。したがって、国や地域、接触相手、接触場面等について分析を進める前に、まず男子と女子の接触行動を比較することが必要であろう。全被調査者のデータを男子と女子に分け、その他の条件はすべて込みにして接触率を求めた。その結果を図4-1に示す。なお、正面向き顔面の各部位は面積的に小さいため、この図では顔面部分を大きく表示している（以下同じ)。また、図では接触率について、0-12.5%、12.6-25%、25.1-50%、50.1-100%の4段階で示しているため、接触率が段階区分に近い場合、視覚的印象が接触率の実態からはずれることがある。それぞれの部位についての接触率は表4-1に示した。

図から見てとれるように、男女とも頭頂部、手・腕、肩への接触率が高く、第10部位（腰）への接触率が低い。また、手から腕にかけて、男子より女子の場合に接触率の高い部位が多い。表4-1から、24部位のうち、女子より男子の接触率が高いのは第5，8，10、23の4部位であることがわかる。そのうち、第8部位（胸部）を除く3部位は男女の差がほとんどない。胸部は女子より男子の接触率が高い唯一の身体部位であると言えそうである。

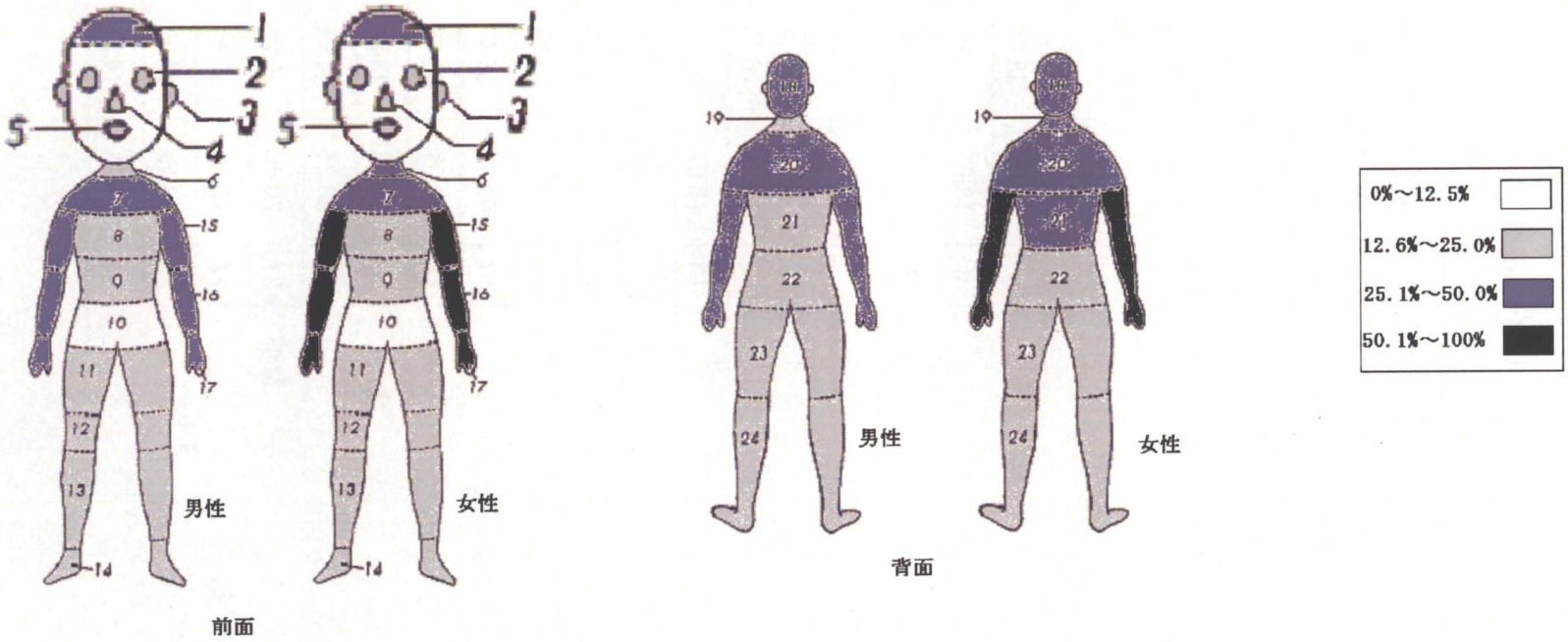


図４-１　性別で比較した身体部位による接触率

表 4-1 接触率の男女比較

部位		男性	女性
頭部	1	34.9%	45.2%
	2	12.7%	14.8%
	3	18.2%	23.2%
	4	14.3%	16.7%
	5	13.8%	13.3%
	6	20.6%	25.5%
胴体	7	30.8%	35.6%
	8	18.2%	14.9%
	9	17.5%	21.2%
	10	11.9%	10.9%
足	11	15.4%	16.9%
	12	15.3%	16.9%
	13	15.6%	16.5%
	14	15.5%	16.1%
手	15	39.0%	53.4%
	16	40.1%	55.8%
	17	47.5%	60.4%
背部	18	28.0%	38.3%
	19	23.6%	28.2%
	20	33.2%	44.7%
	21	20.8%	28.2%
	22	15.1%	16.8%
	23	13.1%	12.7%
	24	13.2%	14.2%

4-3-2　部位別接触率の中日比較

身体接触行動が中国と日本で異なっているかどうかをもっとも簡易に比較するためには、接触場面、接触相手を問わず、身体部位ごとに、中国人全員のデータを基にした接触率と日本人全員のデータを基にした接触率を図示することがよいであろう。しかし 4-3-1 で男女の接触行動に違いのあることが見て取れたので、男女のデータを平均することは望ましくないであろう。そこで、中日の国別及び男女の性別ごとに、身体部位による接触率を図示した（図 4-2a, b)。それぞれの部位の接触率そのものは表 4-2 に示した。

接触する身体部位については図 4-2 が示すように、接触率の高い部位と低い部位とが区別されている。図から分かるように、国や性別にかかわらず、手、腕、肩、頭部への接触が多く、腰の周囲への接触は少ない。これらは先行研究の調査結果で報告された部位ごとの接触率と概ね一致している（Jourard, 1966 ; Barnlund, 1979)。また、男子の場合には中国と日本の差がほとんど見られない。一方、女子では、男子にくらべて接触率が高いが、中国人女子よりも日本人女子のほうが肩から上腕部に対する接触率が高い。つまり、もっとも単純には、男子は国にかかわらず接触率においてよく似ており、女子では男子より接触率が高いが、日本人女子のほうが接触率の高い部位が多いと言うことができる。

図 4-2 では日本人男子の 10 番部位（腰）への接触が日本人女子や中国人男女と比べて多いように見えるが、表 4-2 を見るとこの違いは、日本人男子において色分け基準値をわずか 0.6%越えているだけの違いであることがわかる。また、図からは読み取りにくいが、表から、顔面の各部位（2 番から 5 番）については日本人よりも中国人において接触が多いことがわかる。この反対に、肩に当たる 7 番と 20 番の部位では、日本人男女のほうが中国人男女より接触が多い。

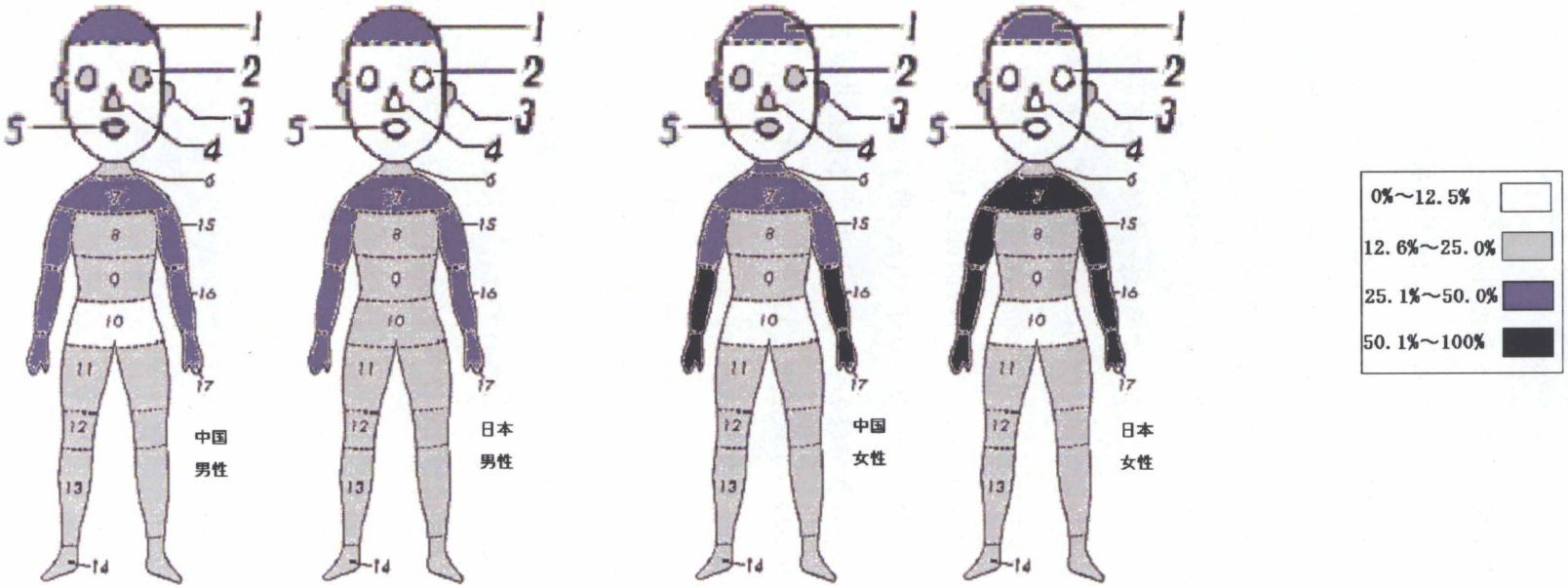


図４-２　中日の国別及び性別で比較した身体部位による接触率　――　a.正面

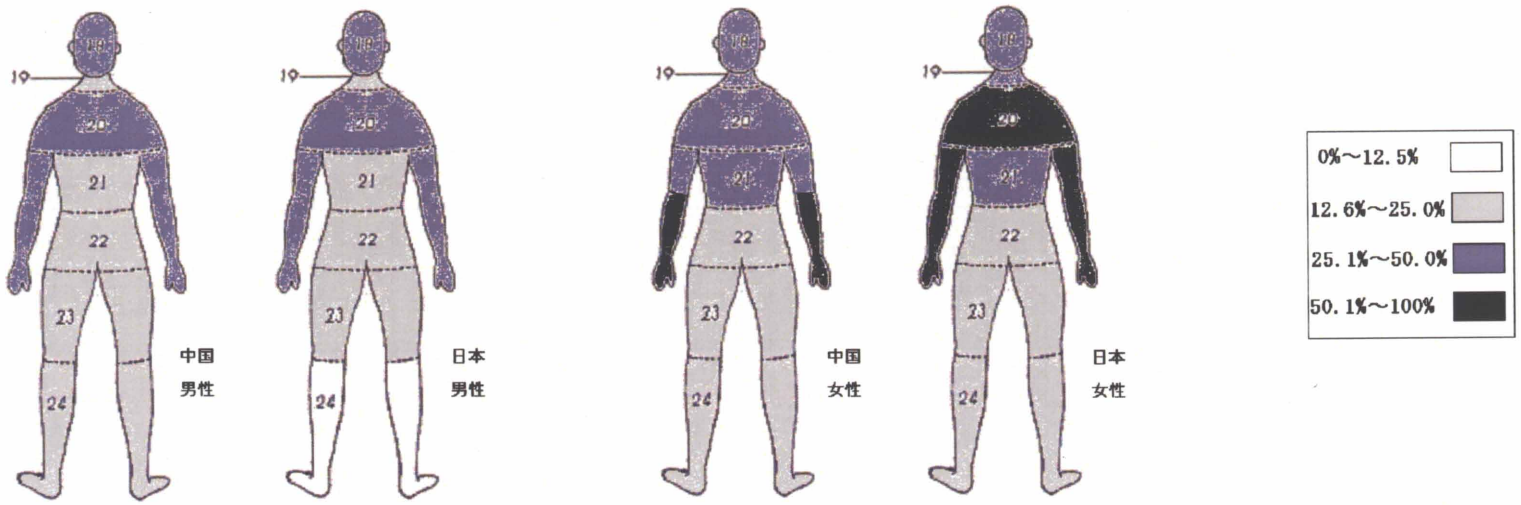


図４-2　中日の国別及び性別で比較した身体部位による接触率　――　b.背面

表 4-2 接触率の中日の国別および男女の性別比較

部位		男性		女性	
		中国	日本	中国	日本
頭部	1	33.0%	38.7%	42.9%	49.6%
	2	16.1%	7.5%	19.0%	7.8%
	3	20.8%	14.0%	28.0%	15.1%
	4	16.0%	11.4%	19.9%	11.7%
	5	14.7%	12.3%	14.2%	11.6%
	6	22.0%	19.5%	27.6%	21.5%
胴体	7	25.3%	39.8%	27.0%	50.9%
	8	17.9%	18.8%	13.2%	17.7%
	9	15.9%	20.1%	20.9%	21.5%
	10	11.3%	13.1%	10.2%	11.9%
足	11	15.6%	15.6%	15.7%	19.1%
	12	16.4%	13.4%	17.0%	16.5%
	13	15.9%	15.2%	16.1%	16.7%
	14	16.4%	14.3%	15.4%	16.4%
手	15	37.8%	41.8%	48.4%	63.5%
	16	40.6%	38.7%	53.4%	61.2%
	17	48.0%	46.9%	59.8%	62.3%
背部	18	27.2%	29.7%	36.2%	42.1%
	19	24.8%	21.9%	28.6%	27.4%
	20	28.5%	41.2%	38.5%	55.8%
	21	19.8%	22.8%	27.4%	29.5%
	22	13.9%	17.4%	15.9%	17.9%
	23	12.9%	13.8%	12.6%	12.9%
	24	14.0%	12.3%	14.2%	13.7%

4-3-3　部位別接触率の地域比較

同じ国内であっても、調査地域ごとに接触率に違いがある可能性がある。そこで、中国の5カ所、日本の3カ所の調査地域ごとに、男子と女子の部位別接触率を、図4-3（a～f）と表4-3に示した。ここでは接触場面、接触相手は込みにして集計している。

図から分かるように、いずれの地域においても、また男女とも、手から上腕、肩、頭部の接触率が高く、腰の周囲への接触率が低いことは前項の国全体の接触率と概ね一致している。しかし地域によって、接触率に変動が見られる。部位別の接触率を見ると、中国人男子の場合、南京では高い接触率の身体部位が多く、アモイでは接触率の低い身体部位が多い。中国人女子ではアモイにおける接触が少ない。日本人では神戸の女子で第7部位への接触率の高さ（60.8%）が目立つ。大阪の男子で高い接触率の身体部位が多いように見受けられる。顔面については日本より中国において接触率が高いが、日本の中では大阪の男子の接触率が高い。

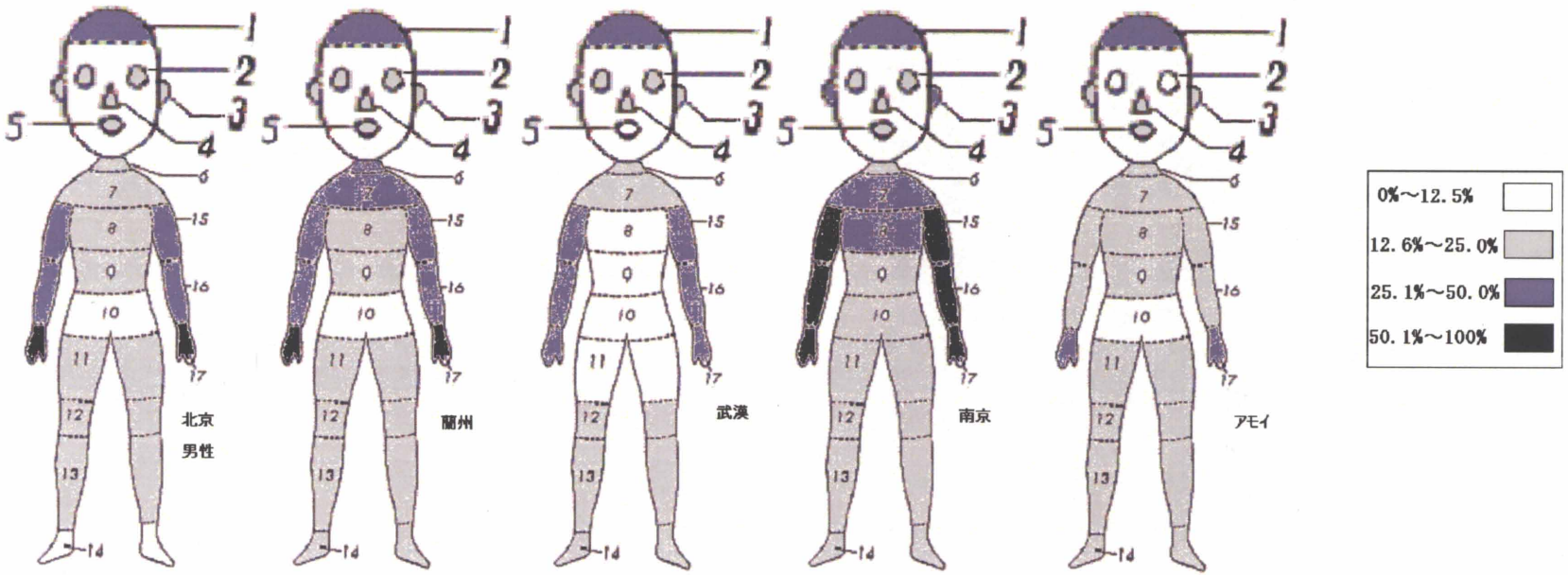


図４-３　地域および性別で比較した身体部位による接触率　――　a.中国人男性の正面

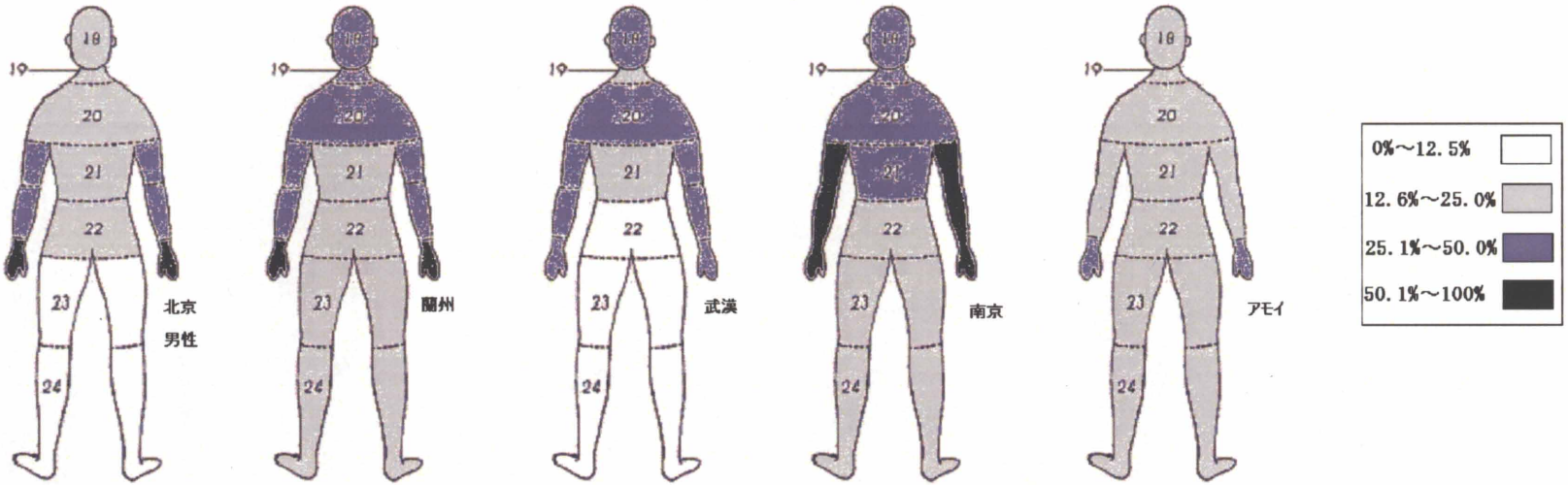


図 4-3　地域および性別で比較した身体部位による接触率　――　b.中国人男性の背面

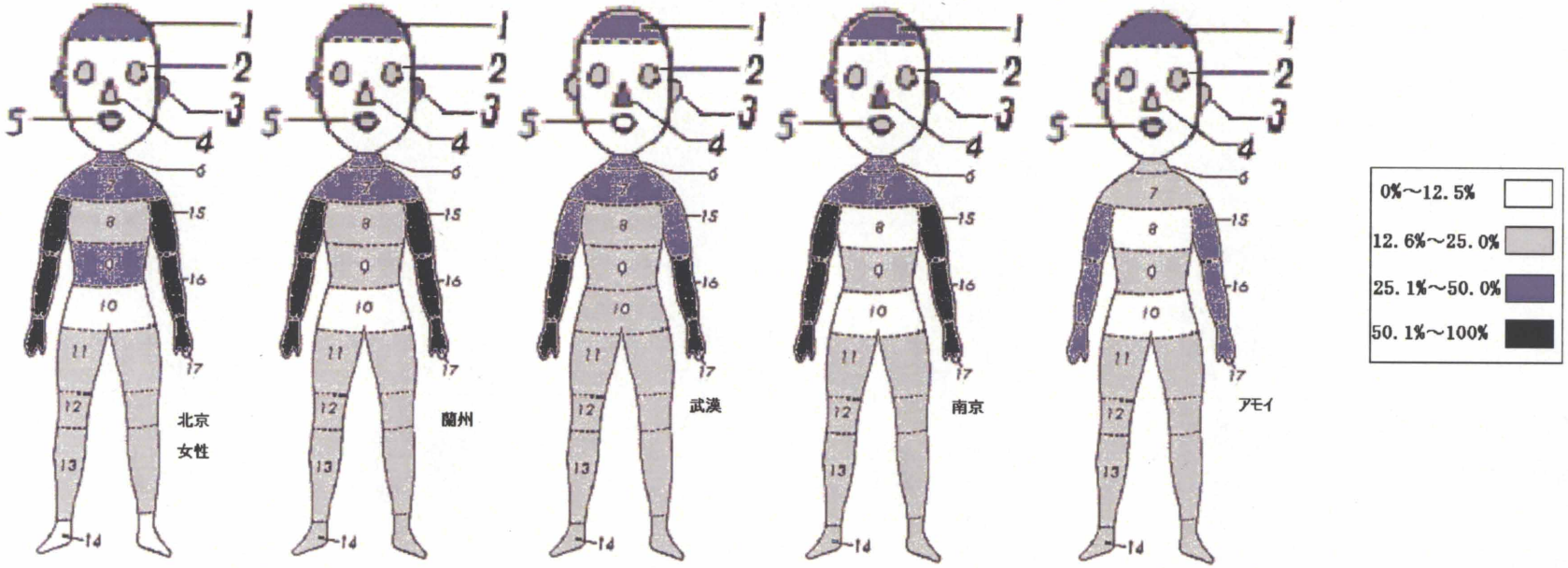


図 4-3　地域および性別で比較した身体部位による接触率　――　c.中国人女性の正面

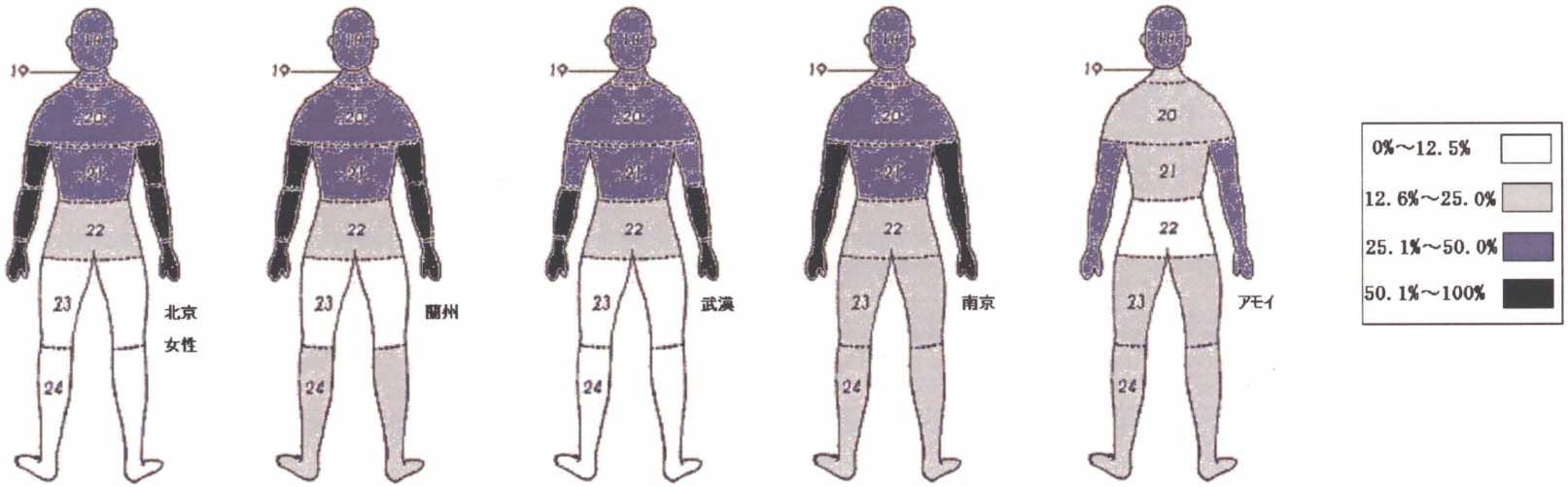


図 4-3　地域および性別で比較した身体部位による接触率　――　d.中国人女性の背面

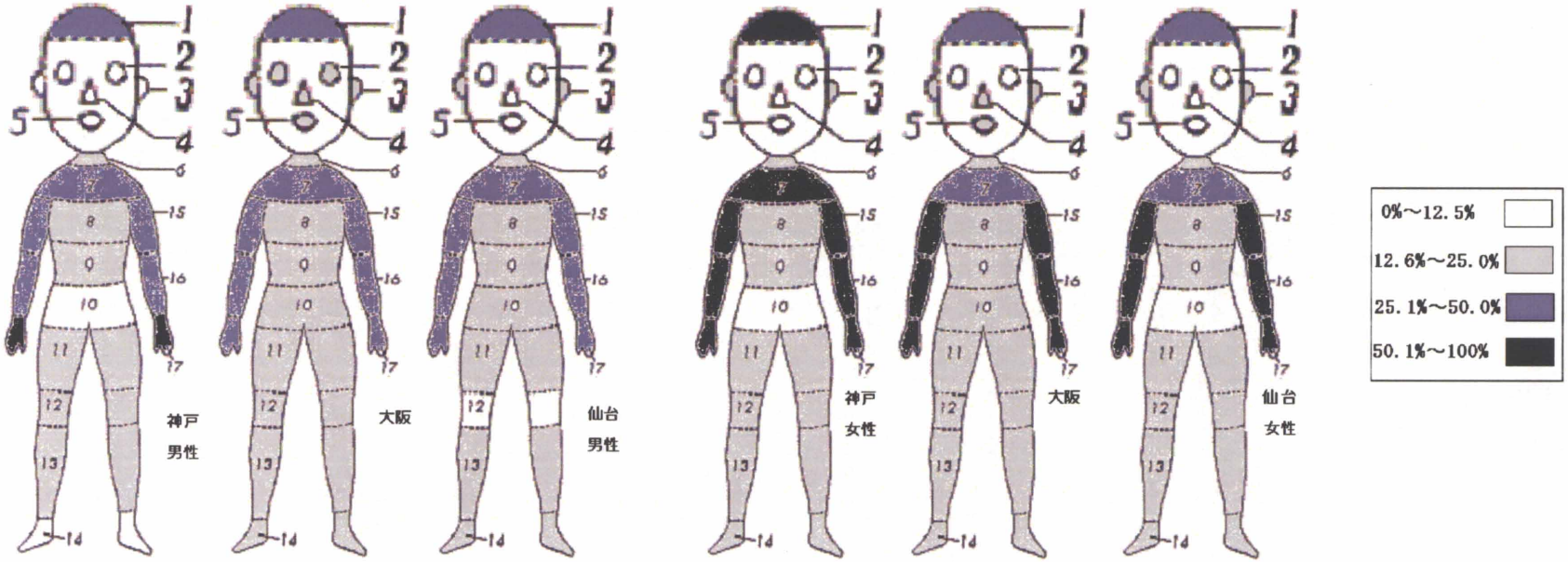


図 4-3　地域および性別で比較した身体部位による接触率　――　e.日本人男女の正面

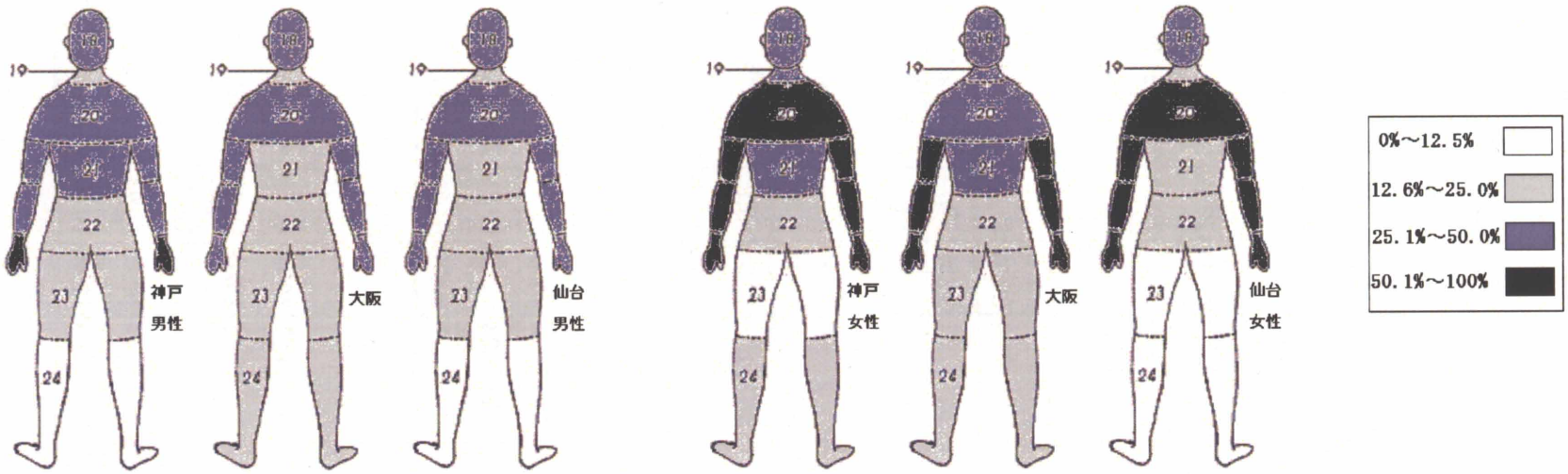


図 4-3　地域および性別で比較した身体部位による接触率　――　f.日本人男女の背面

表 4-3 接触率の地域別および性別の比較

部位		男性								女性							
		北京	蘭州	武漢	南京	アモイ	神戸	大阪	仙台	北京	蘭州	武漢	南京	アモイ	神戸	大阪	仙台
頭部	1	28.3%	37.8%	33.5%	39.0%	26.3%	42.0%	32.9%	41.4%	43.6%	43.4%	46.5%	47.0%	33.9%	53.5%	49.4%	46.0%
	2	16.6%	15.7%	15.0%	20.4%	12.6%	5.2%	13.5%	4.0%	16.4%	23.5%	19.9%	20.4%	14.8%	6.5%	9.3%	7.6%
	3	20.1%	24.5%	18.2%	25.2%	15.9%	10.2%	18.1%	13.8%	33.1%	29.2%	26.7%	31.9%	19.4%	14.0%	18.5%	12.7%
	4	16.4%	16.7%	13.2%	19.9%	14.0%	5.7%	17.8%	10.6%	16.1%	23.8%	17.0%	25.3%	17.3%	11.0%	14.6%	9.3%
	5	15.2%	15.5%	10.4%	18.1%	14.3%	8.4%	18.3%	10.1%	14.9%	14.5%	12.4%	14.1%	15.2%	10.9%	12.7%	11.3%
	6	20.1%	26.7%	20.7%	24.2%	18.2%	21.8%	19.8%	17.0%	31.0%	31.8%	28.0%	30.1%	17.1%	22.2%	22.0%	20.2%
胴体	7	23.7%	27.7%	18.9%	36.3%	19.7%	45.2%	33.8%	40.3%	30.5%	27.7%	30.0%	28.9%	17.9%	60.8%	46.1%	45.7%
	8	14.4%	18.1%	11.9%	29.8%	15.3%	16.6%	21.3%	18.4%	16.5%	13.1%	14.9%	11.1%	10.5%	16.9%	21.6%	14.4%
	9	14.0%	17.3%	12.5%	20.5%	15.5%	21.1%	18.1%	21.0%	30.7%	19.5%	22.2%	19.2%	13.1%	22.6%	22.2%	19.6%
	10	9.8%	12.8%	5.7%	15.5%	12.5%	10.0%	16.2%	13.1%	11.7%	8.8%	12.6%	9.2%	8.5%	12.1%	14.7%	8.8%
足	11	13.4%	16.3%	9.9%	24.8%	13.8%	15.2%	15.3%	16.3%	19.3%	15.1%	13.3%	17.1%	13.5%	19.4%	20.4%	17.5%
	12	14.1%	17.6%	13.3%	22.7%	14.5%	13.2%	14.6%	12.5%	17.0%	17.7%	14.1%	20.2%	16.0%	15.1%	19.7%	14.7%
	13	12.8%	16.8%	14.9%	20.6%	14.5%	13.0%	15.6%	16.8%	13.3%	16.7%	16.2%	19.3%	15.3%	13.8%	21.1%	15.1%
	14	12.0%	19.0%	15.3%	21.7%	14.1%	11.8%	15.6%	15.6%	8.1%	17.1%	17.5%	19.4%	14.7%	14.3%	22.0%	12.7%
手	15	40.1%	42.2%	33.0%	50.2%	23.4%	46.1%	39.6%	39.9%	55.4%	52.2%	46.6%	58.7%	29.0%	73.7%	59.3%	57.6%
	16	41.0%	46.1%	38.1%	53.9%	23.8%	42.0%	36.3%	38.0%	60.8%	57.2%	53.6%	60.7%	34.7%	69.7%	56.7%	57.1%
	17	51.6%	57.2%	41.1%	59.6%	30.6%	52.9%	40.4%	47.5%	63.7%	64.5%	58.3%	72.1%	40.3%	67.3%	58.8%	60.7%
背部	18	21.5%	30.3%	27.4%	38.6%	18.4%	32.9%	26.2%	30.0%	37.3%	37.2%	36.1%	43.6%	26.9%	47.7%	41.5%	37.1%
	19	20.4%	31.1%	22.1%	33.5%	17.1%	23.0%	22.2%	20.3%	27.8%	34.5%	26.4%	32.8%	21.6%	28.2%	30.4%	23.8%
	20	23.9%	33.4%	26.0%	38.3%	21.0%	48.8%	30.0%	44.8%	44.7%	41.7%	36.7%	49.4%	20.2%	67.5%	47.3%	52.6%
	21	16.5%	23.5%	16.9%	25.4%	16.6%	25.5%	19.6%	23.4%	28.5%	29.6%	30.5%	33.5%	15.0%	34.3%	31.6%	22.6%
	22	13.5%	17.4%	9.4%	14.9%	14.4%	17.0%	17.3%	18.0%	16.9%	14.8%	16.3%	19.1%	12.3%	16.8%	22.3%	14.7%
	23	12.3%	14.7%	9.0%	15.0%	13.7%	13.0%	15.0%	13.4%	11.2%	11.9%	10.9%	15.8%	13.2%	12.2%	15.9%	10.5%
	24	12.2%	15.8%	9.0%	18.6%	14.5%	11.4%	13.2%	12.4%	11.9%	14.1%	11.4%	19.2%	14.4%	13.8%	16.0%	11.4%

4-3-4　接触相手別の接触率

接触行動は接触相手によって大きく異なることが知られている（Jourard, 1966; Barnlund, 1975; 呉, 2006)。ここでは、中国と日本、男子と女子の4通りの被調査者が、男親、女親、同性友人、異性友人、恋人のそれぞれを接触相手として回答した結果から求めた接触率を図4-4（a～h）に示した（接触場面は込みにしている)。また、接触率の表を表4-4（a, b）に示した。中国人男子も日本人男子も、恋人と同性友人への接触率が非常に高く、両親への接触は少ない。この傾向は、中国人男子に比べ、日本人男子でさらに顕著である。つまり、日本人男子は同性友人や恋人への接触と親への接触とをはっきりと区別していることになる。女子では、中国人は恋人に対する接触率よりも同性友人に対する接触率のほうが高い。また、母親に対する接触は中国人女子では恋人や同性友人に近い接触率を示している。

異性友人に対する接触では、中国では男女とも、両親に対する接触よりも少ないのに対し、日本では両親に対する接触よりも多い。なお、同性友人への接触は日中ともに多いが、4-3-2 で述べたように、日本人は中国人に比べ顔面の各部位への接触が少ない一方、背側への接触は中国人より多い。

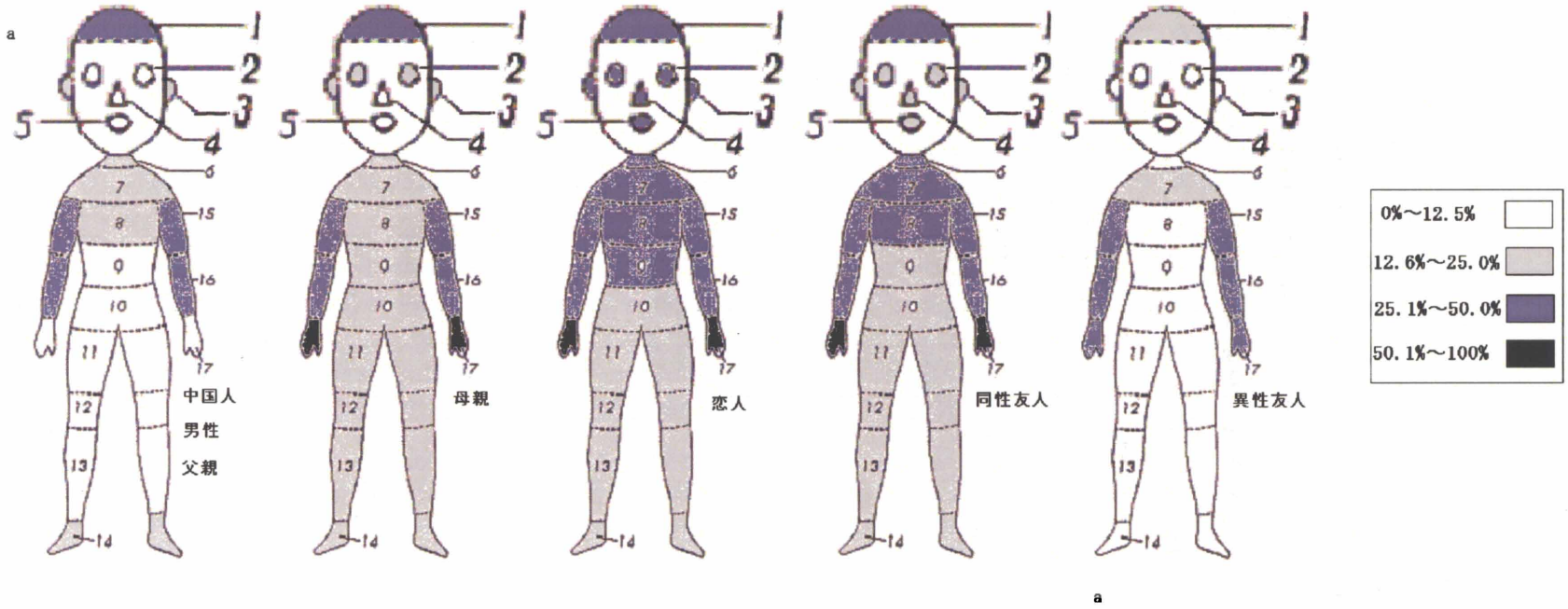


図４･４　接触相手および性別で比較した身体部位による接触率　――　a.中国人男性の正面

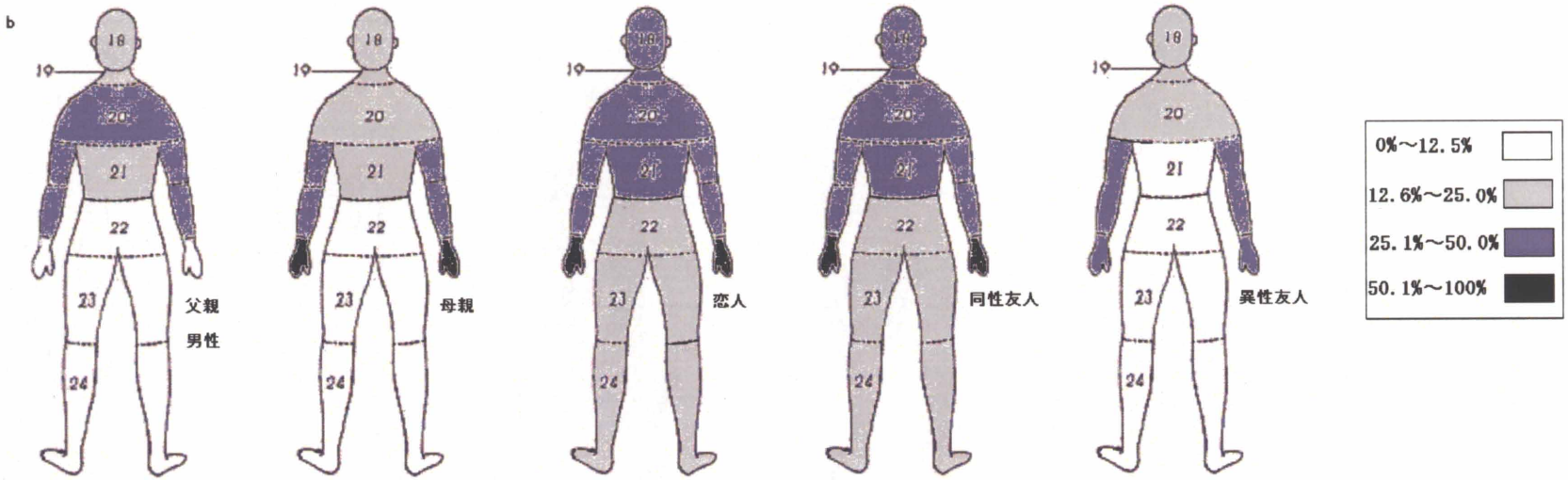


図 4-4　接触相手および性別で比較した身体部位による接触率　――　b.中国人男性の背面

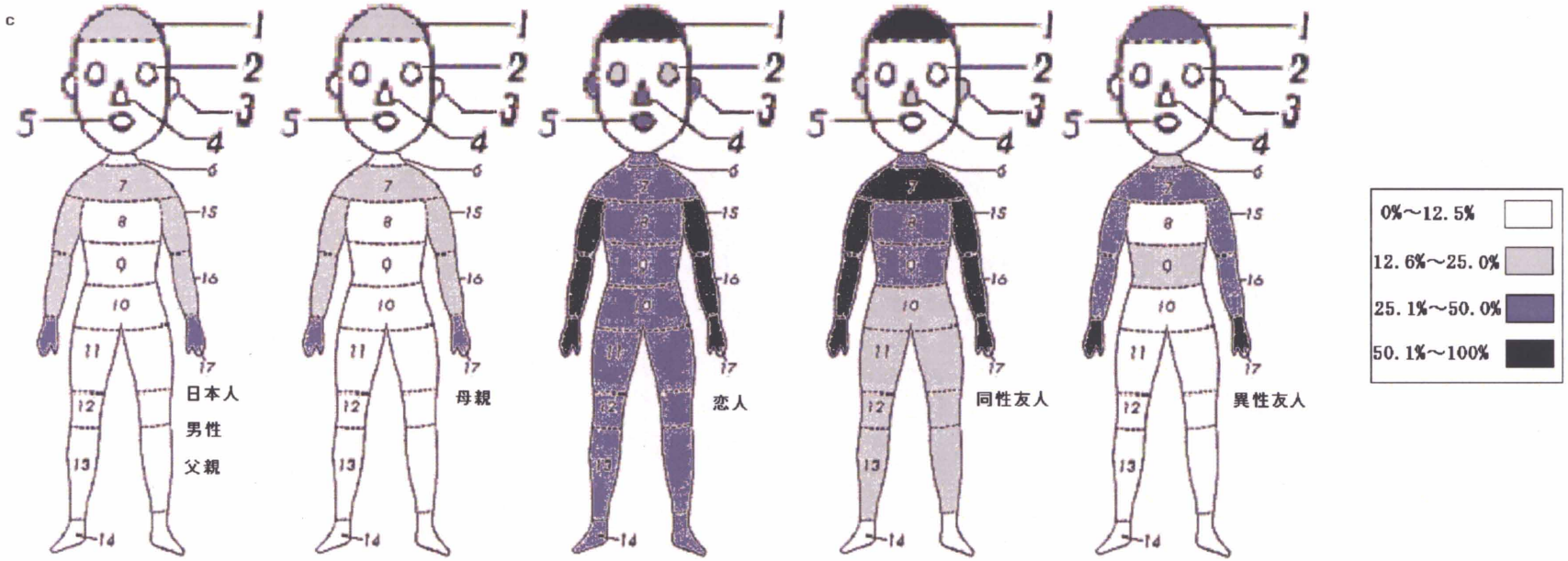


図 4-4　接触相手および性別で比較した身体部位による接触率　――　c.日本人男性の正面

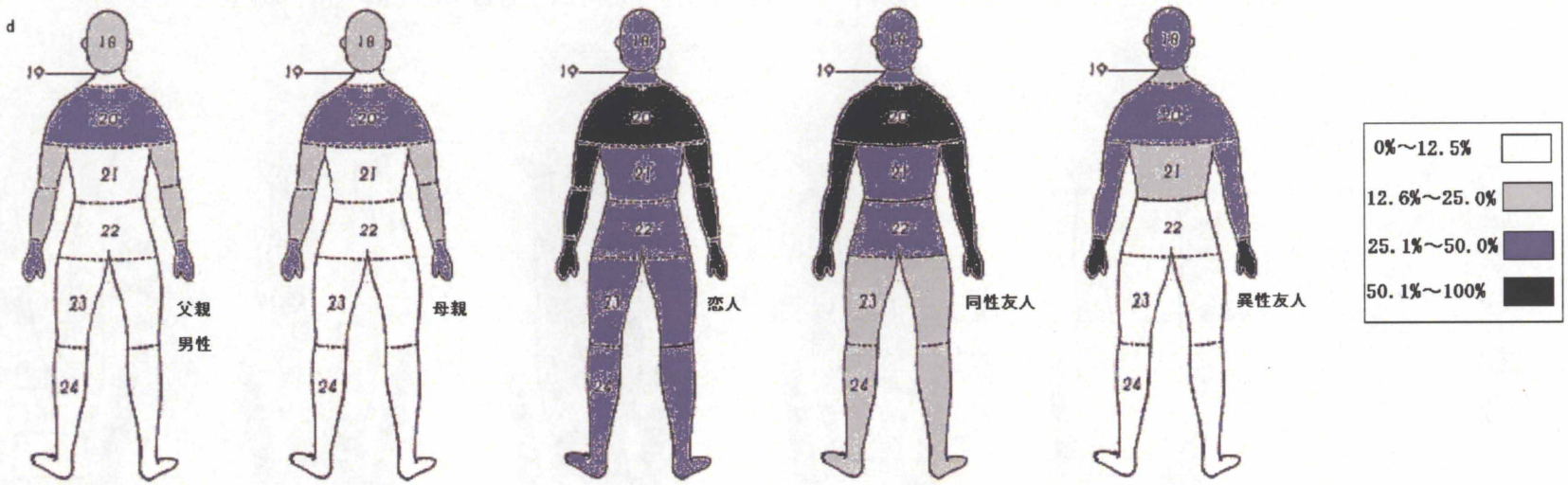


図 4-4　接触相手および性別で比較した身体部位による接触率　――　d.日本人男性の背面

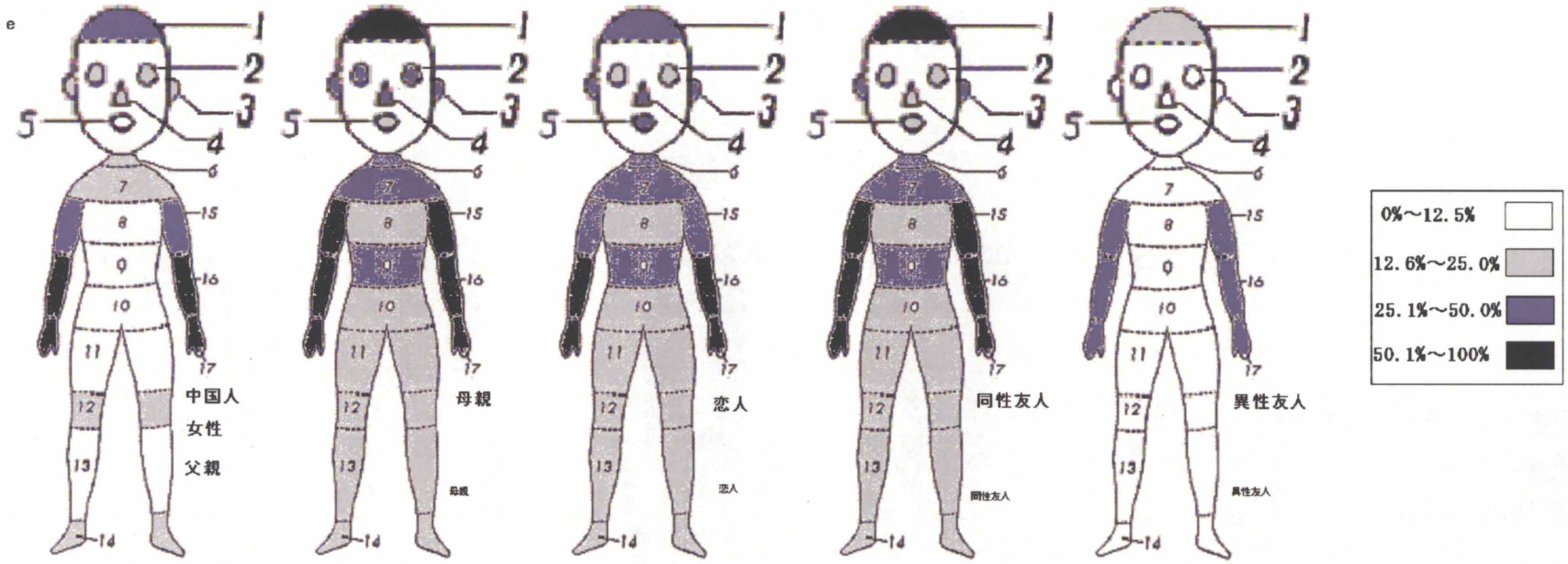


図 4-4　接触相手および性別で比較した身体部位による接触率　――　e.中国人女性の正面

f

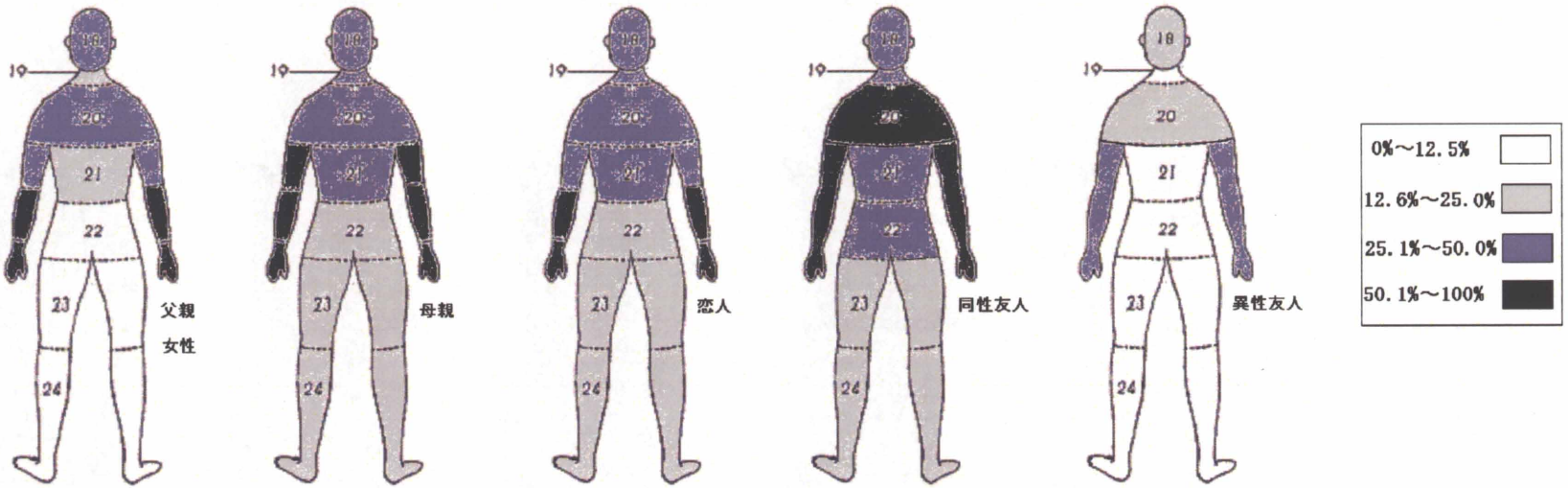


図 4-4　接触相手および性別で比較した身体部位による接触率　――　f.中国人女性の背面

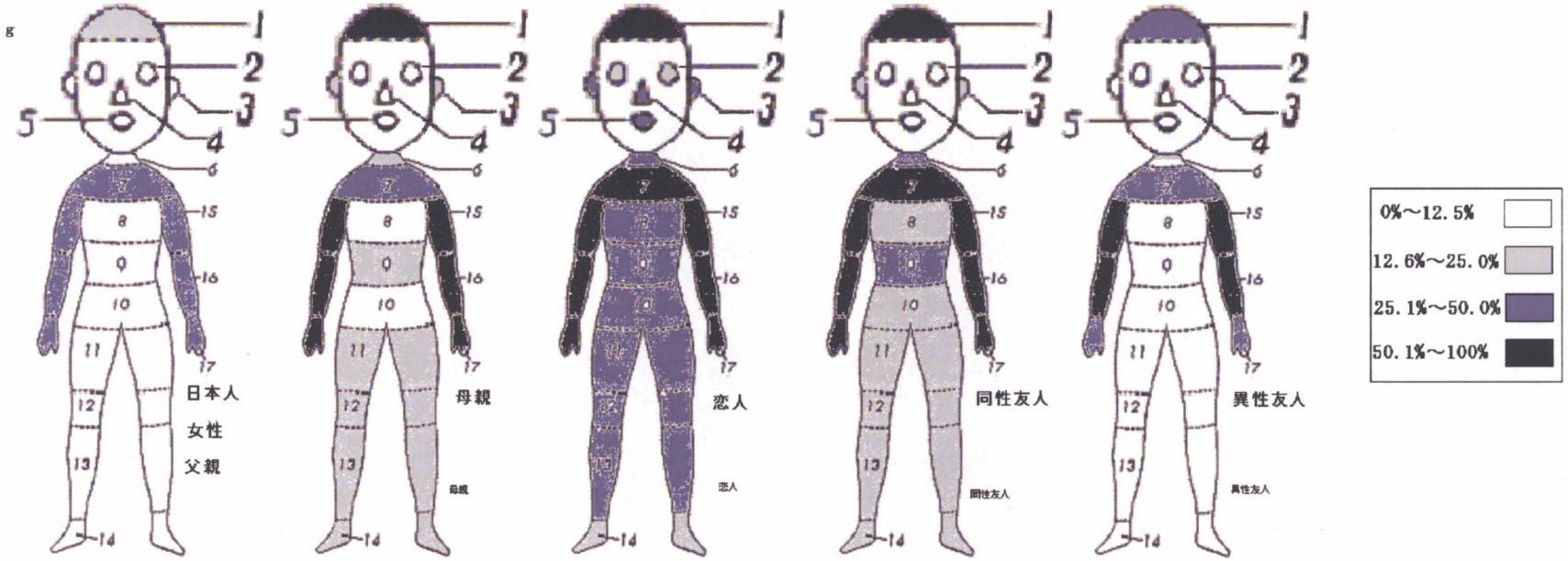


図 4-4　接触相手および性別で比較した身体部位による接触率　――　g.日本人女性の正面

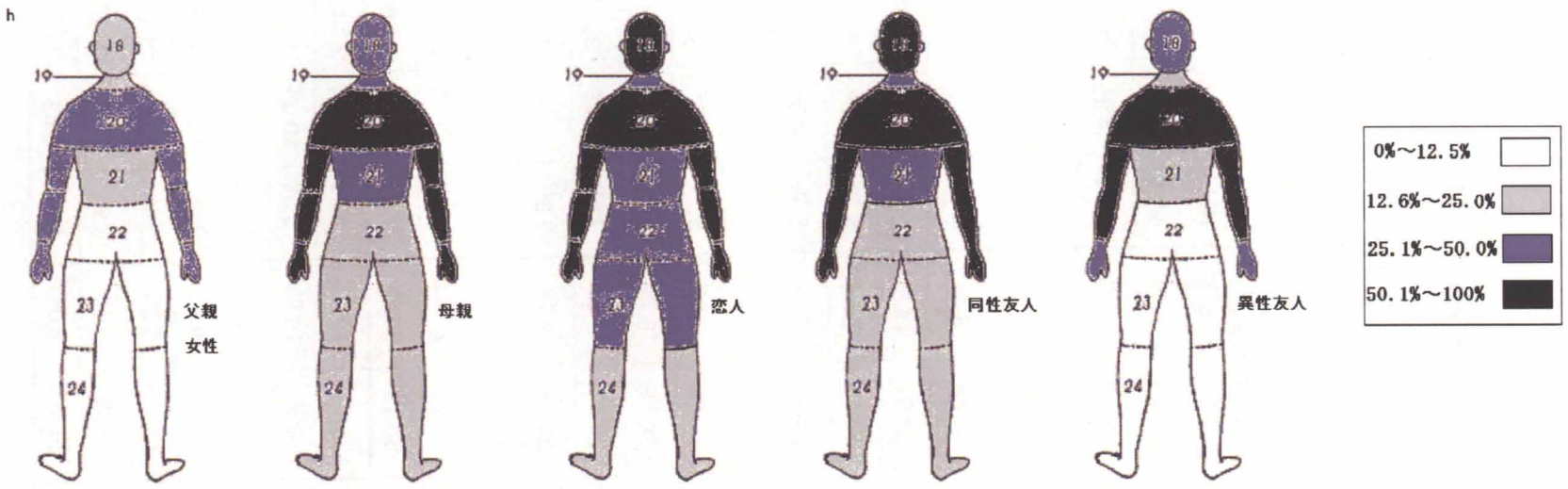


図 4-4　接触相手および性別で比較した身体部位による接触率　――　h.日本人女性の背面

表 4-4 接触率の相手別および性別の比較 ——a.男性

部位		中国					日本				
		父親	母親	恋人	同性友人	異性友人	父親	母親	恋人	同性友人	異性友人
頭部	1	29.1%	34.6%	39.3%	41.6%	20.3%	16.5%	20.1%	51.5%	63.1%	42.4%
	2	12.0%	14.3%	28.1%	19.6%	6.4%	2.1%	1.8%	21.2%	8.4%	4.2%
	3	19.0%	17.2%	33.7%	24.9%	9.1%	2.7%	4.8%	34.9%	20.7%	7.1%
	4	11.7%	11.4%	30.9%	18.9%	7.3%	3.5%	3.2%	30.1%	16.4%	3.5%
	5	9.8%	8.9%	32.9%	15.4%	6.4%	2.9%	3.3%	39.1%	9.0%	7.2%
	6	18.5%	21.2%	32.8%	27.6%	9.8%	6.2%	6.6%	38.7%	31.4%	14.9%
胴体	7	22.3%	21.3%	31.2%	37.0%	14.5%	24.0%	23.7%	49.8%	62.2%	39.1%
	8	15.8%	12.4%	25.5%	29.1%	6.9%	5.2%	3.5%	37.3%	35.4%	12.5%
	9	11.9%	11.2%	26.3%	24.0%	6.3%	5.4%	4.5%	38.1%	37.3%	14.9%
	10	8.1%	6.2%	19.5%	17.2%	5.3%	1.7%	2.0%	34.5%	19.3%	7.9%
足	11	10.8%	10.1%	23.9%	24.4%	8.9%	5.2%	3.5%	34.0%	24.5%	10.6%
	12	11.8%	13.3%	24.1%	24.8%	8.1%	4.1%	3.9%	29.8%	19.9%	9.4%
	13	12.1%	13.9%	22.2%	23.6%	7.8%	7.8%	5.5%	30.4%	23.0%	9.2%
	14	12.7%	14.8%	22.4%	23.5%	8.7%	7.9%	6.4%	29.4%	18.4%	9.6%
手	15	37.5%	38.1%	40.2%	47.2%	25.8%	21.7%	24.0%	60.3%	58.1%	45.2%
	16	41.7%	41.6%	42.4%	48.0%	29.0%	17.3%	22.7%	59.0%	53.1%	41.6%
	17	50.0%	53.1%	52.7%	50.4%	33.9%	27.4%	29.6%	69.5%	57.6%	50.7%
背部	18	23.4%	23.5%	33.5%	38.4%	17.4%	13.5%	14.3%	47.1%	45.0%	28.7%
	19	21.3%	22.4%	31.5%	34.3%	14.5%	10.5%	10.0%	41.1%	29.0%	18.6%
	20	28.1%	25.0%	31.1%	41.7%	16.7%	27.4%	26.2%	50.1%	58.6%	43.6%
	21	17.3%	15.3%	29.7%	27.6%	9.1%	9.4%	10.2%	40.5%	35.0%	19.2%
	22	10.8%	9.9%	22.0%	20.6%	6.3%	7.4%	5.2%	36.0%	28.7%	9.8%
	23	9.3%	9.6%	21.3%	19.4%	5.1%	3.9%	3.0%	31.6%	21.3%	9.3%
	24	10.7%	11.1%	21.5%	20.6%	6.0%	4.0%	3.8%	27.2%	20.3%	6.5%

表 4-4 接触率の相手別および性別の比較 ーーb.女性

部位		中国					日本				
		父親	母親	恋人	同性友人	異性友人	父親	母親	恋人	同性友人	異性友人
頭部	1	40.9%	53.1%	42.4%	56.9%	21.0%	24.6%	50.2%	60.0%	71.3%	41.9%
	2	14.4%	26.3%	23.6%	24.3%	6.4%	2.1%	8.0%	18.7%	8.7%	1.5%
	3	24.2%	36.3%	34.8%	34.7%	10.2%	3.5%	14.6%	32.6%	18.8%	5.8%
	4	13.5%	25.9%	29.3%	24.9%	5.8%	4.8%	10.9%	27.8%	10.8%	3.9%
	5	7.2%	16.9%	29.2%	14.3%	3.5%	1.6%	6.3%	40.2%	6.8%	3.2%
	6	23.4%	38.3%	31.8%	35.9%	8.7%	6.9%	20.4%	37.9%	30.0%	12.1%
胴体	7	21.9%	35.7%	29.9%	35.2%	12.4%	32.3%	49.8%	59.6%	67.0%	45.6%
	8	7.4%	17.0%	18.5%	17.6%	5.6%	5.5%	12.1%	37.1%	25.0%	8.6%
	9	12.1%	28.2%	27.3%	29.6%	7.6%	8.6%	21.6%	36.3%	30.4%	10.5%
	10	4.4%	15.7%	12.7%	14.3%	3.7%	3.0%	9.9%	27.6%	14.2%	4.6%
足	11	9.7%	21.4%	18.5%	22.9%	5.8%	5.8%	20.9%	33.0%	25.0%	10.9%
	12	13.9%	23.6%	18.5%	22.9%	6.0%	6.6%	16.0%	27.9%	23.8%	8.3%
	13	12.5%	23.7%	17.4%	21.1%	6.0%	10.4%	19.8%	26.6%	17.3%	9.4%
	14	14.9%	24.6%	15.1%	16.4%	5.8%	10.4%	20.7%	24.5%	16.4%	9.9%
手	15	44.4%	58.7%	47.7%	63.8%	27.4%	38.9%	66.0%	71.1%	81.1%	60.6%
	16	51.4%	65.3%	52.1%	70.1%	28.2%	37.1%	63.1%	71.3%	79.1%	55.2%
	17	57.1%	70.8%	61.8%	78.7%	30.7%	36.9%	66.9%	76.7%	82.2%	48.7%
背部	18	37.2%	42.2%	36.0%	45.7%	20.0%	19.9%	42.4%	55.4%	57.2%	35.6%
	19	24.3%	37.1%	31.4%	40.3%	10.0%	14.1%	30.8%	38.0%	35.1%	19.2%
	20	33.6%	47.5%	38.0%	50.7%	22.9%	38.4%	58.3%	61.8%	70.0%	50.6%
	21	22.3%	35.0%	32.6%	37.0%	10.2%	15.2%	33.0%	46.5%	35.8%	16.9%
	22	8.0%	19.9%	19.4%	28.0%	4.0%	5.9%	19.0%	33.1%	24.9%	6.8%
	23	7.7%	18.8%	14.7%	17.7%	4.1%	5.6%	15.8%	26.3%	13.0%	3.7%
	24	11.6%	20.2%	15.1%	18.6%	5.4%	7.7%	16.6%	23.5%	16.1%	4.7%

4-3-5　接触場面に関する検討

状況（場面）によって、人間は異なった身振りや行動を取るかどうかを検証するため、今回の調査は私的場面（相手と二人きり、或は親しい人のみの場合など）と、公的場面（知らない人たちが周囲にいる場合など）を設け、回答を求めた。公的場面と私的場面の接触率の相関係数は 0.86 であった。また、明らかに、どの相手に対しても、公的場面にいる時には、接触は控えられるようであった。24 身体部位×5 種の接触相手×男女、計 240 部位のうち 236 部位については私的場面の接触が公的場面を上回っていた（表 4-5a, b）。例外は男子の場合、母親の身体部位 8（胸）への接触で、公的場面の 9.1%に対し私的場面では 9.0%であり、その差は 0.1%であった。女子では、異性友人への接触において第 2、10、23 部位で公的場面の接触が私的場面の接触を上回っていたが、いずれも接触率そのものが 5%以下であり、接触率の差も 0.5%以下であったから、これらはすべて、ほとんど接触がないという意味で公私の差がないと見ることができるだろう。異性友人の場合、私的場面でも接触は少ないため、公的場面との違いはほとんど見られない。つまり恋人でない異性友人との接触は、すべてが公的になされていると言ってもよいかもしれない。

私的場面における恋人との接触は男女に関わらず、その接触頻度はトップである。男女ともに、その次は同性の友人、母親、父親、異性の友人という順番になる。一方、公的場面になると多少接触が控えめになってしまい、恋人との接触頻度は同性の友人と同じくらいに減っていることが分かる。

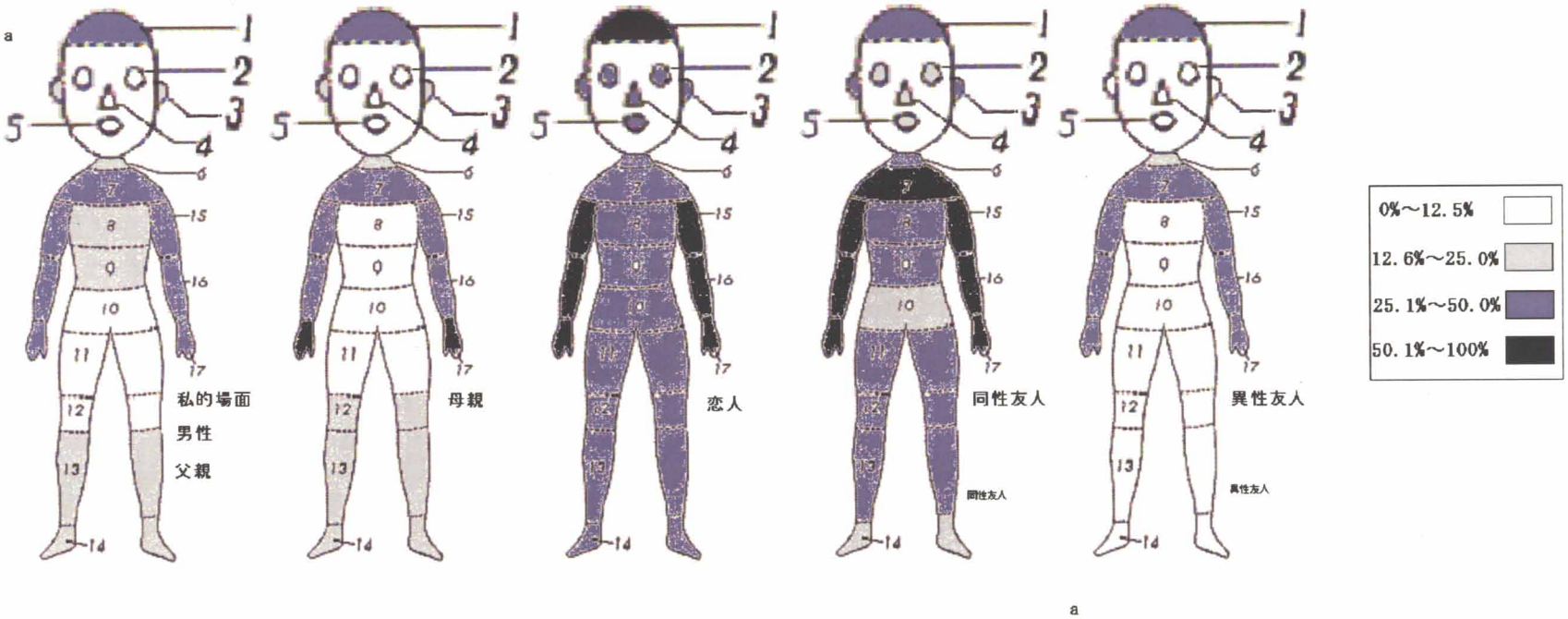


図４-５　場面および相手で比較した身体部位による接触率　――　a. 男性の私的場面（正面）

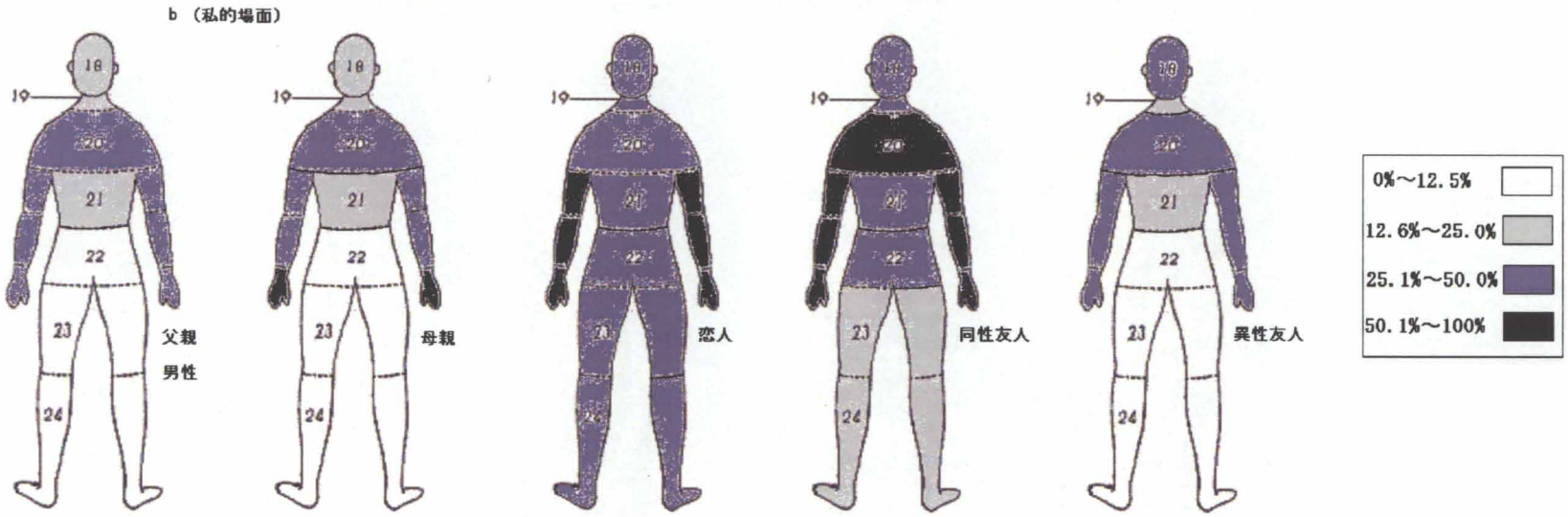


図４-5　場面および相手で比較した身体部位による接触率　――　b. 男性の私的場面（背面）

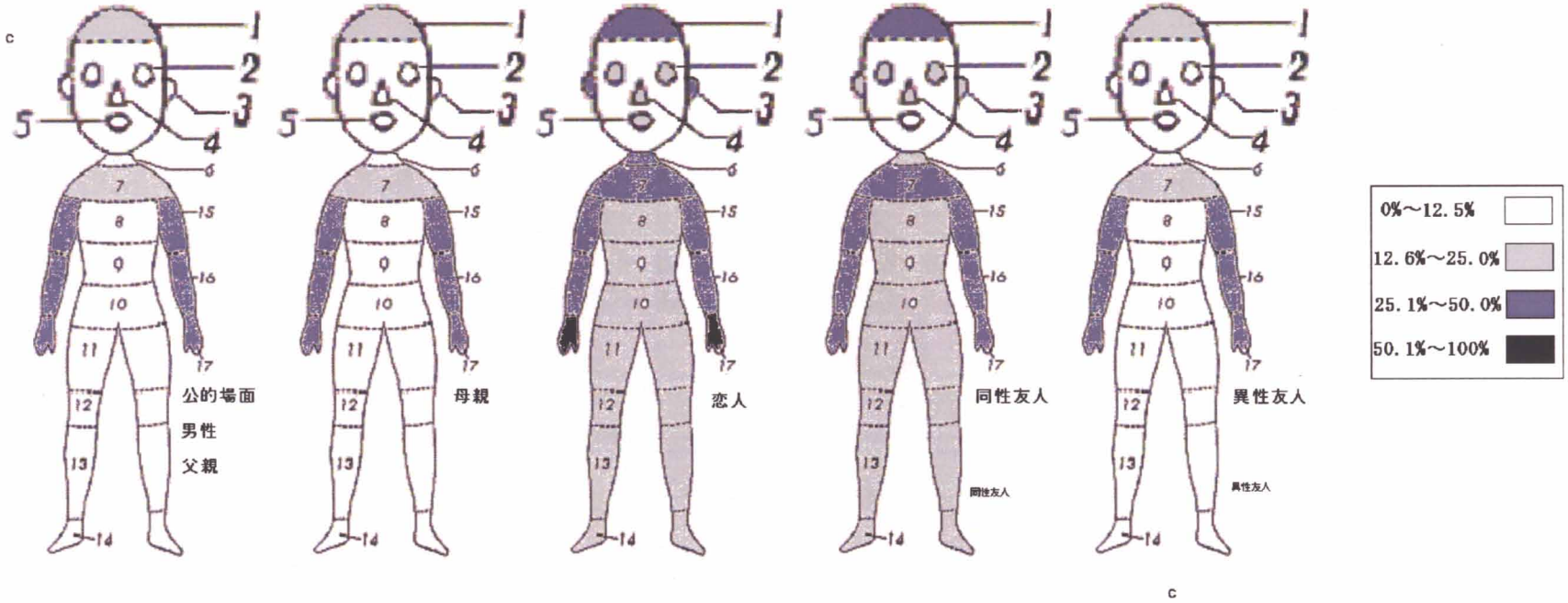


図４-5　場面および相手で比較した身体部位による接触率　――　c. 男性の公的場面（正面）

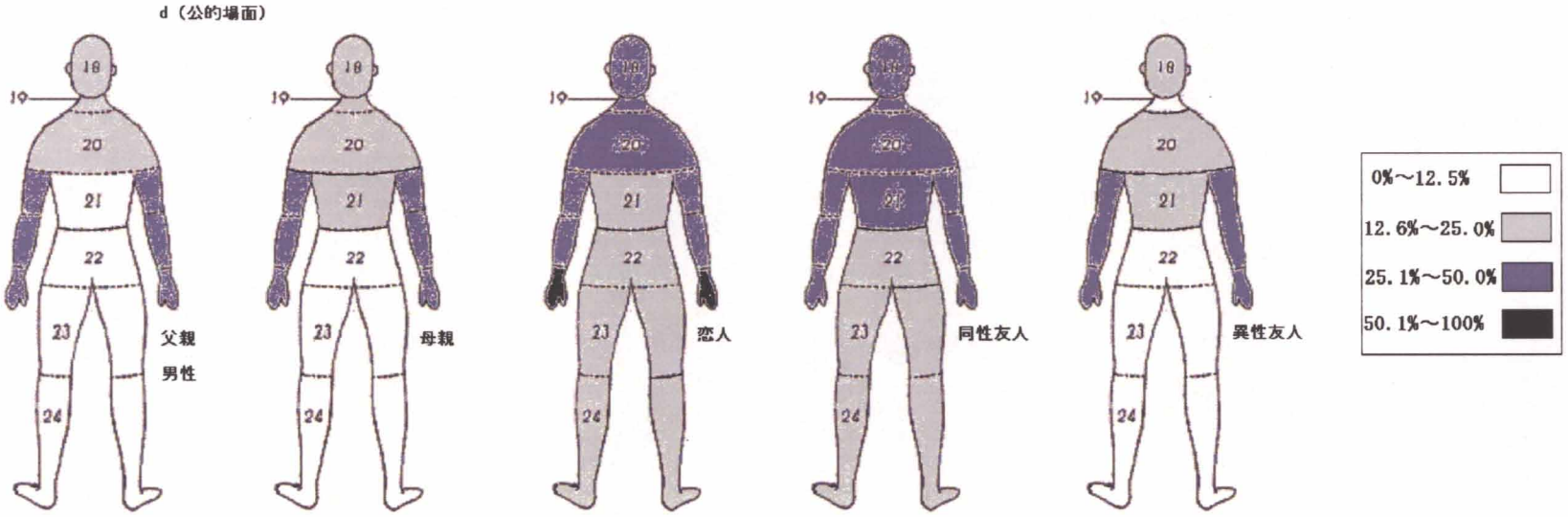


図４-5　場面および相手で比較した身体部位による接触率　――　d. 男性の公的場面（背面）

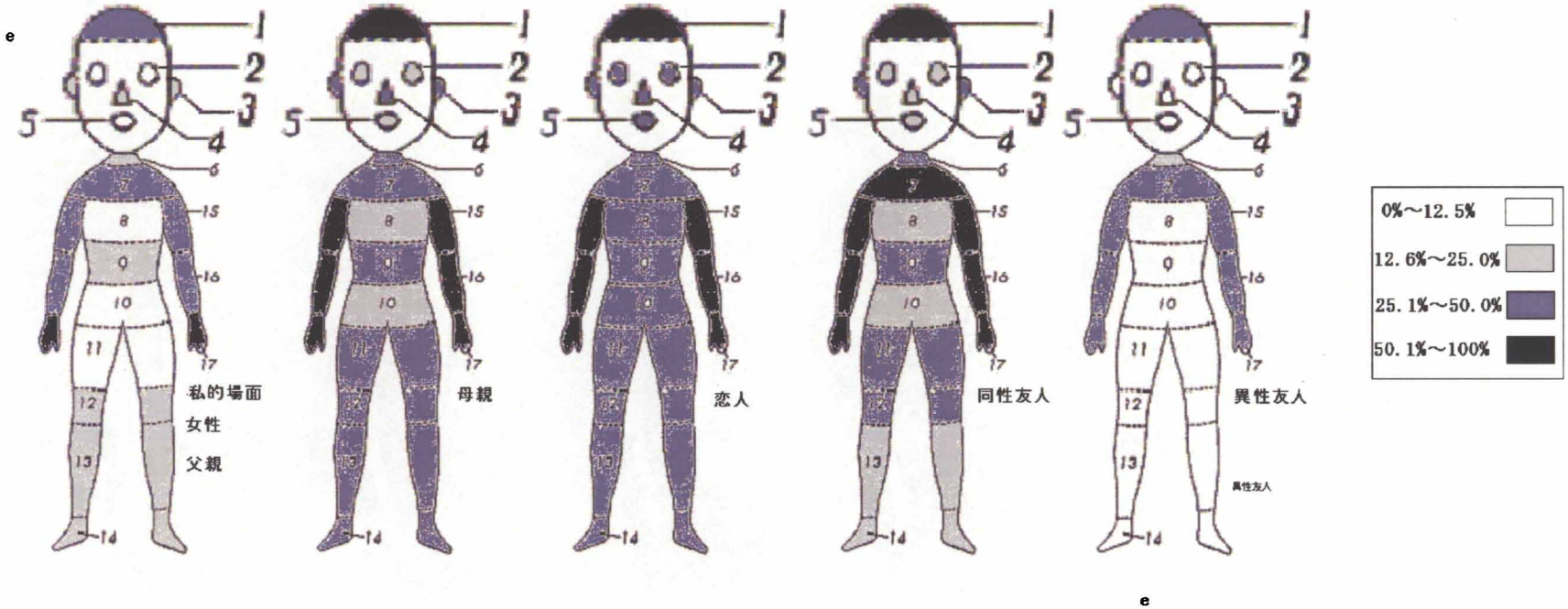


図４-5　場面および相手で比較した身体部位による接触率　――　e. 女性の私的場面（正面）

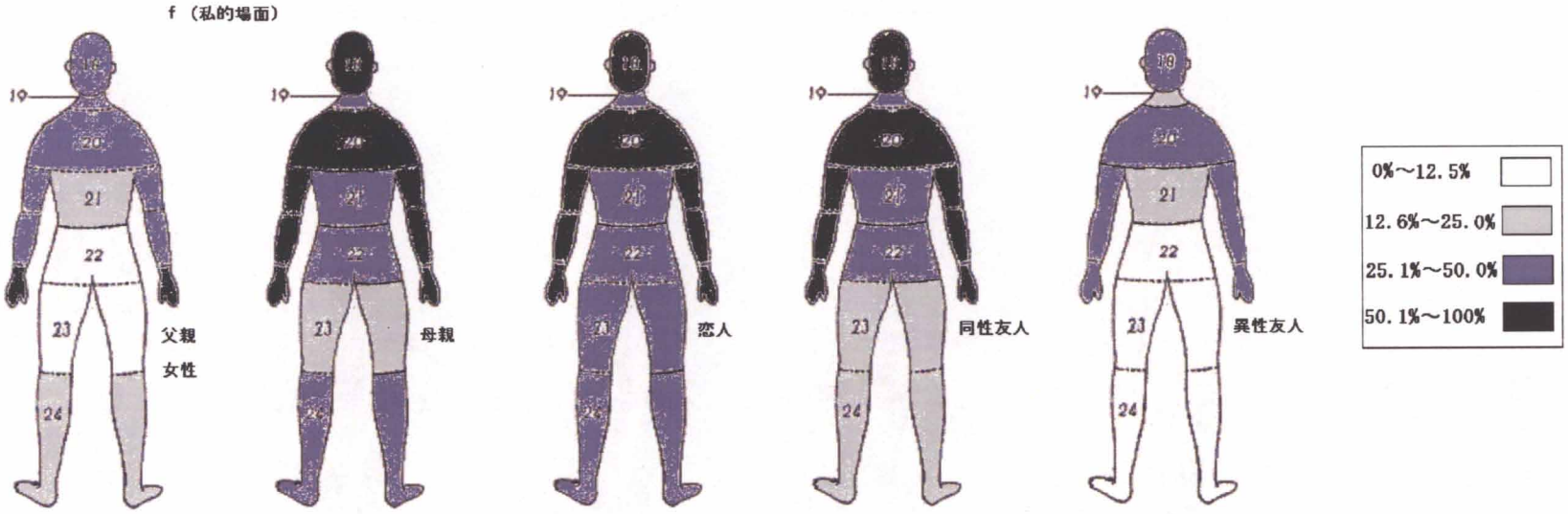


図４-5　場面および相手で比較した身体部位による接触率　――　f. 女性の私的場面（背面）

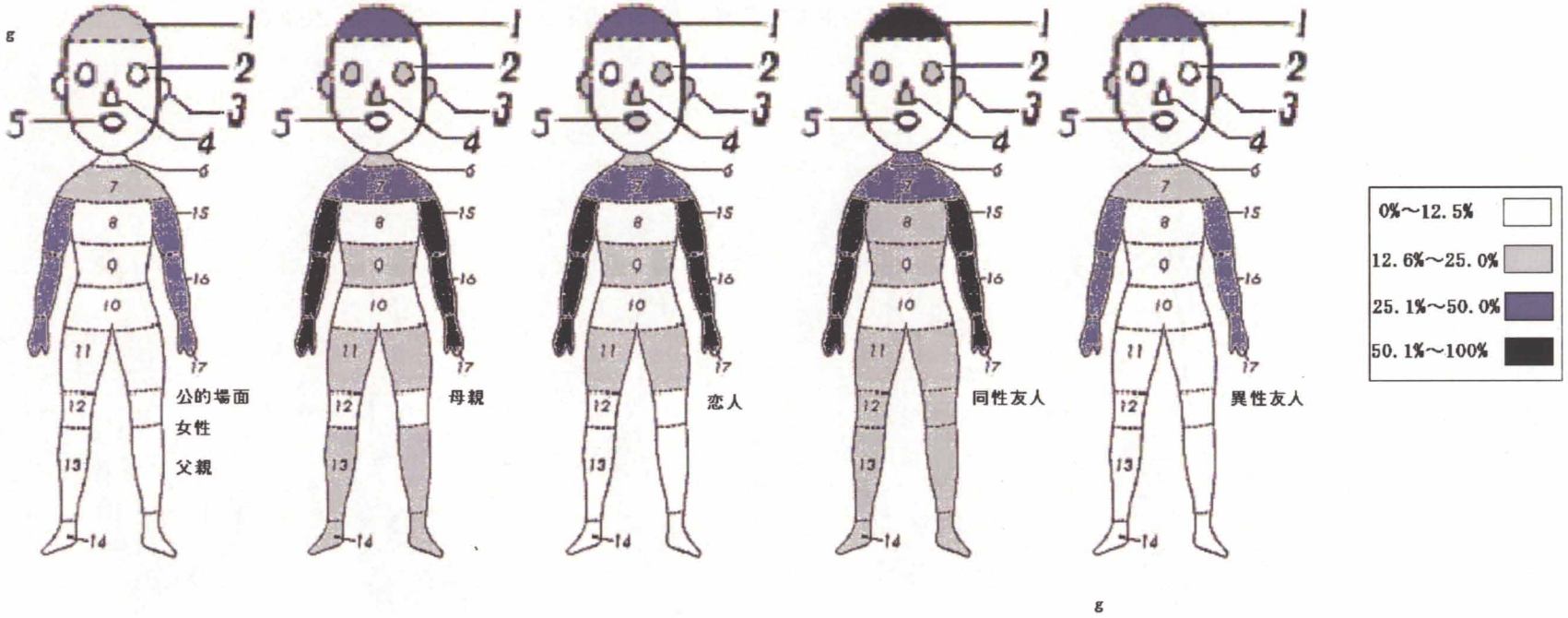


図４-5　場面および相手で比較した身体部位による接触率　――　g. 女性の公的場面（正面）

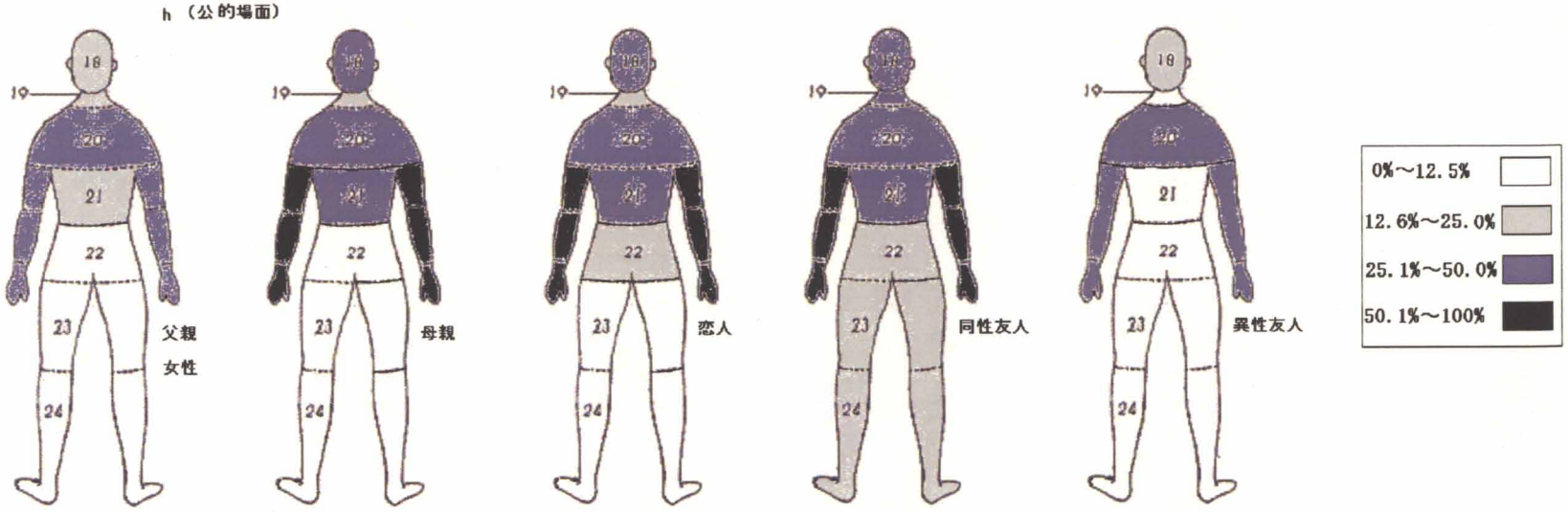


図４-5　場面および相手で比較した身体部位による接触率　――　h. 女性の公的場面（背面）

表 4-5： 接触率の場面別および相手別の比較 ——a.男性

部位		私的場面					公的場面				
		父親	母親	恋人	同性友人	異性友人	父親	母親	恋人	同性友人	異性友人
頭部	1	30.8%	37.2%	53.2%	58.5%	33.3%	18.0%	21.1%	34.5%	40.8%	23.9%
	2	9.7%	11.6%	32.2%	15.7%	6.2%	6.8%	7.6%	18.9%	15.0%	4.8%
	3	15.1%	15.8%	42.9%	25.1%	9.5%	10.6%	9.2%	25.4%	21.5%	7.2%
	4	10.3%	10.3%	40.0%	19.6%	7.1%	6.9%	6.4%	21.2%	16.3%	4.6%
	5	8.9%	8.6%	47.5%	13.4%	7.6%	5.6%	5.0%	23.1%	12.6%	5.7%
	6	15.8%	19.6%	44.9%	33.9%	13.9%	11.9%	11.9%	25.1%	24.1%	9.5%
胴体	7	28.2%	27.8%	48.1%	52.4%	29.4%	17.6%	16.7%	28.3%	40.5%	18.1%
	8	13.5%	9.0%	41.4%	38.8%	11.8%	10.2%	9.1%	18.5%	24.1%	6.1%
	9	12.7%	10.1%	41.4%	34.6%	12.2%	6.3%	7.3%	20.1%	23.4%	6.9%
	10	6.9%	5.3%	36.4%	20.7%	8.1%	4.6%	3.9%	13.8%	15.3%	4.4%
足	11	11.1%	9.3%	37.2%	30.6%	10.9%	6.3%	6.0%	18.3%	18.3%	8.1%
	12	11.7%	13.1%	35.2%	27.1%	10.0%	6.2%	6.4%	17.3%	18.9%	7.1%
	13	13.8%	13.5%	34.5%	29.4%	10.1%	7.1%	8.0%	16.0%	17.4%	6.6%
	14	14.9%	14.9%	34.3%	24.5%	9.4%	6.9%	8.4%	15.7%	18.7%	8.6%
手	15	36.8%	38.0%	53.0%	56.1%	35.5%	26.4%	27.6%	42.5%	46.5%	30.6%
	16	37.9%	39.8%	52.5%	55.8%	36.6%	27.3%	29.2%	44.7%	44.1%	30.9%
	17	48.9%	50.7%	64.1%	57.6%	45.1%	34.2%	37.9%	54.0%	48.6%	35.3%
背部	18	23.4%	23.6%	48.1%	48.2%	25.8%	16.0%	16.5%	29.1%	33.5%	17.5%
	19	19.9%	21.5%	43.8%	37.2%	19.9%	14.6%	14.0%	26.4%	27.5%	12.1%
	20	35.1%	31.8%	46.2%	52.2%	30.0%	20.6%	19.1%	30.2%	43.8%	23.5%
	21	18.1%	17.2%	43.1%	34.7%	14.6%	10.5%	9.6%	24.4%	26.1%	11.2%
	22	12.3%	9.3%	36.4%	29.4%	8.5%	6.7%	7.0%	18.2%	17.8%	6.8%
	23	9.4%	8.5%	34.4%	23.7%	8.1%	5.2%	5.7%	15.9%	16.6%	5.3%
	24	10.5%	9.6%	32.6%	24.7%	7.5%	5.8%	7.2%	14.7%	16.4%	4.9%

表 4-5： 接触率の場面別および相手別の比較 ——b.女性

部位		私的場面					公的場面				
		父親	母親	恋人	同性友人	異性友人	父親	母親	恋人	同性友人	異性友人
頭部	1	45.0%	65.3%	58.6%	70.2%	31.8%	24.6%	38.7%	39.5%	54.4%	25.9%
	2	11.8%	24.6%	29.7%	21.1%	4.3%	7.8%	14.3%	13.8%	15.8%	4.8%
	3	21.5%	37.3%	47.9%	34.0%	9.0%	11.4%	19.0%	20.1%	23.4%	8.1%
	4	14.7%	26.7%	40.1%	23.7%	5.5%	5.8%	13.8%	17.4%	15.6%	4.8%
	5	7.2%	17.2%	48.8%	12.8%	4.3%	3.0%	8.6%	17.8%	10.1%	2.6%
	6	22.1%	40.9%	46.4%	41.5%	12.9%	12.3%	22.3%	21.8%	25.9%	7.0%
胴体	7	30.9%	49.1%	49.5%	54.0%	28.5%	20.7%	32.9%	32.5%	40.2%	21.2%
	8	9.0%	19.5%	38.5%	24.4%	7.4%	4.4%	10.8%	12.4%	16.3%	6.1%
	9	14.7%	32.6%	42.2%	38.4%	10.0%	6.9%	18.8%	19.2%	21.3%	7.3%
	10	4.5%	17.3%	28.7%	16.8%	3.8%	3.3%	9.8%	7.9%	11.7%	4.3%
足	11	11.4%	29.4%	34.0%	28.5%	9.3%	5.0%	13.1%	14.0%	18.8%	6.1%
	12	14.8%	29.3%	32.6%	28.0%	7.4%	7.5%	12.2%	11.4%	18.5%	6.3%
	13	17.4%	31.0%	31.6%	21.9%	8.2%	5.9%	13.4%	10.1%	17.5%	6.4%
	14	19.0%	32.9%	28.1%	19.4%	7.6%	7.4%	13.4%	9.2%	13.5%	7.0%
手	15	46.2%	66.0%	61.5%	74.6%	43.4%	38.5%	56.9%	51.5%	65.9%	36.3%
	16	48.5%	67.8%	63.1%	76.6%	41.8%	43.6%	61.1%	55.5%	70.4%	34.9%
	17	54.9%	74.1%	70.7%	82.9%	42.8%	44.1%	64.6%	64.1%	77.0%	32.0%
背部	18	38.4%	53.8%	53.7%	57.7%	28.2%	23.0%	30.8%	32.9%	42.3%	23.6%
	19	25.7%	45.0%	44.1%	43.9%	16.1%	15.2%	24.6%	23.6%	32.8%	10.8%
	20	43.0%	59.8%	54.0%	66.1%	36.4%	27.7%	43.2%	39.8%	49.8%	30.2%
	21	24.5%	42.4%	45.9%	43.0%	14.5%	14.7%	26.1%	29.7%	30.1%	10.9%
	22	9.3%	28.4%	34.0%	33.1%	5.1%	5.2%	10.8%	15.1%	20.6%	5.0%
	23	9.2%	24.0%	27.9%	18.7%	3.7%	4.7%	11.2%	10.3%	13.1%	4.2%
	24	13.9%	25.7%	27.3%	21.2%	6.1%	6.5%	12.1%	9.2%	14.1%	4.3%

4-3-6　接触率の結果のまとめ

調査結果から、中国人も日本人も、高頻度で接触する部位としない部位は Jourard(1966)の研究結果とほとんど一致することが分かった。先行研究ではアメリカ人の接触頻度は日本人の約2倍という結果であった（Barnlund, D.C., 1975)。従って今回の調査で、中国の結果は日本とほぼ同じであり、アメリカ人の場合と比べると、はるかに接触が少ないことが推察される。この結果は、McDaniel & Andersen （1998）が国際空港の送別事態で観察した結果とよく似ている。

当初の仮説では中国人の方が接触が多いと予測したが、実際には中国人の接触行動の平均は日本人の接触行動の平均とほぼ同じくらいであることが分かった。もちろん、中日の間にいくつかの違いが見られた。中日いずれにおいても、男子大学生が最もよく接触した相手は恋人であった。中国の男性は異性の友人が相手の場合に接触が最も少なく、日本の男性は父親が相手の場合に接触頻度がもっとも少なかった。日本人の場合、両親への接触が友人への接触より少ないのに対し、中国人では両親への接触は日本人の場合ほど低くなかった。接触部位について、中国人は日本人に比べて顔面の各部位への接触が多い反面、身体の背側への接触は少なかった。

4-4 要因の説明力の比較

身体部位ごとの接触率を集計し図示した結果から、国籍、調査地域、性別、接触相手などの要因によって、接触行動が異なることが分かった。そこで、それぞれの要因が接触率の変動に与える影響を比較するために、分散分析を行った。分散分析は、測定値の変動を要因（説明変数）ごとの変動（それぞれの要因が説明することのできる変動の量としての分散）に分解し、分解できなかった成分（残差）でそれを除することによって、説明変数による説明量が残差に比べて統計的に十分に大きいと言えるかどうかを調べようとするものである。しかし、統計的な有意を調べることなしに、各説明変数の説明力の相対的な大きさを比較することもできる。つまり、各部位の接触率の変動を、国または調査地域による変動、被調査者の性による変動、接触相手による変動に分解することにより、これらの要因の説明力の大小を評価することが可能になる。具体的には、分散分析の結果の平均平方の大きさを比べることで、各要因の説明力の大きさを比較することができる。

接触率のデータはおおむね100人程度の調査対象者の回答から算出されたものであり、標本数が大きいことから、得られた接触率は母集団における接触率そのものであると見なす。ここで行った分散分析は、各条件（要因）の統計的有意水準を算出しようとするものではなく、接触頻度の分散に対する各条件（要因）の説明力の相対的な大きさを評価しようとするものである。

4-4-1 方法

SPSS（version 11.5）を用いて、総接触率について、一変量分散分析を行った。独立変数（説明要因）は被験者間要因として国（2要因）と性（2要因）、被験者内要因として接触相手（5要因）と接触場面（2要因）である。

これまで述べてきた部位別の接触率は、各身体部位について、接触があると答えた被調査者には1を与え、接触がないと答えた被調査者には0を与えて合計し（接触数）、その値を被調査者の数で除した値である。総接触数は、接触部位ごとの接触数をすべて加算したものである。総接触数を身体部位の数24と被験者数で除した値が総接触率である。

前節の各図から推測されるように、接触率の高い部位はどの条件においても高く、低い

部位はどの条件においても低いように見受けられたので、接触部位による交互作用は無視してよいと判断した。つまり、総接触率は同じであっても、手はよく触るが足はあまり触らないという被調査者と、手をさわらない代わりに足をよく触る被調査者がいるとは考えず、接触行動の多い被調査者は、平均的には、身体のどの部位も高頻度に接触するであろうと仮定した。

性別と国（または地域）を被験者間要因、接触相手と公私の場面を被験者内要因にし、テストデータをSPSSで分散分析した結果をSTATISTICA（version 5.9）で分析した結果とつきあわせたところ、両者の結果は一致したので、以後はすべてSPSSを用いて分散分析を行った。

分散分析の結果を表4-6、表4-7にまとめた。表4-6は国籍（中国と日本）、性別、場面別、相手別の条件で行った分散分析の結果を表し、表4-7は地域別(調査した8つの都市)、性別、場面別、相手別の条件で行った分散分析の結果を表した。

表4-6の結果から、公的私的場面の主効果の平均平方が69.7であり、説明要因として最大であった。2番目に大きい要因は接触相手で、平均平方は39.2であった。3番目の要因は性別で、平均平方は13.6であった。国籍の平均平方は、0.9であり、前述の3つの主効果の大きさに比較して、接触率に及ぼす影響は非常に少なかった。国籍因子の平均平方が小さかったことは中国人と日本人の接触の平均値にほとんど違いがないことを示している。

次に各調査地域（都市）の間に違いがあるかどうかを検証する分散分析を行った。表4-7の結果も同様に、場面の主効果の平均平方が244.6であって、最大の説明要因であった。2番目に大きな要因は接触相手で、143.1であった。3番目の要因は性別で、平均平方は49.5であった。地域の平均平方は9.7であって、接触の頻度に与える影響は非常に小さかった。

二つの分散分析結果を比較すると、主要な説明要因の平均平方の大きさが、国の場合にくらべて地域の場合では約3.5倍であることから、国の主効果(0.9)と地域の主効果(9.7)を比べると、国の主効果より地域の主効果のほうが相対的に大きいことがわかる。つまり、接触行動の説明要因としては、少なくとも中国と日本に関するかぎり、国の違いによる接触行動の違いはごくわずかで、調査地点の要因のほうが大きいと言える。

次に交互作用について調べた。なお、3次以上の交互作用は解釈しにくいことから考察の対象にしていない。表4-6において平均平方が4.0より大きいもののみを列挙すると、交互作用として国籍と相手(8.6)、性別と相手(6.1)、国籍と場面(4.5)、場面と相手(4.1)

が比較的大きな要因であった。地域別で行った分析の結果（表 4-7）においては、主効果の平均平方が国を要因とした場合の約 3.5 倍の値であることから、比較的大きな要因として、平均平方が 12（4.0x3）以上である性別と相手（24.0）、場面と相手（13.9）の 2 つが大きな説明要因であると判断した。この 2 つは国を要因とした分散分析でも比較的大きな要因であった。説明力の大きい交互作用について、次にクラスター分析を行った。

表４－６　国籍、性別、場面別、相手別などの条件で行った分散分析の結果

ソース	平方和	自由度	平均平方
性別	13.6	1	13.6
場面	69.7	1	69.7
相手	156.8	4	39.2
国籍	0.9	1	0.9
性別 ＊ 場面	0.9	1	0.9
性別 ＊ 相手	24.4	4	6.1
場面 ＊ 相手	16.4	4	4.1
性別 ＊ 場面 ＊ 相手	3.2	4	0.8
性別 ＊ 国籍	0.5	1	0.5
場面 ＊ 国籍	4.5	1	4.5
性別 ＊ 場面 ＊ 国籍	0.1	1	0.1
相手 ＊ 国籍	34.4	4	8.6
性別 ＊ 相手 ＊ 国籍	0.4	4	0.1
場面 ＊ 相手 ＊ 国籍	2.8	4	0.7
性別 ＊ 場面 ＊ 相手 ＊ 国籍	1.6	4	0.4

表４-7　地域、性別、場面別、相手別などの条件で行った分散分析の結果

ソース	平方和	自由度	平均平方
場面	244.6	1	244.6
相手	572.5	4	143.1
性別	49.5	1	49.5
地域	68.1	7	9.7
場面 ＊ 相手	55.7	4	13.9
場面 ＊ 性別	3.0	1	3.0
相手 ＊ 性別	95.9	4	24.0
場面 ＊ 相手 ＊ 性別	9.2	4	2.3
場面 ＊ 地域	24.3	7	3.5
相手 ＊ 地域	201.9	28	7.2
場面 ＊ 相手 ＊ 地域	16.6	28	0.6
性別 ＊ 地域	13.8	7	2.0
場面 ＊ 性別 ＊ 地域	5.6	7	0.8
相手 ＊ 性別 ＊ 地域	45.3	28	1.6
場面 ＊ 相手 ＊ 性別 ＊ 地域	11.0	28	0.4

4-5 クラスター分析

分散分析において公私の場面、接触相手や性別に大きな主効果が見られたが、国による違いは見られなかった。しかし、交互作用として性別と相手（国別分析で平均平方が 6.1、地域別分析で平均平方が 24.0)、場面と相手（同じく 4.1 と 13.9）はやや大きい効果を持っていた。このほか、国と相手は国別分析で平均平方が 8.6 であった。

性と接触相手の交互作用が大きいことは、高い、あるいは低い接触行動を示す相手が、被調査者の性によって異なることを示唆するものである。つまり男女大学生は、相手によって、あるいは場面によって、異なった接触行動をとっていることになる。ここでは統計的有意度の検定を行っているわけではないので、中国人大学生と日本人大学生のそれぞれの接触行動が統計的に異なっているかどうかではなく、両者の接触行動がどのように似ているか（どのように異なっているか）を調べることの方が重要であると思われる。そこで、これらの交互作用の元になる因子によって構成されるサブグループについて、類似度を調べるため、クラスター分析を行った。

4-5-1 性と接触相手

SPSS(version 11.5 J)を用いて、性別と相手の交互作用について、接触率のグループ間ユークリッド距離に基づくクラスター分析を行った。結果を図 4-6 と図 4-7 に示した。

・日本人の「性別と接触相手」の交互作用

図 4-6 から分かるように、日本人において、「恋人との接触」、「同性友人との接触」、「異性友人との接触」については低いレベルで男女が同一グループを形成しており、男女差が見られない。しかし、両親については男女差が見られた。日本人女性と父親の接触は「異性友人との接触」に似ており、母親との接触は「同性友人との接触」に似ている。言い換えれば、日本人女性は父親と「異性友人のように」接触し、母親と「同性友人のように」接触する。一方、日本人男性は、「両親」という接触相手集団を構成していると言うことができる。

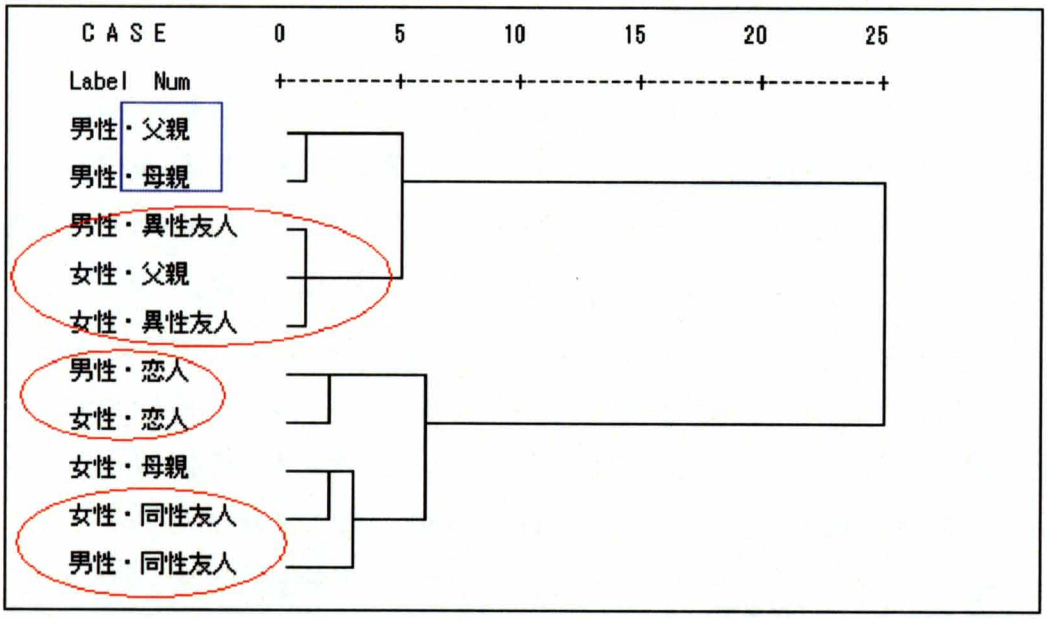


図 4-6. 性別と接触相手によるグループ間の類似性を表すデンドログラム(日本人)

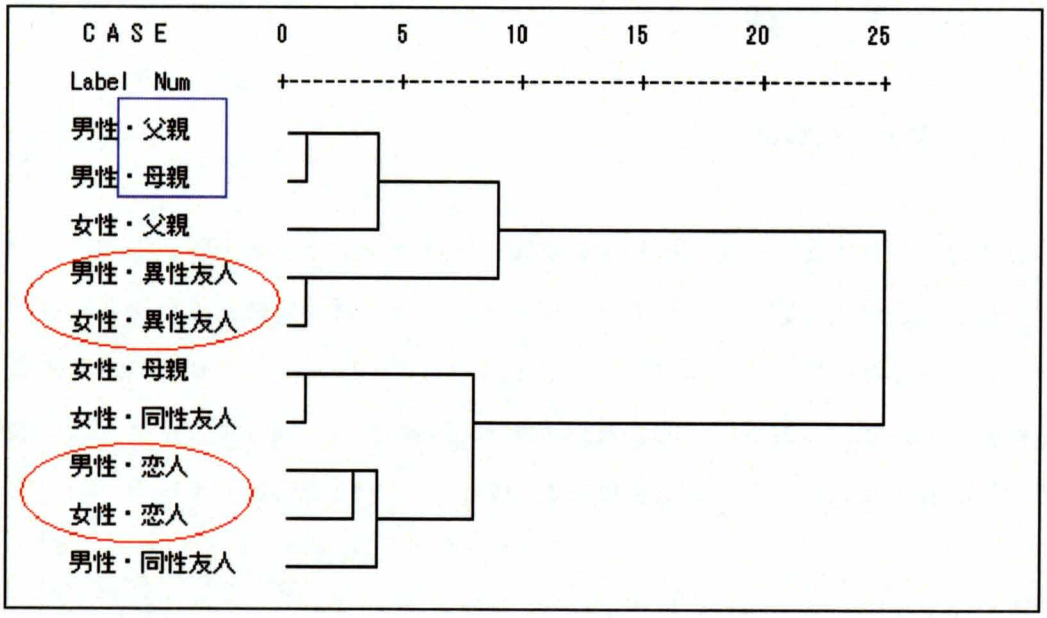


図 4-7. 性別と接触相手によるグループ間の類似性を表すデンドログラム(中国人)

・中国人の「性別と接触相手」の交互作用

中国人についてのクラスター分析結果を図 4-7 に示す。中国人の「恋人との接触」、「異性との接触」は日本人と同様、低いレベルでグループを形成し、特に男女差が見られなかった。中国人男性の「親との接触」も日本人男性と似て、「両親」というグループを形成している。日本と違うのは、中国人女性と「父親との接触」が中国人男性と「親との接触」に似ていることである。つまり、中国人女性にとって「父親」は日本人女性とは異なり、「異性友人」ではなく、「親」として接触していることになる。つまり、中国人女性はかなりよく父親に接触する。その接触程度は日本人男子が両親に接触する程度である。中国人女性はかなり高頻度に母親と接触し、その頻度は同性友人に対する頻度に近い。

日本人男性と「同性友人との接触」は女性と「同性友人との接触」に近いのに対し、中国人男性と「同性友人との接触」は「恋人との接触」に近い。この原因はおそらく、中国人の「恋人との接触」の頻度が日本人に比べて低い（数値データ）からであると思われる。

デンドログラムは大きく 2 つのグループに分けられる。上半分は「接触しない」群の類似性であり、下半分は「接触する」群の類似性であると言える。基本的にこの両群の構成は中国でも日本でも同じである。

4-5-2　場面と接触相手

場面と相手の交互作用について、接触率のグループ間ユークリッド距離に基づくクラスター分析を行った。結果を図 4-8 に示した。デンドログラムは非常によく接触される「私的状況の恋人、および同性友人」のグループとそれ以外のグループにわかれる。私的場面における母親との接触は公的場面における恋人および同性友人と同程度である。公的場面における父親と異性友人は「もっとも接触されない」グループを形成している。

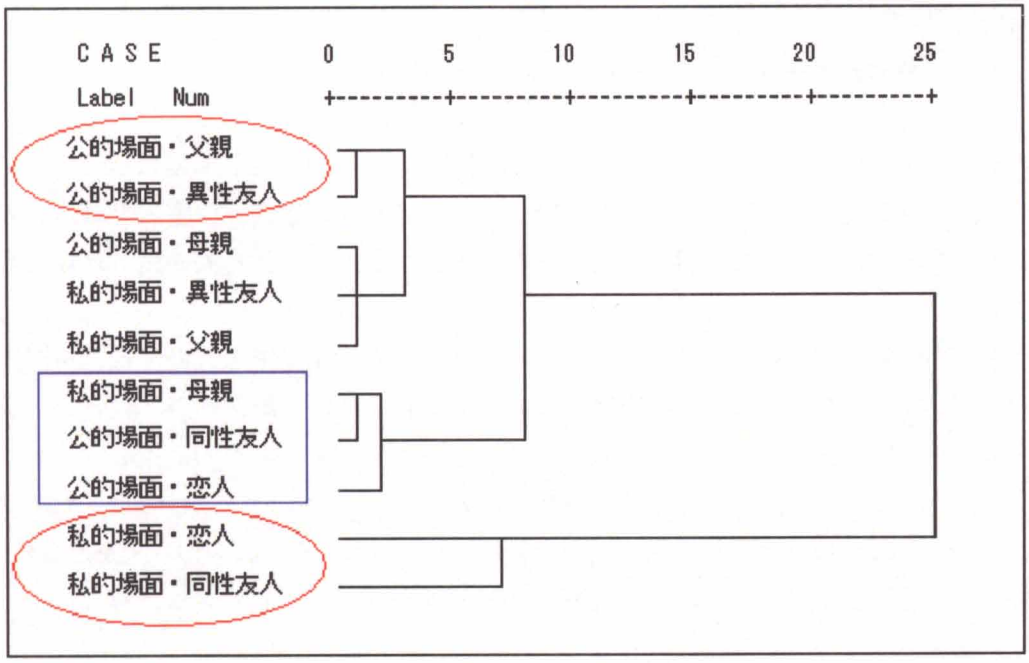


図4-8. 場面と接触相手によるグループ間の類似性を表すデンドログラム

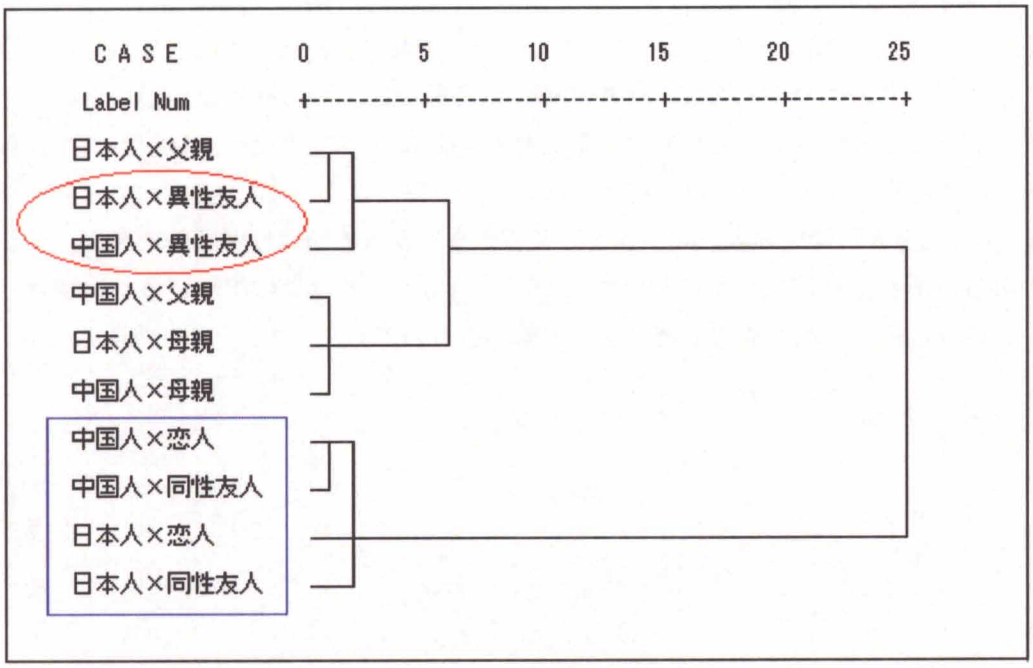


図4-9 国籍と接触相手によるグループ間の類似性を表すデンドログラム

4-5-3　国と接触相手

国と接触相手の交互作用についてクラスター分析を行った。結果を図 4-9 に示す。図から分かるように、接触相手が恋人の場合と接触相手が同性友人の場合、中国人と日本人の行動は比較的類似している。接触相手が異性友人の場合、中国人と日本人の値も比較的類似している。

接触相手が親の場合は少し複雑である。接触相手が日本人母親、中国人の母親、中国人の父親の場合は類似しているが、接触相手が日本人父親の場合だけが例外で、親というよりはむしろ異性友人と似ている。

デンドログラムを見ると、大きく分けて「異性友人」を含むグループは「もっとも接触がない」グループであり、「母親」を含むグループは「やや接触する」グループであり、「恋人」「同性友人」を含むグループは「よく接触する」グループであると言えるだろう。

4-5-4　主効果について

接触行動については、地域の主効果と、相手の主効果が有意であった。そこで、8 つの調査地域における接触行動からデンドログラムを作成し（図 4-10)、また、相手 5 種によるデンドログラムを作成した（図 4-11)。

図 4-10 から、北京・蘭州・武漢の接触行動は良く似ており、また、大阪と仙台は良く似ていることが分かる。これに対して、アモイの接触行動は他地域のそれとかなり異なっている。前に述べたように、アモイの接触行動は他の地域に比べて少ない。しかし、これらの違いを説明する要因は現時点では見当たらない。

図 4-11 から、恋人と同性友人の類似性と、父親と異性友人の類似性が顕著である。つまり、この両者はそれぞれ接触行動においてよく似ている。前者は身体接触が多く、後者では少ない。これらはいずれも前述の結果を再確認するものである。

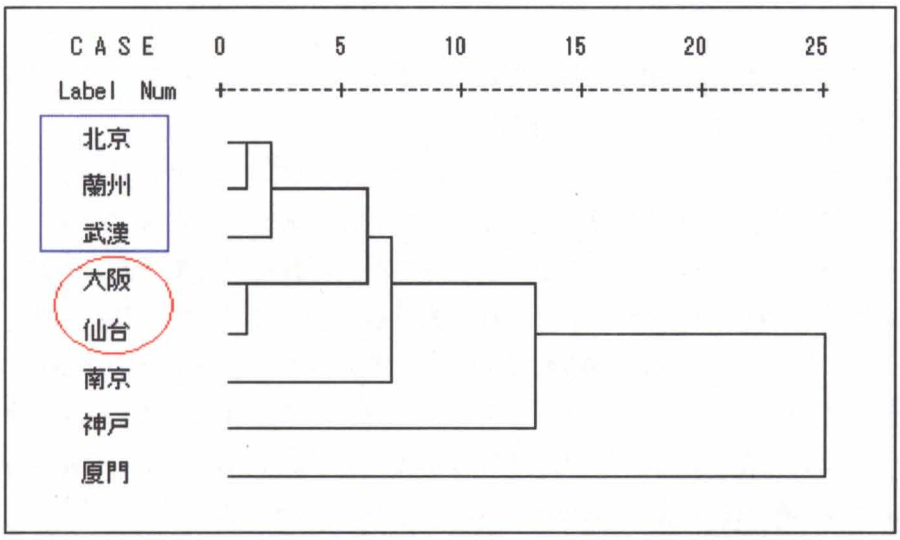


図 4-10. 地域の主効果に関するデンドログラム

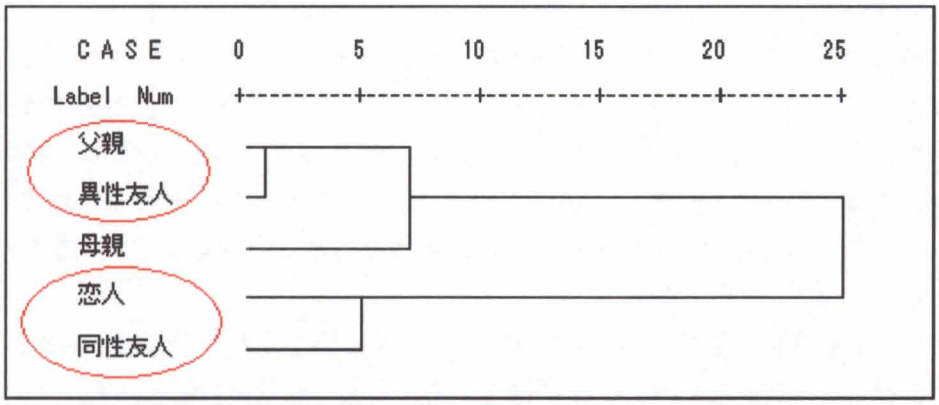


図 4-11. 接触相手の主効果に関するデンドログラム

4-6 考察

個々の結果について述べながら部分的に考察を行ってきたので、ここではすべての結果を通して見られる全体的な傾向について、再度確認することにする。

当初に筆者が考えていた、「中国人にくらべて日本人の接触行動は少ないのではないか」という仮説は、本調査結果に関する限り否定された。とりわけ恋人や異性友人に対する接触は、日本人のほうが身体の多部位に渡って高頻度であった。これに対して両親に対する接触は日本人ではあまり行われていなかった。これは先行研究の章で述べた、仁平らの一連の研究（1997a, b, c）が示す、日本人大学生は両親との接触が少なく、友人との接触が多いという知見と一致している。また、中国と日本では、両親に対する接触の性差も見られた。日本人女子大学生は異性親（父親）に対してはわずかしか接触しない。その接触はむしろ異性友人に対する接触に似ているところから、どちらかというと「触るべきではない」対象とされている可能性がある。

恋人に対する接触では中国人の接触は男女とも日本人の接触行動に比べて接触部位が限定されていた。また、恋人以外の異性友人に対する接触は日本人に比べて中国人はごく少なかった。この原因としては、2つ考えられる。一つは現代の中国においては、恋人に対する愛情表現の規範が日本に比べて厳しいことであり、もう一つは大学生で恋人を持っている学生数が日本に比べて少ないことである。特に後者については、次章の発達的調査の結果との関連を指摘しておきたい。つまり、日本のほうが、中学・高校など低学年のうちから「恋人」のカテゴリーに入る異性をもつ学生が増加しはじめるのに対して、中国では大学生になってからようやく「恋人」が増加を始めるという点である。また、異性友人に対する接触が少ないのは、筆者の見解では、現代の中国においては結婚相手となる可能性のある恋人を除いて、異性の身体に接触することには日本よりも厳しい規範が存在するためであろうと考える。

最後に、接触率の分散分析の結果、中国と日本という国の違いよりも中国各地、あるいは日本の各地における接触行動のバラエティのほうが遙かに大きかったことは、中国文化、日本文化のような国単位に区別された文化差（あるいは社会的規範の差）よりも、それぞれの調査地域における何らかの要因の違いのほうが大きいことを示すものである。例えば男子では南京の男子の接触率が高く、女子ではアモイの女子の接触率が低かったが、この

ような差異を容易に説明できるような要因は現時点では見あたらない。日本では理系の学生と文系の学生を比べると理系学生には「恋人」ができにくいということを聞くが、中国の場合にも、調査対象となった学生の専門領域などが関与しているのかもしれない。これらについては、今後の研究課題としたい。

引用文献

Barnlund, D.C. (1975). Public and private self in Japan and the United States : communicative styles of two cultures. Tokyo: Simul Press （邦訳）バーンランド, D.C.(著)、西山千・佐野雅子(訳) (1979)『日本人の表現構造』 サイマル出版会

呉映妍 (2006). 「身体接触行動における中日比較」 未発表修士論文 神戸大学大学院総合人間科学研究科

Hecht, M.L., Andersen, P.A., & Ribeau, S.A. (1989). The cultural dimensions of nonverbal communication. In M.K. Asante & W.B. Gudykunst (Eds.), Handbook of international and intercultural communication. Newbury, CA: Sage. Cited in McDaniel & Andersen (1998).

Jourard, S.M. (1966). An Exploratory study of Body-Accessibility. British Journal of Social and Clinical Psychology, 5, 221-231.

McDaniel, E. and Andersen, P.A. (1998). International Patterns of Interpersonal Tactile communication: A field Study. Journal of Nonverbal Behavior, 22, 59-75.

仁平義明・残間理恵・平田忠・Foster, M. (1997a).「身体的接触に反映された親子関係の文化的差異(1)」『東北心理学研究』 47, pp. 46

仁平義明・残間理恵・平田忠・Foster, M. (1997b)「身体的接触に反映された親子関係の文化的差異(2)」『東北心理学研究』 47, pp. 47

仁平義明・残間理恵・平田忠・Foster, M. (1997c)「身体的接触に反映された親子関係の文化的差異(3)」『東北心理学研究』 47, pp. 48

仁平義明・残間理恵 (1998)「親子の身体的接触に関する研究(3)」『東北心理学研究』 48,

pp. 38

鈴木晶夫・春木豊 (1989).「対人接触に関する試験的研究」　早稲田心理学年報, 21, pp. 93-98.

第5章　接触行動と発達

5-1　はじめに

視覚、聴覚、あるいは嗅覚のような遠感覚とは異なり、対象との間の距離がゼロであることから、接触は明らかに最も基本的な感覚のメディアであると言える。また接触行動は、哺乳動物の生殖と養育にとって欠くことができない。発達の側面からみれば、哺乳動物の新生児は母親との接触なしには栄養を摂取することができず、また、霊長類とりわけヒトの幼児では、出生後かなり長期にわたる期間、自ら移動する能力が未発達であるため、抱かれたり背負われたりして養育者と一緒に移動する。成長とともに、養育者との身体接触が個体の生存に対して持つ重要性は薄れていく。他個体との身体接触が次に必須となるのは生殖と、次世代の養育行動においてである。もちろん、社会生活を営む動物として所属集団の他の個体との間に行われるコミュニケーション行動としての接触は行われる。

動物としてのヒトを考えるとき、身体的接触は、哺乳時の母子間接触と、幼児期の初期に必要な移動時と、成長後における異性（配偶者）との生殖行動を除けば、他個体との直接の身体接触行動は生存にとって必須であるとは言えない。従って、これら以外の接触行動、すなわちコミュニケーション的な接触行動については、それぞれのヒト集団（社会）によって異なっていても、生命の維持には支障がない。つまり、接触行動にはヒトの集団ごとにかなり大きな変動が見られても不思議ではない。モンタギュー（Montagu）はアングロサクソン系の人々はラテン系の人々に比べてはるかに非接触的であると述べている（モンタギュー，1971；pp. 261-262)。彼はまた、アメリカ人と日本人の養育行動を比較した研究を引用して、アメリカの幼児に比べて日本の幼児のほうがはるかに親から多くの接触刺激を受けているが、その後は突然に皮膚接触が禁じられると述べている（モンタギュー，1971；pp. 256-259)。また、バーンランド（Barnlund,　1975)が行った日米の大学生比較によれば、日本人学生はアメリカ人学生の半分以下の接触行動しか示していない。つまり日本人成人の接触行動は非常に少ないことが分かる。

呉（2006）はバーンランドの方法に準じて、中国4カ所、日本2カ所の大学の大学生を対象に身体部位ごとの接触行動について調査を行い、日本人の接触行動の結果がバーンランドが得た結果とほぼ同様であること、また中国人と日本人の接触行動にはいくつかの点で差異は認められるものの、バーンランドが得た結果、あるいはそれに先だって Jourard

(1966)がアメリカ人大学生について得た結果と比較すると、中国人大学生と日本人大学生の接触行動はよく似ており、アメリカ人大学生に比べて他者との身体接触が圧倒的に少ないことを見いだした。

呉の分析結果によれば、身体部位ごとの接触頻度については、平均的には中国と日本の大学生の間にそれほど大きな違いはみられない。しかし、接触対象（接触相手）別に分析すると、中国と日本の大学生の接触行動には違いがある。呉によれば、中国人大学生も日本人大学生も、恋人と同性友人に対する接触行動はかなり高頻度にみられる。しかし、中国人大学生では接触行動が最も少ない接触相手は異性の友人であるのに対し、日本人、とりわけ男子学生では、最も接触行動が少ないのは父親であった。

このことは、先のモンタギューの指摘にあるように、日本においては親との接触頻度が、年齢とともに急激に減少するという言及と一致しているように思われる。そこで本研究では、成長段階によって他者への接触行動がどのように変化するかについて、中国と日本の大学生を対象に比較することを試みた。成長段階ごとに観察等によって接触行動を調査することは著しく困難であると思われたため、質問紙調査によることとし、調査対象者に対し、当人の成長段階ごと、接触対象者ごとに接触頻度の主観的評定を行わせるという方法をとった。

基本的には、生物としてのヒトに共通の特性として、幼児期には両親との接触頻度が高く、成長によって親との接触行動は低下し、発達とともに配偶者の候補者としての恋人との接触行動は増加すると予測される。仁平ら（1997a, b, c）は、日本とボリビアにおいて主として親との間の接触行動について質問紙調査を行い、因子分析の結果、ボリビアでは青年期以降も親との関係が維持されているのに対し、日本では身体的接触が親から友人へ移行するという結果を得ている。鈴木ら（1989）は、日本人大学生を対象に、両親と友人を接触者とし、発達の段階ごとに、接触された程度を10段階で評価させた。その結果、一般に女子学生のほうが接触されていること、また、年齢とともに両親や同性の友人との接触が減り、異性の友人との接触が増加するという結果が得られた。すなわち、発達とともに接触行動は変化するが、その変化の仕方は、調査対象となる地域によって異なること、両親や友人、とりわけ異性の友人との接触行動が青年期以後、大きく変化する可能性があることが示唆された。仁平らの調査では友人として同性と異性の区別をしていないこと、また、鈴木らの調査では異性友人を接触相手に含めながら、潜在的配偶者としての恋人との接触行動を調査の対象としていない。本研究では、中国と日本の大学生を対象に、父、母、

同性友人、異性友人のほか、恋人も接触相手として含め、これらに対する接触が年齢とともにどのように変化するかについて調べ、もし異なるとすれば、その原因について考察することを目的とする。

5-2 方法

調査対象は、中国における5カ所（北京、武漢、蘭州、南京、廈門）の大学の在学生と日本における3カ所（神戸、大阪、仙台）の大学の在学生とした。いずれの対象地も、国の直轄市（北京）あるいは中国の省都や日本の府県庁の所在地となる大都市である。調査は授業中に行われ、回収された。回収率は配布数を分母として、72%ー99%であった。中国では総数500名（内訳は男子学生261名、女子学生227名、不明12名）、日本では254名（内訳は男子学生94名、女子学生153名、不明7名）の回答が得られた。

調査の時期は2005年ー2006年。身体各部位の接触相手別の接触頻度に関する調査と同時に実施した。接触相手として、父親、母親、同性友人、異性友人、恋人の5つのカテゴリーを準備した。それぞれの接触相手を念頭において、成長段階ごと（幼稚園まで、小学1年から3年まで、小学4年から6年まで、中学校時代、高校時代、大学時代）の6つの区間にわけた。中国の学制は日本より複雑であるが、調査対象者が大学生であることから職業教育校は除外して、幼稚園まで、小学校（6年間）まで、初級中学校（3年間）まで、高級中学校（3年間）、大学とした。中国では9月が新学期であるのに対して日本では4月であるという違いはあるが、小学校入学時の児童の年齢は中国も日本も6歳ー7歳であることから、新学期の時期については集計上の考慮はしなかった。このほか、出身地、居住地、性別、年齢等の他、家族構成についても訪ねた。

接触の頻度については、鈴木ら（1989）に準じて、10段階で接触の程度（どの程度相手から触られたか）を評定させた。評定尺度は1を「全然触られなかった」10を「非常に良くさわられた」として10段階の任意の位置に丸印をつけるようにした。なお、幼児期における両親との接触は非常に高く評定されるため、他の評価は、この幼児期における両親との接触を基準点として相対的になされると考えられるので、このような主観的評価には十分な信頼性があると想定される。

5-3 結果

5-3-1 回答者数について

中国と日本の回答者数を接触対象別にまとめたものを図 5-1 に示す。当然のことであろうが、接触対象が恋人の場合、恋人がいない場合には回答がない。年齢が低い場合に、これは顕著である。このことは、年齢が低い場合の恋人に対する接触評定値に大きなばらつきが生じる原因となるだろう。それ以外の接触対象では、回答者のほとんどが回答している。例外は日本の大学生が父親に関して回答している場合で、無回答が多かった。原データを調べたところ、仙台の大学のデータのみ、父親と母親を対象とした大学生時点での回答に、欠損値が多いことがわかったが、サンプル数としては十分満たされていると考え、以下の分析を行った。

5-3-2 中国と日本の比較

国別、性別の分析を行った。性が不明の 19 名分の回答は処理から除いた。接触評定値の平均値を算出し、結果を図 5-2 に示した。全体として接触行動の変化を眺めると、成長にしたがって両親に対する接触行動が低下し、恋人（配偶者の候補者）に対する接触行動が増加する。同性友人に対してはほとんど変化せず、異性友人に対する接触行動は成長とともに漸減する。

父親に対する接触の程度は、幼稚園までの時期では、中国でも日本でも平均して 8.0-8.8 と高いが、成長に応じて低下する。中国人女子学生では幼稚園時代の 8.6 から大学レベルでは 4.1 に、男子学生では 8.4 から 3.3 まで、ほぼ直線的に低下している。日本人学生では、女子学生では 8.8 から 2.5 まで低下し、男子学生は 8.0 から 2.1 まで低下していた。また、図 1 が示すように、中国人学生の場合にはこの低下はほぼ直線的である。これに対して日本人では、幼稚園ー小学校低学年まで（7.3）は中国人（7.4）と大きな違いがないものの、小学校高学年では中国 6.5 に対して日本 5.3、さらに中学生では中国 5.4 に対して日本 2.7 と、成長するに従って接触が大きく低下していた。

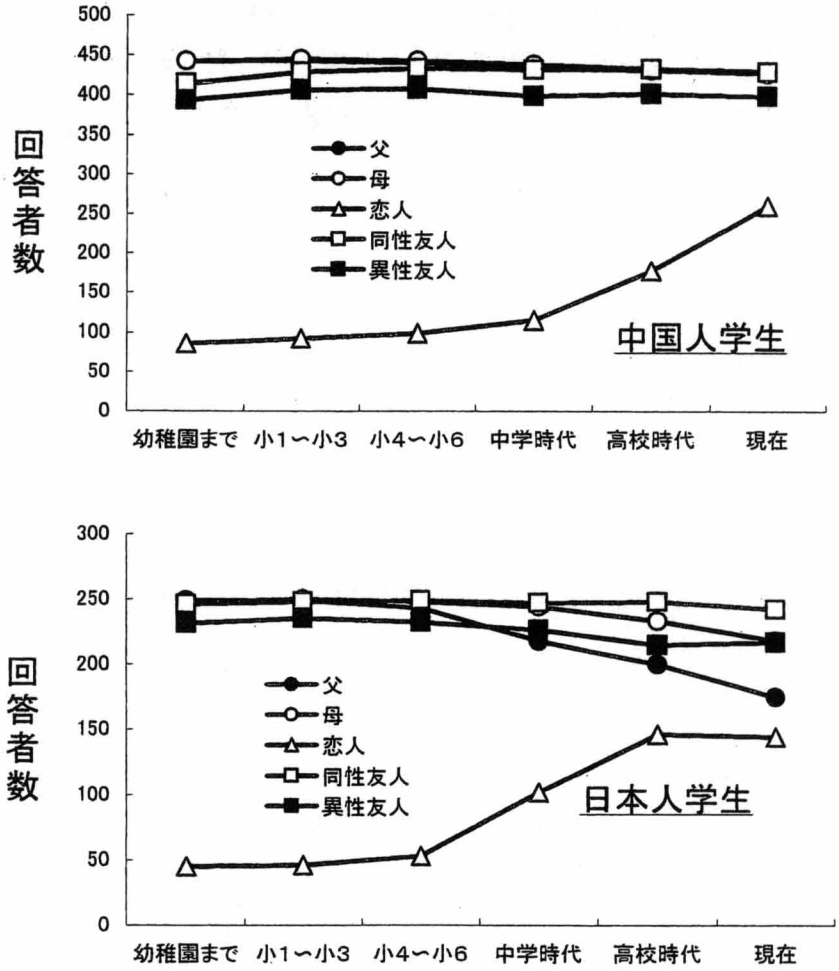


図 5-1. 調査地域別の回答者数

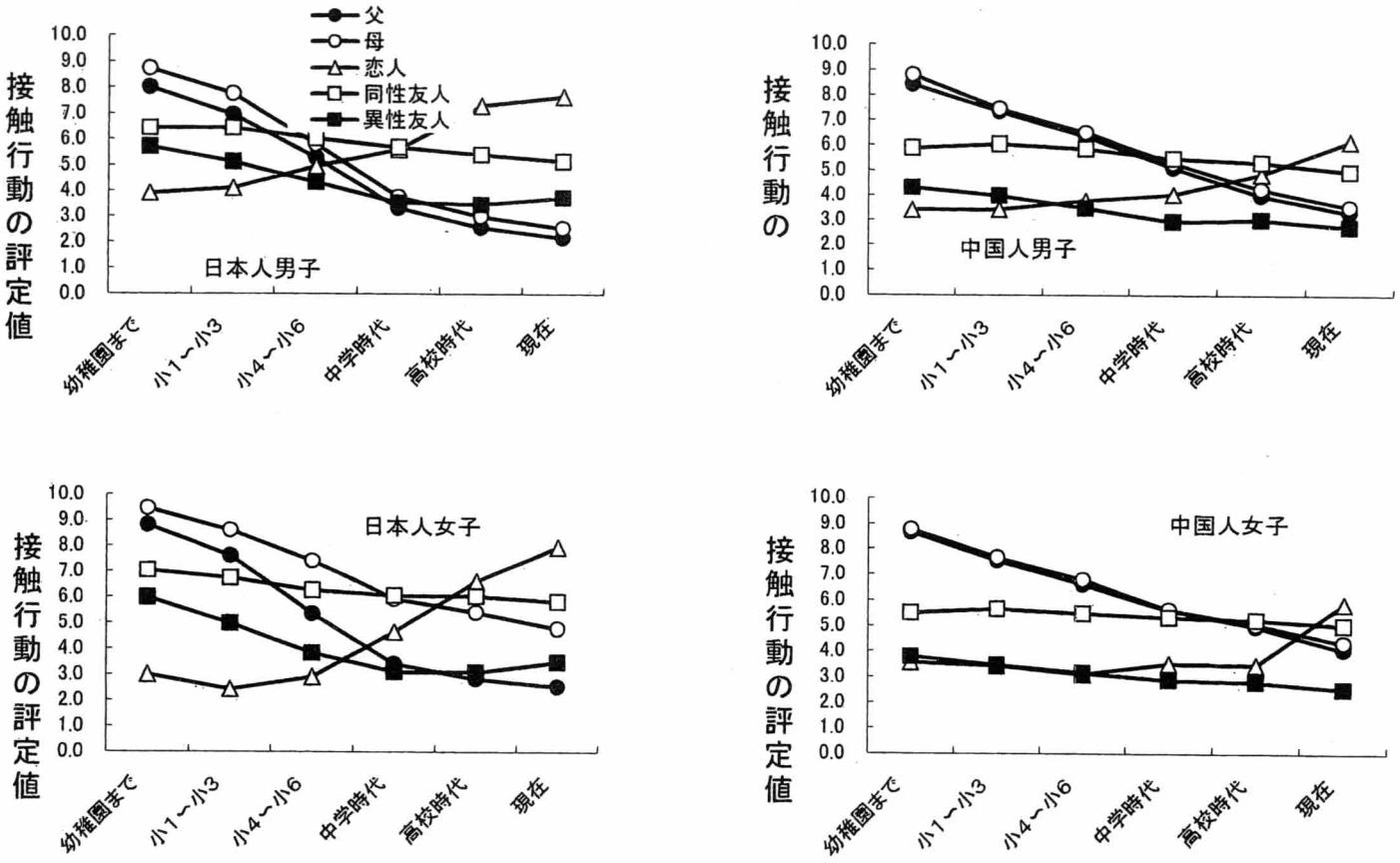


図5-2 接触相手別の接触行動の発達的変化

母親に対する接触の程度は、小学校入学前では中国でも日本でも8.8-9.1と高く、その後は成長に応じて低下する。中国ではその低下は男女とも、父親に対する場合と同様に直線的である。これに対して、日本では女子の場合にはほぼ中国人と同様の低下を示すが、男子では、母親に対しても、父親に対する場合とほとんど変わらず、小学校低学年から中学にかけて、急激な低下を示す。

恋人に対する接触は、中日両国の大学生とも、小学校高学年までは低頻度で変化がない。中国ではさらに中学校時代も低頻度のままである。日本人では中学時代から大学時代にかけて概ね5から7.8まで上昇するが、中国では男子は高校時代から、女子では大学時代から増加し、6.0程度にとどまる。

同性友人に対する場合、日本人において男女差がやや大きい以外、中国と日本の違いはほとんど見られない。これに対して、異性友人との接触は、中国では成長の各段階を通してかなり4.1-2.6と低い水準で推移している。日本では比較的高い水準の接触（5.9）が成長とともに徐々に低下し、中学時代以降は低い水準を維持して（3.3-3.6）変化が見られなかった。

5-3-3　国内の地域差

中国の5カ所と日本の3カ所の大学生について、接触相手別に平均接触評定値を算出したものを図5-3に示す。ここでは被調査者の性別は無視して集計している。中国の5カ所（各100名）については、恋人に対する接触にかなり地域差が見られるが、他の接触相手に対しては、多少レベルの違いはあるものの、ほぼ同一の変化が見られる。これらの特徴は、日本の3カ所（59名ー116名）についても概ね当てはまる。中国の大学生は父親、母親の両者に対して、ほぼ直線的に接触を減少させているが、日本の大学生は、小学校高学年から中学時代にかけて接触を大きく低下させている。同性友人に対しては両国の大学生はいずれも年齢にかかわらず一定の接触を示している。異性友人に対しては、大阪地区の大学のみがやや異なった変化を示している。

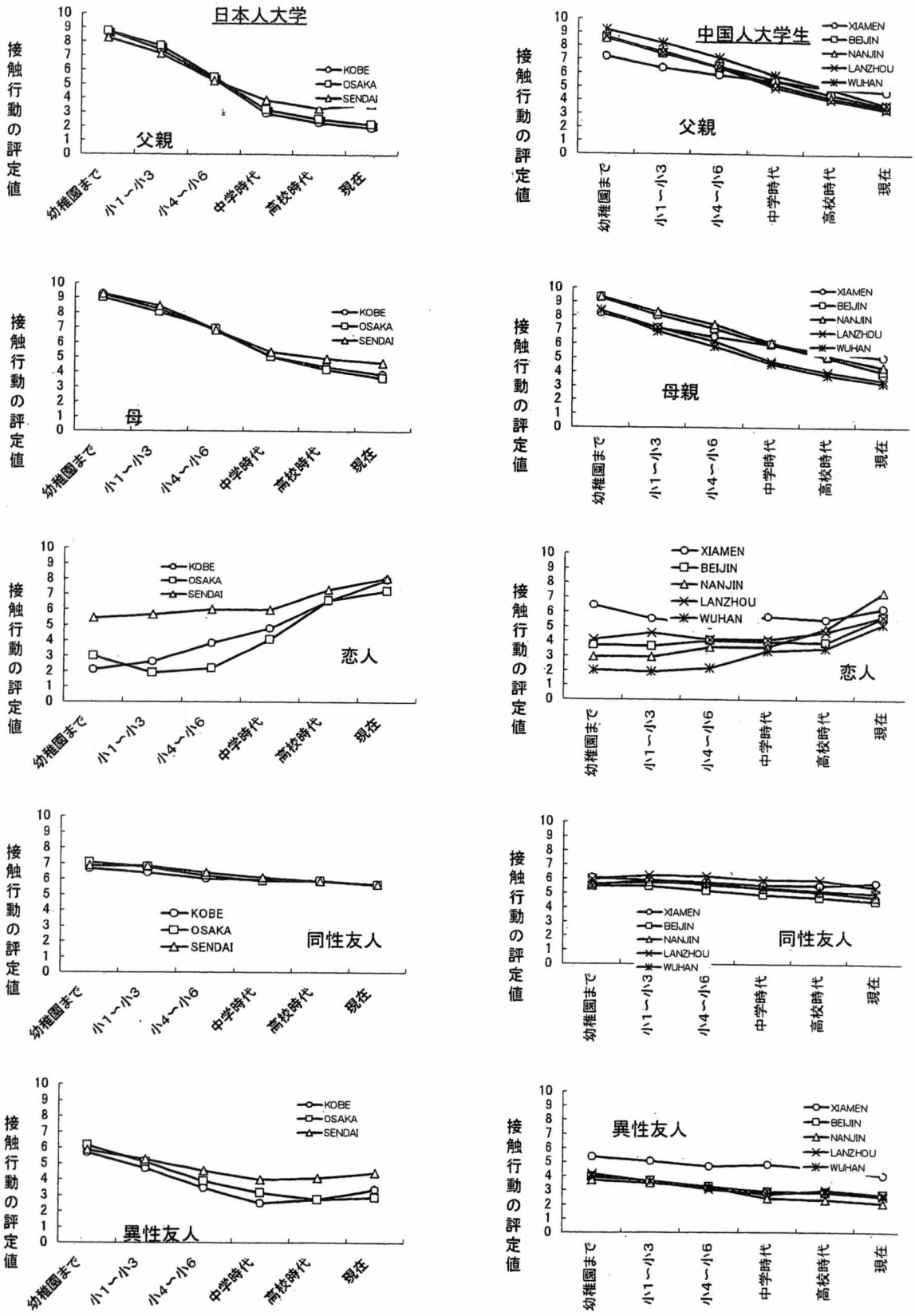


図 5-3 調査対象地における接触相手別の接触評定値の変化

5-4 考察

5-4-1 中国と日本の比較

両親との接触行動

中国人大学生においては、男女とも、また男親に対しても女親に対しても、成長にしたがって少しずつ接触が低下していくのに対し、日本人の場合、女子学生が母親に対する場合に限って中国人男女大学生と似た変化を示すものの、それ以外の場合には、親との身体的接触が大きく低下するという特徴が見られた。日本人大学生では学生の性にかかわらず、男親との接触行動が非常に少なくなるし、また男子大学生と両親への接触行動が非常に少なくなる点が特徴である。とりわけ日本人男子学生では、小学校高学年から中学校にかけての時期に親との接触が大きく低下している。このことは序論で述べたモンタギューが引用する知見と、よく対応しているように思われる。つまり日本人大学生、とりわけ男子は、中学生になる頃には両親との接触行為を著しく低下させる。これは、中国人の目から見れば、日本人はどうして肉親である親との接触が少なくなるのか不思議であり、また日本人の目からみれば、どうして中国人は大人になっても両親と身体的接触を止めないのかと不思議に思えるということであろう。

発達の初期における接触行動の重要性についてはハーロゥ（Harlow, 1959）の研究がしばしば引用されるが、社会性の動物においては、発達の初期における接触行動が重要であることを示す研究は少なくない。モンタギュー（1971）は日本とアメリカ合衆国の育児方法を比較した研究を引用している。それによれば、「日本の母親のほうが子供と過ごす時間が長く、身体接触が多い。このため日本の幼児はアメリカの幼児よりずっと多くの安心をもたらす皮膚刺激を受け（中略）それが身体的な鎮静と環境についての受動性へと子供を誘う（中略）そうして子供が歩き出す年齢に達すると、こんどは長時間、全く一人ぼっちで投げ出されてしまい、他人に触れるという潜在的タブーに順応することを学ばなければならないのである。(pp. 256-258)」という。またモンタギューは、日本の幼児が家族と一緒に就寝すること、家族と共同入浴することを挙げ、「この共同入浴の型は、日本人の子どもが10歳頃になるまで、あるいはそれ以上になっても続けられる」が、それと対照的にアメリカの母親は幼児と一緒に入浴することはめったにない、と述べている。

この点について、中国人には浴槽につかる入浴習慣が少ないため、日本と比較すること

ができない。調査を行ったわけではないが、多くの場合、中国における子育てはアメリカ的な子育てよりは日本の子育てに近く、両親あるいは母親と一緒に就寝することが多いようである。

竹内ら（2001）は、上海と大阪の保育施設における児童の行動と保育行動を比較した。彼らは、上海市内の託児所のゼロ歳児6名、1歳児9名と、大阪府茨木市の保育所の、ゼロ歳児3名、1歳児13名を対象に、抱く、接触、話しかける、視線を送る等の保育者と乳幼児の行動について、来所から帰宅までの間に、特定行動の生起数をカウントし、比較している。その結果、1歳児に対する視線行動の頻度は大阪が上海の約3分の1と低いが、抱く行動は大阪のほうがやや多かった。また接触行動については両施設とも、ゼロ歳児に対するよりも1歳児に対する接触のほうが多いが、施設間には、ほとんど差がないという結果が得られている。なお、上海における調査対象児は、いずれも漢民族であった。

もちろん、上海における接触行動調査をもって、中国人乳幼児の典型例と言うことはできないが、乳幼児に対する保育者からの接触行動には両国ともそれほど大きな違いはないと考えてよさそうである。つまりこの時期には、接触行動の規範に中日の差はないということであろう。従って、中国と日本における、発達に伴う両親に対する接触行動の違いは、乳幼児期の接触体験のせいではなく、むしろ成長後における社会的な制度や規範の影響によるものと言えそうである。

このような両親への接触行動の中日差を説明する一つの可能性として、中日における親子関係の質の違いが挙げられるかもしれない。日本では、結婚式において親は主賓にはならず、多くの場合、子の社会的活動と関連した人（勤務先の上司や大学時代の教員など）が主賓となる。つまり、日本の結婚式は、子が社会的に認知される儀式である。しかし一般に中国人は結婚するまでは親と子の関係を保つために、結婚式は子が親から独立する儀式であり、従って結婚式においては親が主賓となることが多いようである。それだけに、中国では、結婚式以前には親と子の繋がりがあることが当然のこととされることは理解できる。ではなぜ、日本人学生は成長の早期から親と接触しないようになり、それが男子に顕著であり、とりわけ男親に対して顕著なのであろうか。

これについては今後、さらに研究を進めねばならないが、いくつかの可能性を指摘することはできる。一つは、日本では交通運賃始め様々な公共料金が中学生から大人料金となることである。このため本人だけでなく、周囲の人々も、中学生になることを「大人」の出発点として認識している可能性がある。この点、中国の鉄道では、身長110cm未満の子

供は成人が同伴すれば無料、身長 110cm を越えた時点で有料となるが、110cm から 140cm までは成人が同伴すれば半額、140cm を越えると大人運賃である（鉄路旅客旅行須知, 2007）。つまり、中国では、日本とは異なり、小学生から中学生になることによって「大人扱い」が始まることはないのかもしれない。

先に、モンタギューが入浴行動について特に述べていることに言及したが、日本の公衆浴場では「公衆浴場入浴料金の統制額の指定等に関する省令（昭和 32 年 9 月 12 日厚生省令第 38 号）」に基づいて、12 歳から大人料金となっている。博物館、美術館の入場料については小中学生が同一の料金カテゴリーに入るところが多く、映画館もそうであるが、遊園地等では中学生から大人料金（ユニバーサル・スタジオ・ジャパン）や、あるいは中学生と高校生が同一料金カテゴリーになっており、中学生からは料金が相当高くなる（東京ディズニー・リゾート）例がある。日本において、小学校の 6 年間を同一料金体系のもとで過ごし、自意識が目覚め始める中学生入学の時期に、日常生活の多方面において料金が大人並みに変わることは、直接に「大人意識」を持つとまではいかないまでも、「もう子どもではない」という自意識を、いわば非連続的に持たされることになる。

さらに、おそらく日本に特有の現象であるとおもわれるが、公立の学校においては、小学校では自由服であるが、中学生には制服が指定されていることが多い。これに対して中国では、小、中、高校生とも制服が指定されていることが多いようである。

上記のことは決して公共料金等の制度が日本人の接触行動を規定しているという主張ではない。むしろ逆に、日本人が持つ成人に関する何らかの規範が、料金の体系等に反映されていると見るべきであろう。

日本では中学入学を機に「もう中学生なのだから」と、「大人扱い」が始まることが多くなるのに対し、中国では特に「大人扱い」が始まる制度的きっかけがない。成人式に関しては中国では 18 歳から選挙権が与えられる。日本の 20 歳よりも早いが、選挙権を持つことで周囲から大人扱いされるということはなく、むしろ結婚や就職による経済的自立によって大人扱いが始まるように見受けられる。

第二に挙げられるのは、日本における親子関係、とりわけ父親との親子関係が特殊であるという可能である。日本の父親は勤務時間や通勤時間が長く、子どもと接触する時間が少ないかもしれない。しかし父親との接触について性差が見られないのに母親との接触については性差が見られることから、単純に在宅時間が短いことが原因であるとも言い切れない。中日の親子関係の違いに関するこの二つめの仮説を検討するためには、中日両国の

一般的家庭における父親あるいは母親の在宅時間について、女性男性それぞれの有職率・就労率の比較等を行う必要があろう。

第三に挙げられるのは、中国における一人っ子政策の影響である。日本においても少子化が著しく進んでいるが、もし両国における家族内の兄弟姉妹の数に大きな差があるとすれば、兄弟姉妹の数が少ないほど両親から接触される機会が増え、これが他の接触相手との間の接触行動の評定に影響する可能性がある。そこで調査項目のうちの家族構成のデータから、調査対象地別に、家族を構成する者の人数を集計し、平均値を求めた。その結果を表 5-1 に示す。祖父母との同居が日本（0.2〜0.3 人）より中国が（0.4〜0.6 人）と多いこと、北京では姉妹の数が他の地域にくらべて若干少ない（0.1〜0.2 人）ことが表から見てとれる。日本の 3 地区の兄弟数はいずれも中国の 5 地区に比べて多いか等しいから、日本のほうが兄弟の数がやや多いと言えるが、姉妹の数については神戸で妹の数が目立つほかは、ほとんど違いがみられない。兄弟姉妹の数には中国国内、日本国内の地域でもかなりばらつきがあるにもかかわらず、図 5-3 に見られるようにそれぞれの国の内部における接触行動が非常によく似ていることから、これらの発達的変化が家族構成に帰因される現象とは考えにくい。

日本人女子大学生の特異性

日本人女子では、母親との接触は中国人の場合と似た減少を示すが、父親との関係においては、日本人男子が両親に対して示すのと同様の、急激な減少を示す。日本人男子が比較的早期から「親離れ」を強いられるのだとすれば、女子においても「親離れ」が求められているのだが、女親との関係においては接触を維持していることになる。この結果は、呉（2006）が接触対象別に、実際に接触する部位について尋ねた結果を分析した結果と同様の結果であった。

恋人（配偶者候補者）との接触行動

日本人学生は中学生ころから恋人に相当する異性との接触が増加しはじめる。これは、大人としての自己認識が始まることと関連するかもしれない。また、異性であっても単なる友人に対する場合は、むしろ接触行動が低下することから、成熟によって両親との接触が低下して特定異性との接触が増加するにつれて、その特定異性を他の異性から区別していると考えるべきかもしれない。中国における接触行動については、日本人と比較するか

ぎり中国人男女のほうが性的接触を始める時期が遅い。これは両親との接触が日本人に比べて高く維持されていることと関連があるかもしれない。つまり、性的行為の出現と親との接触低下とは機を一にしている可能性がある。

恋人に対する接触は同一国内でも地域差がかなり見られた。この原因としては、低学年において「恋人」への接触を回答した者が比較的少数であったことが挙げられるだろう。幼稚園時代においても、好ましい異性が存在することは事実であろうが、「恋人」という範疇に入れて良いかどうかという点では問題が残る。本研究の調査においても、この可能性は検討されたが、接触相手が恋人の場合においてのみ、あえて低学年時の体験を尋ねないという仕方にも積極的な長所が認められなかった。年齢が上がるにつれて地域差が減ってくることから、低年齢における平均値のばらつきが大きいことは、低年齢の場合に回答者が少ないことを反映しているものと考えられる。廈門を例にとれば、100 名の回答者中、恋人を対象として幼稚園時代の回答をしたのはわずか 9 名であった。

友人との接触行動

同年代の同性友人については、性や国の違いも、また同一国内における地域差もまったく見られないという結果となった。これは同性友人に対する接触行動の規範が成熟とは無関係であることを示していると思われる。しかし、この結果は、現実に行われる同性友人に対する接触行動が中国と日本で同じであることを示していると考えるべきではないであろう。筆者らの研究の発端は、日常生活における素朴な観察結果によるかぎり、日本人学生のほうが同性友人に対する接触が少ないという知見である（呉、2006)。その意味では、本研究の調査結果は、いずれの接触対象者においても、接触行動そのものの評定値というよりは、接触行動規範の評定値であると解釈すべきかもしれない。

5-4-2　国内における地域差

恋人の場合を除いて、同一国内における接触評定値の散らばりはそれほど大きくない。異性友人については、中国では廈門が、日本では仙台が他と若干異なった傾向を示しているように見えるが、これらは回答数が少ないことを反映していると思われる。従って本研究における調査結果のうち、国と性別について得られた結果は、国内の地域差の反映では

ないと結論できるだろう。

鈴木・春木（1989）が首都圏の大学生を対象に行った調査結果と比べると、本研究における日本人大学生の結果は、父親、母親に対する接触行動が中学時代までに大きく低下していること、女子大学生では父親に対する接触行動の低下が著しいことなど、本研究の結果とほぼ同様の結果が得られている。鈴木らの研究では、異性友人に対する接触行動が中学時代以降増加しているが、これは、彼らの研究では接触相手として、潜在的な配偶者としての恋人が含まれていないことから、接触相手としての両者に対する評価が混在しているものと思われる。

方法の節で述べたように、一般に幼児期における両親との接触行動は非常に高い。本研究結果においても、概ね9程度の評価が得られており、調査対象大学生が他の接触対象との接触行動を評価する場合、これを基準として参照することができたと考えられる。すなわち、中国人大学生は両親との接触行動は徐々に減少したと認識しているのに対し、日本人大学生は、小学生高学年から中学生において両親との接触行動がやや急激に減少したと認識しているという知見はそれぞれの国の内部ではつねに成立する事象であった。また、日本人学生の接触行動の変化について、鈴木らの先行研究とほぼ同様の結果が得られたことは、主観的な接触行動の評価法の信頼性を示すものと考えられる。

5-5 まとめ

中国人大学生と日本人大学生を対象に、接触行動の発達的変化について、記憶に基づく接触頻度の評価を元にして調査し、その結果を比較した。両国の大学生とも成長につれて、両親との接触が少なくなり、配偶者の候補者としての恋人との接触が増加していた。両親との接触については、日本人大学生とりわけ男子学生は早期から接触率を低下させていた。このことは、日本人が比較的早期から両親との接触を失うという知見と一致するものであった。恋人との接触は、日本人大学生のほうが早期から増加傾向をみせた。友人への接触行動は、中国では成長による変化が少なく、また性差もみられなかったが、接触相手が同性友人の場合に比べ、異性友人への接触は少なかった。日本では、同性友人に対しては成長による変化は同様に少なかったが、女性のほうが接触頻度は一貫してやや高かった。女性のほうが接触頻度が高いという結果は、先行研究の結果と一致する。異性友人に対しては、日本では発達の早期にはかなりの接触がみられるが、中学時代からは抑制され、中国

人大学生の場合とほぼ同じレベルとなった。

中日間に見られる差異について、中国の親子関係が日本よりも濃密である可能性と、日本における社会的制度（公共料金）が発達の早期から「大人意識」を作り出している可能性について検討した。異性への接触については、恋人の場合、また異性友人の場合を含み、中国におけるほうが、接触が抑制される傾向がみられた。日本における親子関係が、接触行動に関するかぎり、中国やボリビア（仁平ら，1997a, b, c）に比べて青年期以降、希薄になることが示された。またこの結果はモンタギュー（1997）に挙げられている日米比較研究の結果とも整合するものである。

手をつなぐという接触行動については、中国人女子学生には頻繁に観察されるのに対して日本人女子学生にはほとんど見られないという素朴な観察から、日本人のほうが非接触的であるという印象があるが、1) 手をつなぐという行動以外の接触行動についての資料がないこと、2) 主観的な接触頻度評価という調査方法においては、接触頻度の成長による変化を見いだすことはできても、接触行動の頻度の絶対的比較ができないことから、日本人と中国人のどちらが一般的に、より接触的であるかという問いには答えることができなかった。接触行動は日常それほど意識して行われることがない。今後はさらに公共場面や実験場面における接触行動の観察を行う必要があろう。

東アジアの国として、日本は長い間中国の文化や制度の影響を受けてきた。たとえば元服の儀式や儒教道徳はその例であろう。しかしこれらの現代における影響力の強さについて評価することは容易ではない。筆者らは、他のアジア圏の国々やアメリカ・ヨーロッパ圏においても同種の調査を行う計画を持っているが、心理学の立場から非言語コミュニケーションとしての接触行動を研究するだけでなく、さらに文化人類学的な視点や知見も加えていくことが必要であろう。

引用文献

Barnlund, D.C. (1975). Public and private self in Japan and United States: Communicative styles of two cultures. (「日本人の表現構造」西山・佐野（訳）サイマル出版界、1979)

呉映妍 (2006). 「身体接触行動における中日比較」 未発表修士論文 神戸大学大学院総合人間科学研究科

Harlow, H.F. & Zimmermann, R.R. (1959). Affectional Responses in the Infant Monkey Science, Vol. 130, No. 3373, pp. 421-432.

Jourard, S.M. (1966). An exploratory study of body-accessibility. British Journal of Social and Clinical Psychology. 5, pp. 221-231.

Montagu, A. (1971). Touching: The significance of the skin. New York : Columbia University Press. (「タッチング：親と子のふれあい」佐藤・佐藤（訳）平凡社、1977)

竹内伸宜・上原明子・亀島信也 (2001). 保育者のかかわりの様式と乳幼児の発達：上海と大阪の保育施設における行動の文化比較 荘厳舜哉（研究代表）科学研究費補助金研究成果報告書「文化特異的養育行動と子どもの感情制御行動の発達-その日中比較-」pp. 69-78.

鉄路旅客旅行須知 (2007). 全国鉄路旅客列車時刻表 pp. 290-291 中国鉄道出版社

第6章　まとめ

6-1　中国人と日本人の接触行動

調査結果から読み取れた事実について、接触行動全体、国別、男女別、場面別、能動受動別の6つに大別して考察する。

6-1-1　全般

まず、全体としてみると、中国人と日本人の身体接触行動には大きな違いが見られなかった。部位別の接触頻度も中国人と日本人ではほぼ一致していた。中国人の身体接触頻度は日本人より多いのではないかという仮設は支持されなかった。全体的に中国人より、日本人の身体接触頻度の方がやや高かった。先行研究の結果と比べてみると、今回の日本人の接触頻度数は1979年のバーンランドの調査、1984年の林の調査より少なかった。バーンランドの研究と林の研究はほぼ同じ年代に行われたのに対し、今回の調査は20年経って行った。全体的に日本人の身体接触頻度が減ってきていることになる。先行研究の調査方法の細部が見えないので、調査の仕方によるものかどうか判定できないが、原因の究明にはさらに調査が必要である。

全体的な平均だけでは、細部の事実を見逃すことになる。まずは男女別で見ると、第6章の4-3-2　の節で述べたように、日本人女性の接触頻度が最も多く、次に中国人女性、中国人男性、日本人男性という順番になっている。これは、女性は誰よりも多く触られ、誰よりも多く人を触る傾向があるという先行研究の結果を支持している(Jourard, 1966;バーンランド, 1979)。

場面別で比較した結果は、公的場面より、私的場面の方の接触頻度が多い。特に接触相手が恋人の場合、私的場面においては多く接触している。全身体部位の平均接触頻度で、中国人が38.7%で、日本人が53.2%であるのに対し、公的場面においてはわずか24.9%(中国人)と28.2%(日本人)であって、同性友人29.3%(中国人)、30.5%(日本人)よりも少なく、私的場面と公的場面での接触頻度の差が大きいことが分かった。しかし、接触相手が恋人の場合と対照的に、接触相手が異性友人の場合、私的な場面と、公的な場面の接触頻度は12.2%と10.8%(中国人)、23.4%と17.0%(日本人)で、ほとんど違いがない。

身体部位による両場面の相関係数は0.85を越えている。全般的にみれば、公的場面と私的場面の接触行動とは、接触部位に違いがあるのではなく、接触頻度に違いがあると言うことができるだろう。

6-1-2　接触相手

第3章で述べたように、大学生を対象とする調査では、恋人との接触について調査する必要があると考え、先行研究では「異性友人」しか扱われていなかったが、今回の調査は、「恋人」というカテゴリーを加えた。今回の調査結果の興味深いところは接触行動における恋人と異性友人との違いにある。

まず、中日両国とも恋人との接触は多いが、日本人女性と比べ、中国人女性の場合、同性友人や母親との接触の方が多く、恋人との接触はむしろ少なかった。

日本人女性も男性も恋人との接触頻度が他の相手に比べ、最も高かった。中国人女性では「同性友人」ほど「恋人」と触ってない。中国人男性の場合は「恋人との接触」と「同性友人との接触」にあまり差が見られないが、異性友人との接触は断然少ない。中国では「同性愛者」ということばが使われないほど、同性友人の間の接触を特別視していないので、同性友人同士が腕を組んでいても何も言われない。中国人男性は結婚しても同性友人と密接な関係を持ち、それは社会的な付き合いとして認められている。それとは逆に、恋人でもないのに異性と接触したりすると社会的に厳しい目で見られるため、異性友人とはめったに接触しない。異性友人との接触は、5つの相手の中で最も少なく、親との接触の方が多い。中国人は成人になっても親の元を離れないことが多く、親と手を組んで道を歩いても笑われることが無い。むしろ親孝行だと見られ、羨ましがられるため、親との接触も多いと考えられる。

日本人も異性友人との接触は恋人より少ないが、親との接触よりは多い。今回のデータでは、男性で、親と接触があると報告した接触頻度は10%前後で、ごく一部の人しか親と接触しないという結果である。日本人女性と母親は既に述べたように、同性友人のように接触しているので、同性友人と同じ、接触は30%くらいある。日本人女性と父親、日本人男性と父親、日本人男性と母親との接触はごくわずかしかない。

成長の過程における接触頻度にもさまざまな変化の仕方のあることが認められた。親との接触が減っていき、友人との接触が増えてくる。当たり前のように思うかもしれないが、

当たり前ではない。各段階の接触行動に何らかの変化が起きたとすれば、その段階においてそのようは変化を起こす要因があるのであろうと推測できる。つまり、成長段階での、学校教育、家庭教育、周りの社会環境などが影響となる。第5章ではそれらの要因について考察を加えた。モンタギュー(1971)が引用している日米の比較研究結果が示すとおり、日本では、中国に比べても、小学校入学以後に急速に両親との接触行動が低下することが明らかであった。小学校入学以前の接触行動についてさらに調べてみる価値は十分あるが、幼い頃の記憶は明確ではない。幼児期の接触については、観察に基づく客観的な調査を行う必要があるだろう。

6-1-3 性別

先行研究の日米比較では性別の違いよりも日米文化の違いの方がはるかに大きい影響を及ぼすという結論であった(バーンランド,D.C., 1979)。しかし、今回の研究で中日比較の結果では、中国と日本との間にはそれほど違いが無かった。むしろ、男性と女性の間の差の方が大きかった。つまり「国の違いより、性別の違いが大きい」という結果が出た。この結果はバーンランドの結論と矛盾しているようだが、そうではないと思われる。

もし身体接触行動が一種の文化というのならば、中国と日本は同じ文化範疇に入るのであろう。現在の若い世代がアメリカに親近感を持っていると言われているが、身体接触行動においては、日米に大差があるのに対し、中日は近似している。中国と日本は「近くて遠い国」と言われているが、接触行動から見るかぎり、中日両国は遠い存在ではないことがわかる。身体接触行動がこれほど近似していることは、身体接触行動を基にしている他のコミュニケーション行動や意識も似通うようになる可能性が高いだろう。

お互い助け合い、影響しあってこそ、今日の中国と日本があったのである。これからも影響しあっていくことであろう。誰もが知っているように、違いがあるからこそ交流しなければいけないのである。交流し続けることこそ、分かち合う日が必ず訪れるのである。中日の非言語行動を客観的に比較することは、両国の相互理解の架け橋になるだろう。

全体として中国人の接触行動と日本人の接触行動のパターンとは、それほど違いが見られなかった。しかし、相手に応じて、国籍の違いが見られた。中国人も日本人も、恋人や同性友人との接触がより多く、異性友人や両親との接触がより少ない。中国人女性は父親に対し、中国人男性が父親に対するのと同様に接触するし、母親を同性友人のように接触

する。日本人女性も母親との接触は同性友人のようだが、父親は異性友人のように接触していることが分かった。また、中国人男性は同性友人を恋人と同じくらいに接触しているが、日本人男性の「同性友人との接し方」は日本人女性の「同性友人との接し方」と類似していることが分かった。しかし、中国人の「恋人との接触」は「同性友人との接触」より少ないことに注意する必要がある。バーンランドの研究が示したように、中日の女性は男性に比べ他者から触られるし、他者を触る。

全体的に、中国人であるか日本人であるかによる接触の違いはそれほど目立たず、私的場面にいるか公的場面にいるかによる接触の違いの方が最も大きい。そして、男性か女性かによっても接触するパターンが異なるし、接する相手によっても異なることが明らかになった。

接触頻度の変化については、成長につれ、中国人も日本人も親との接触が減り、恋人との接触が増え、同性友人や異性友人との接触はそれほど変化しないが、全体的に日本人の方の変化が、激しいという結果を得た。

6-2　人間の接触行動

ここでは中国と日本における調査結果と関連する、より一般的な接触行動について述べる。

6-2-1　東アジアの接触行動

日本人が非接触的であることは Barnlund (1975) の研究でも言われているし、Montagu (1971) の著書にもそのように書かれている。本研究では日本と中国の接触行動には Barnlund (1975) が見いだしたような、国による劇的な効果はまったく見られず、むしろ、中国と日本の接触行動にはそれほど大きな違いがないことを見いだした。さらに林 (1984) が日本と韓国の間に接触行動の違いを見いださなかったことを加えれば、これらの結果は、McDaniel & Andersen (1998) の観察による結果、つまり東北アジアの国々の人々がもっとも非接触的であるという知見とよく一致している。彼らのデータによれば、観察された 24 カ国、154 ペアのうち、もっとも非接触的であったのが韓国（平均接触部位が 0.91)、次が中国（香港と台湾を含む；同じく 1.33)、第 3 位がタイ（同じく 1.67)、第 4 位が同率

で日本、ビルマ（ミャンマー）、グァテマラ（同じく 2.00）と続いている（p. 75, Table A2）。McDaniel & Andersen（1998）はこの東北アジアにおける非接触性を、孔子の儒教が支配的であるせいだろうと推測している（p. 70）。Jourard（1966）はプロテスタント・カトリックの女子学生に比較してユダヤ教の女子学生では異性友人からの接触部位が少ないと述べ、宗教による接触の相違を指摘している。しかし現時点では、国や地域による接触行動の差異を統合的に説明する仮説は提出できそうにない。

この結果は、これから中国人と日本人がコミュニケーションする時に役立つことであろう。もちろん単純に接触と言っても接触の部位、接触の仕方、接触のタイミングなどがあると考えられる。接触が多ければ多い方がいいというわけではないことは言うまでもない。接触に対する反応や対応も個人差があって、一概には言えないが、大切なのは互い理解しあい、相手の立場を考慮し合うことだと思われる。中国人と日本人の会話や接触がさらに円滑になることを心より願う。

本研究では中日接触行動の比較研究を初めて試みた。今回は中日比較に絞り、中日の接触行動の異同だけを考察した。将来は中国国内また、日本国内で異なる地域の差を比較することで、同一文化圏内の非言語行動比較を進める一方で、中日以外の国々における接触行動についても調べていきたいと考える。筆者は、そのような目的のために、今回の研究で用いた中国語版、日本語版と同様に、英語版と韓国語版の質問紙を試作している（巻末資料参照）。

引用文献

Barnlund, D.C. (1975). Public and private self in Japan and the United States : communicative styles of two cultures. Tokyo: Simul Press （邦訳）バーンランド, D.C.(著)、西山千・佐野雅子(訳) (1979)『日本人の表現構造』 サイマル出版会

Jourard, S.M. (1966). An Exploratory study of Body-Accessibility. British Journal of Social and Clinical Psychology, 5, 221-231.

McDaniel, E. and Andersen, P.A. (1998). International Patterns of Interpersonal Tactile communication: A field Study. Journal of Nonverbal Behavior, 22, 59-75

Montagu, A. (1971). Touching: The human significance of the skin. New York : Columbia University Press. （佐藤信行・佐藤方代（訳）(1977)『タッチング：親と子のふれあい』平凡社)

資　　料

付録資料目次

資料 1. 先行研究のまとめ
資料 2. 論文の翻訳（一つ）
資料 3. 調査地域分布
資料 4. 調査を実施した大学の一覧表
資料 5.「身体接近度についてのアンケート」（日本語）
資料 6. 同（中国語）
資料 7. 同（英語）
資料 8. 同（韓国語）
資料 9. 同（タイ語）

先行研究のまとめ

研究	研究者	対象者	時期	調査目的	接触の相手	調査方法	調査内容	主な分析方法 & 主な結果							
								身体接触頻度を用い、接触部位を比較	分散分析で有意かどうかを検定	接触形態別で比較	接触相手別で比較	接触相手別での比較（接触に対する好悪度による）	接触の方向性	宗教や、魅力の自己評定で比較	異なる成長段階での比較
身体接触に関する異文化比較研究	仁平ら	日本（仙台市内の大学（院）生175人、高校2年生152人）とポリビア（ラ・パス市内の国立大学生102人、市立高校生72人、中学生108人）	1997	日本とポリビアで、身体接触に対する反応の因子構造に反映された文化的差異を考察する	父親、母親、同性の友人の３種類 （異性の友人について調査しなかった）	アンケートによる量的な調査	仁平・残間（1997）による質問紙から24項目において、「能動的接触」と「受動的接触」について １．好悪度を「嬉しい」から「いや」までの5段階評定で回答を求めた。 ２．接触頻度を「よくある」から「ない」までの5段階評定で回答を求めた。	2ヶ国の間で、全体的に接触頻度に差が見られ、ポリビアに比べて、日本では接触そのものが少ない。	身体接触の頻度について、学年×性×対象の３要因分散分析を行った。		＊　日本の大学生では両親よりも友人との接触が多いのに対して、ポリビアでは反対に両親との接触の方が多い。 ＊　ポリビアでは、特に男子において、発達に伴い父親との接触が減少傾向にあるのに対して、母親との接触は減少しない。	＊　全体的傾向で、両国は類似していた。 ＊　好悪度全般は、ポリビアの方が高く、日本の方が低い、つまり、日本に比べ、ポリビアの方が身体接触に対して好意的である。 ＊　日本で好意的に感じる組み合わせは「女性同士」、ポリビアでは「友人よりも親」。			日本では成長に伴い人間関係の重心が両親から友人へ移るのに対して、ポリビアでは成長しても親子の絆は相変わらず固い。
接触する身体部位にを考慮した研究	ジュラード	アメリカ国内（フロリダ大学の学生380人（男子180名、女子140名。	1966	大学の学生が親や親友に見られる、そして触られる程度、そして、彼らがどの程度これらの対象者を見る、触るかを測定すること	父親、母親、同性の友人、異性の友人の４種類		「24の身体部位」のどの領域を見た、触れた；相手に見られた、触られたかを求める		＊　視覚的な接触は有意に触覚的な接触より良く行われる。 ＊　接触相手と接触形態、性別との交互作用も有意であった。	（異性友人を除き）視覚的な接触は触覚的な身体接触より、自由に、気楽に行われることが分かった。	男女とも異性の友人との身体接触は他の3種類の相手より多く行われる。		＊　男子は母親から触られるほどには母親を触らない。 ＊　女子は男子より多く父親に触られた。 ＊　女子は異性友人を含め、全体的に最も多く触られる。	＊　プロテスタントやカトリックの女子はユダヤ教の女子より触られる身体部位が多い。 ＊　「普通」或は「魅了的ではない」と自己評価した被験者は自己評価の高い人より「身体接触の報告」が少ない。	
	鈴木ら	日本にある５ヶ所の大学、550名（男子305名、女子245名）	1989	日本人大学生の身体接触の現状を把握する	父親、母親、同性の友人、異性の友人の４種類		１．「24の身体部位」のどの領域を見た、触れた；相手に見られた、触られたを求める ２．成長段階において、接触の自己評価を求める。	＊　身体接触の部位はジュラード(1966)の結果より限定されている。 ＊　接触頻度においてもかなりの隔たりがあり、日本とアメリカでは差があるものと考える。			＊　女子学生は男子学生に比べ、（父親を除いた他の3種類の）接触相手から良く触られている傾向が見られる。 ＊　異性の友人による多くの幅広い身体部位への接触が見られる。				＊　年齢が増加するにつれて、両親や同性友人との接触が減り、異性友人との接触が増加していく傾向が分かった。 ＊　全体的傾向ではアメリカと大差が見られなく、Jourard(1966)の結果を支持した。
接触部位を考慮した文化比較研究	バーンランド	日米比較（国際キリスト教大学［ＩＣＵ］の学生とアメリカ人学生）60×4＝240人	1975	開かれた自己(Public Self)と私的自己(Pribate Self)を比較する一環として、「個人間接触の文化的慣習」を調べ、日米大学の異同を調査	父親、母親、同性の友人、異性の友人の４種類		Jourard(1966)の「24の身体部位」の図を使用し、どの領域を触れた；相手に触られたかを求める。	＊　「接触する、しない」身体部位で、日米は殆ど一致した。 ＊　全体としての身体接触量、アメリカ人は日本人の2倍くらいある。			＊　日米とも異性の友人を最も好み、父親との接触がはるかに少ない。 ＊　アメリカ人男性、アメリカ人女性、日本人男性、日本人女性の好ましい接触相手の順位はそれぞれ異なる。		日米の「触る頻度」と「触られる頻度」は共に増減している。		青年期ごろから両国は急速に違ってくる。アメリカでは全体的に継続して身体的接触が保たれているが、日本では接触を用いる範囲が減ってくる。
	林	日韓比較（東海大学［男女60人ずつ］と韓国の成均館大学［男60人、女49人］）、 日米韓比較（バーンランドの結果を使用）	1984	（バーンランド(1975)の日米比較を基礎とした）日本人と韓国人の接触行動の比較研究を行う	父親、母親、同性の友人、異性の友人の４種類		バーンランド(1975)のそのまま。	＊　バーンランド(1975)の結果と殆ど全面的に一致した。 ＊　接触量は日本人殆ど等しく、アメリカ人の2分の一くらいある。			＊　日韓共に、父親との接触が少ない。 ＊　最も接触が多い相手（日本は異性の友人、韓国は母親）の半分に過ぎない。 ＊　異性友人との接触について、韓国は父親に次いで少ない。				

資料 1

（参考資料）

以下は, McDaniel, E. と Andersen, P.A. による論文、International Patterns of Interpersonal Tactile communication: A field Study （Journal of Nonverbal Behavior (1998). 22(1) 59-75. 掲載）の抄訳である。

人々のあいだのコミュニケーション行為において接触がどのように使用されているかということに関する意識が国によって異なるかどうかという問題は効果的な国際コミュニケーションにとって重要である。本研究においては、（1）複数の社会における身体場所別の接触頻度、（2）人間関係の型の影響、（3）緯度と接触頻度について調べた。国によって接触行動に違いがあることが確かめられた。また二者間の接触行動は人間関係の型によって影響されることが確かめられた。緯度が同じなら接触行動が同じであるという仮説は検証できなかった。北ヨーロッパとアメリカ合衆国が非接触的であるという主張に疑問が生じた。

対人的接触行動は人のもっとも原初的なコミュニケーションの形態であるとされてきた（De Thomas, 1971; Frank, 1957, Knapp, 1972）。接触は明らかに、もっとも基本的かつ確実なコミュニケーション行動の形態の一つである（Morris, 1971; Thayer, 1986）。Hall によれば、接触は「すべての感覚のなかでもっとも個人的な体験」であり、また人が環境に適応する上で助けになる（1990a, p. 62）。医学的研究は、幼児の健康にとって接触が不可欠であることを見いだしてきた（Rausch, 1990; Reite, 1990）。

接触はまた、対人コミュニケーションにとっても必須である。Reite (1990) によれば、接触は「もっとも早期の社会的アタッチメントの形成に不可欠である」という（p. 196）。最近の研究によれば、対人的接触の多様性と量とは、接触する人々の間の関係の段階と型とを明らかにする（Emmers & Dindia, 1995; Guerrero & Andersen, 1991）。

文化の影響

個人間で、また世代間で受け継がれることによって、文化は、意識的にも無意識的にも、行動を形成し、条件付け、またコントロールする（Hall など）。人々の接触行動に大きな変動があるのは、文化化の基準が異なるからである。

文献によれば北ヨーロッパやアメリカ合衆国は非接触的であると言われている。（Dodd, 1987 その他）。Shuter(1977)はドイツ、イタリア、そしてアメリカ合衆国を比較して、イタリア人の接触が多いことを見いだした。ドイツ人同士の場合、アメリカ人カップルの違いはわずかだった。イギリスとオランダをフランスと比較した研究では、南のほうが接触が多いという Hall の仮説は検証できなかった（Remland, Jones, and Brinkman, 1991）。しかし北ヨーロッパとアメリカ合衆国が非接触的であり、南ヨーロッパは接触的であるという文献は少なくない。

ラテンアメリカの人々は身体的に密接であり、家族や友人との交流においては、非常に表出的である。抱擁（abrazo）や握手は最低限の規範である（Kras, 1989; Ruch, 1989）。つまりラテンアメリカは公衆接触が高レベルであることになる。

ラテンアメリカに比べ、アジア人は身体接触を避けることで知られている。中国人も日本人も、非接触文化であると言われる（Bamlund, 1989）.
Kim（1977）は韓国のカップルは愛情をはっきり表現することを避けるとのべている。Ruch（1989）は東南アジアの人々は接触を避けようとすると述べている。彼は、インドネシアとマレーシアのビジネスマンにとって握手は規範であるが、マレーシアの場合、親しい友人であれば両手をつかむという。

これらの文献は、接触に多様な文化差があること、またそれぞれの国を全体として接触的、非接触的に分けることに意味があることを示している（Hall, 1990; Malandro & Baerker, 1983; Montagu, 1977）。残念なことに、これらの分類はアネクドートに基づいていて、データに基づいた（empirical な）研究は少なく（Remland ら 1991；Shuter, 1977）、さらに比較研究が必要であることを示している。それで、本研究の第 1 の仮説は、対人間接触行動には文化による違いがあるというものである。

環境と行動

気候的条件は文化規範を形成する要因であると考えら

れてきた。ヒポクラテスもポリビウスも地学的説明を行っており（Harris, 1969）ローマ時代の建築家の Polio は機構を北方人と南方人の知能水準の違いの原因であると述べている。Boissevain（1974）によれば、モンテスキューは 1748 年に、個々人のパーソナリティの違いは気候のせいであると述べている。

環境要因が人間の行動を条件付けるという初期の理論的著作はデータによる裏付けを欠いている。例外はホフステッド（Hofstede, 1980）であって、社会的行動の特性と地学的緯度との関連性を統計的に示している。彼によれば、これ（緯度）は「気候の大まかな目印」である (p. 123)。残念なことに、よく引用されるけれども、結果を再確認するような研究は行われていない。

アンダーセンらの研究（Andersen, Lustig, Andersen, 1987, 1988, 1990）は環境とコミュニケーション行動の関係を調べた最近の研究である。彼らはアメリカ合衆国における各地域の、主観的なレベルでのコミュニケーションパターンに関する理論的モデルをつくった。その結果、「regionalism はコミュニケーションの傾向やパターンを理解するために重要」（1988, p. 23）であるという。さらに彼らは、対人コミュニケーションの傾向は部分的に気候によって異なり、気候は系統的に文化とコミュニケーションに影響すると述べている（1990, p. 291）。

調査サンプルが報告した接触行動の傾向から、Hecht ら（1989）は社会を地理的にカテゴリー化した。高接触文化は、接触行為が多く、暖かいおだやかな地域である。一方寒い気候では、低接触傾向があって、接触回避社会が多い。これは、気候学的適応であるとして説明されている。北の方では環境が厳しいために「作業試行的、協調的、不確定性に寛容」となり（Hecht ら, 1989, p. 168）、このことが個人間の距離を遠ざけるという。一方南の方では密接な個人関係が促進されるが、これはおそらく冬を越すための準備が不必要であるからだろうという。

理論的な問題となるが、これらは、個人間接触行動は緯度によって異なるという第２の仮説を導く。

従って本研究の目的は３つある。ひとつは公衆場面、特に空港の出発において異性への接触の文化的変動を調べることである。第二に、これらの接触が個人間の親密さの段階によって異なるかどうかを調べることである。第三の目的は、接触行動の傾向に、気候学的影響が見られるかどうかをデータによって検討することである。

研究の場として空港が選ばれた理由は、先行研究によって、身体的接触は出迎えと送別において重要であることが示されているからである（Greenbaum & Rosenfeld, 1980; Heslin and Boss, 1980）。前者によれば、空港は儀式の期間中に個人間の接触を促進する状況があるという。さらに、人の多い国際空港は、国際的サンプルを章がいなく観察するのに最適である。

方法

被験者は 154 例の異性同士のペア（dyads）。26 カ国。一方が空港から出発しようとしている。コーディングの間違いがあった 14 例は対象から除いた。さらに 93 例についてインタビューを断られた。結果としてデータ取得率は 65%。

どのペアも観察対象となったのは 1 回限りである。他の 12 カ国の 21 例があったが、サンプル数が少ないので分析対象から除いた。これによって全サンプル数は 175 例から 154 例に減少した（例数計算が奇妙。論文としてはＢ級）。データは国ごとにまとめられ、５つの地域に分けられた。Ronen and Shenkar（1985）の研究は、文化が比較的似ていることで国をまとめる（クラスタリング）ことの妥当性を支持している（注1）。

注 1：８つのクラスター分析をメタ分析した結果、Ronen and Shenkar (1985) は「国や国家はそれぞれの文化的次元における類似性に従って分類する（clustered）ことができる。またこれらの次元は、勤労の目的、価値観、欲求、また仕事への態度である（p. 452）」と述べている。

手続き

アメリカ合衆国の西海岸の大規模空港における国際線ターミナルで遭遇する異性のペア間に自発的に発生する接触行動を非介入的に観察した。アメリカ合衆国のデータのいくつかは国内空港でも観察した。観察後に短いインタビューを行った。

サンプルは得られ次第取得した。観察チームはセキュ

リティ・チェックのそばの旅客待合室で観察しやすい場所を選んだ。航空券を持っているもののみがセキュリティ・チェックの先まで行くことができるので、見送り人はこの待合室でさようならを言うことになる。

観察チームはセキュリティ・チェック地区で、異性ペアが出発ゲートそばに向かう、あるいはとどまるのを監視していた。このようなペアを発見すると、このペアが行う接触行動の身体部位、を観察、記録した。接触がない場合は数値ゼロとして、観察例に含めた。出発者がセキュリティ・チェックを越えて行くまで観察した。この時点ではじめて、見送り人に近づいて質問を行った。

接触された身体部位

接触行動は、その型（キスや抱擁など）と身体の場所について非干渉的に観察し、コード化を行った。方法はGuerrero and Andersen (1991)によるものと似ている。他方の手または身体によって接触された身体の部位に相当する場所を身体図上に記入した。抱擁、キス、握手、手をつかむは相互的接触として記録した。（一組のペアにおいて）他者によってさわられた身体部位の総計を求めた。同一の身体部位への接触の繰り返しや接触時間はコード化の対象としなかった（注2）。

注2：データは各身体部位に接触があったかなかったを記録した。手で肩を触る場合、肩のところに接触があったと記録し、手に接触があったとは記録しなかった。抱擁と握手は相互接触としてコード化した。握手の場合、男女双方の手に対して接触があったとコード化した。抱擁のしかたは様々であるが、この研究では独立の身体部位として抱擁をあつかった（抱擁のあり、なしとしてコード化した）。

予測変数

出生国、緯度、両者の関係について自己申告によって測定した。

出生国：回答者の出生地を決定することが重要であったので、インタビューの最初にこれを訪ねた。アメリカ合衆国における滞在期間は無視して、出生地だけで分類を行った。

文化的一様性を保つため、身体的特徴が似ているペアに限り、通人種的ペアは無視した。（自己申告の）出生国が本当かどうかはわからないが、すべての例で、調査対象者の搭乗便は出生国に向かう便であるか、あるいは出生国への接続便のある都市に向かう便であるかのどちらかであった。しばしば見送り人は自発的に出発者が故国に帰るとか、配偶者または親しい友人が親戚に会うために出国するなどの情報をもたらしてくれた（注3）。

データ分析上、出生国は5つの地域に分類された。接触行動は地理的な地域の内部でも国によって変動するという知見があるが（Shuter, 1976）、ここで行った5地域への統合は類似の文化的背景をもった人々を一般化することができる。

注3：この手続きによって、ペアの文化的一様性を決めるにあたってエラーが生じた可能性は否めない。しかしこのようなエラーは、インタビューで得られた副次的情報によってかなり改善されたと思われる。また、アメリカ合衆国以外の地域で10年以上働き、学んだ経験から、第一著者は、様々な国の異なった身体的特徴、服装、行動特徴を認識することができた。

緯度

タイムズ世界地図によって、出生地の緯度を算出した。都市名等を地図に見いだせないときあるいは不明なときは当該国の首都で置き換えた。出生地と首都が近い場合は首都の緯度を用いた。イングランド、日本、フィリピン、韓国、台湾の場合は首都の緯度のみを使用した。アメリカ合衆国が出生国である場合、南カリフォルニアで生まれた対象者が多かったが、ペアの相手はシカゴのような北方からフロリダのような南方まで変動があった。

人間関係

見送り人への質問から、人間関係を7つに分けた。友人関係についてはその関係性についての見方と説明の仕方（characterization）に個人差や文化差があると思われたので、これを最小にするため、分析時には4カテゴリーとした。無関係な人または知人、友人ないし恋人、家族、そして配偶者である。

訓練とコード化

上級言語コミュニケーションのクラスの学部生19名と研究助手を観察者として訓練した。研究の理論的背景や目的を理解させ、調査対象者の見分け方、コーディングの仕方、など実習を含めて訓練した。しかし研究課題と仮説については明らかにしなかった。

正確な観察を得るために、2名の観察者を1チームとした。両者は記録前に接触場所について独立して観察した上で意見を一致させるようにした。意見が一致しなかった場合、そのペアのデータは削除した。当初、著者らのうちの1名が個々のデータ取得後にチームの観察をチェックした。ある程度なれてきたあとは、記録用紙を検証のために著者の1名に提出する前に2例または3例の観察を行うようにした。

質問紙はスペイン語、中国語、韓国語にネイティブスピーカーによって翻訳された。スペイン語版のみ、2人のネイティブによるバックトランスレーションが行われた。スペイン語版のみが使用された。研究助手は日本語のネイティブスピーカーであった。

統計分析

第一仮説は文化と接触に関するものであり、one-way ANOVA によって文化と接触の関係が分析された。Stuent-Newman-Keuls と Scheffé の事後検定を行った。（身体部位によって）多数のゼロが入っているため、地域と関係の2元の ANOVA ではなく、one-way ANOVA を使用した。第2の仮説を検証するため、緯度と接触行動間の相関係数を算出した。有意水準は両側検定で5%に設定した。

Cohen（1977）の方法に従ってエフェクト・サイズを算出して検出力を求めた。地理的地域に関する検出力は.59（小さい効果）から.99（中位から大きい効果）であった。事後検定結果は.57（大きい効果）から.12（小さい効果）であった。人間関係についての ANOVA のパワーは.53 から.99 であった。事後検定のパワーは.74 から.14 であった。同様に緯度と接触の相関係数のパワーは.43 から.99 であった。検定力は全般に十分に認められ、また中位から大きい効果を検出するためには良好であった。

結果

文化の関数としての接触：国籍によって接触がことなるという第1の仮説は検証された。One-way ANOVA の結果、文化と接触の間に有意な関連があった（$F(4,149)= 36.95$, $p<0.0001$, eta2 乗=0.50）。北東アジアのカップル（M=1.24）は、東南アジアのカップルより接触が少ない。東南アジア（3.82）、カリブーラテン（4.46）、北ヨーロッパ（5.90）、アメリカ合衆国（6.72）の順で接触が多くなるが、これら4つの地域では有意な差がない（表1）。

表1　出身地域別に見た全接触

出身地域	平均値	SD	観察例数
東北アジア	1.24	1.63	78
東南アジア	3.82	2.96	11
カリブ・ラテン	4.46	2.85	13
北ヨーロッパ	5.90	2.12	20
アメリカ合衆国	6.72	3.54	32
合計	3.44	2.41	154

人間関係と接触：One-way ANOVA の結果、人間関係と接触の間に有意な関連があった（$F(3,150)=6.03$, $p<0.001$, eta2 乗=0.11）。友人または恋人と考えているカップルでは（M=5.32）、他の3つの人間関係（家族 2.64；配偶者 3.17；他人／知人 4.00）より接触が多かった。人間関係は接触行動に影響すると言える（表2）。

表2　人間関係別の全接触

人間関係	平均値	SD	観察例数
他人・知人	4.00	2.83	4
友人・恋人	5.32	3.84	37
家族	2.64	3.00	77
配偶者	3.17	2.91	36
合計	3.44	3.35	154

緯度と接触：相関係数は $r=0.12$ で（$p>0.05$）有意ではなかった。男性では0.14、女性では0.08。接触の最大差異は東北アジアと他の地域の間にみいだされ、緯度の違いには見いだされなかった。アジア人のほとんどのサ

ンプルの出生地は北緯15度から45度の間であり、これはアメリカ合衆国全土とほぼ一致する。したがって公衆の場で東北アジア人に接触がなくアメリカ合衆国人に接触が多いことは、同緯度の範囲で生じている。とりわけ、韓国（M=0.90）と日本（M=2.00）とアメリカ合衆国（M=6.72）の違いは目立っている。それでも韓国はアメリカ合衆国の緯度の範囲に入っている。

考察

主たる知見は、接触行動は異なった国の出身者間で異なることである。カップルにおける対人関係の型もまた接触行動に影響する。データが示すところによれば、緯度は公衆場面における接触行動の説明要因にはなり得ない。本研究のデータは、文化が規範的な接触行動に影響するという、これまでの逸話的記述に支持を与えるものである。他者から接触される身体部位数が国によって異なることは、コミュニケーション行動に文化が影響することを示している。このことは、文化の影響と役割が今後の非言語コミュニケーション研究において重要な要因になることを示している。

本研究はまた、カップルの型が出身地とは独立に接触行動に影響を与えることを示した。今回得られた国際的サンプルによれば、接触される身体部位の数は見知らぬ人と知人では中くらいで、友人と恋人でピークに達するが、配偶者では低下し、家族間ではさらに低下する。つまり、データはGuerrero and Andersen (1991)が公衆場面で異性に対する接触について得た結果、またEmmers and Dindia (1995)が私的接触について得た結果を再確認するものである。つまり、接触と関係性とは非線形の関係にある。これら3つの研究結果は、これまで言われてきた親密度があがるほど非言語行動が線形的に増加するという理論の誤りを示唆するものである。それらの理論の中にはAltman & Tayler (1973) の社会的貫通理論、Berger & Calabrese（1975）の不確定性減少理論、Knapp（1984）の関係段階モデルがある。しかし実際は、公衆場面での接触はカジュアルな関係と関係の初期段階で低く、友人や恋人でもっとも高く、結婚相手や家族では減少する。

接触行動が緯度によって変化するという仮説は支持されなかった。データによれば接触行動が異なる水準にある複数の社会が同じ緯度に存在する。この知見は、主として談話的、逸話的な証拠によって維持されてきた理論をテストするものである。コミュニケーション行動の傾向に対する文化や緯度の影響については、さらにデータを積み重ねる必要がある。

本研究の中心的な発見は、Hall (1966)による接触文化と非接触文化の概念が過度に拡張されあるいは過度に単純化されてきたということである（例えばJandt, 1995; Malando & Barker 1983; Montague, 1977）。統計的なデータによれば、アジアの諸国、とりわけ東北アジアを例外として、ほとんどの社会は広範な接触行動を行っている。とりわけアメリカ合衆国と北ヨーロッパが、少なくとも公衆場面で非接触文化である（Hall, 1966）ことは疑問がある。全サンプル中、これらの国々はもっとも接触的であった。

接触と非接触について述べたHallの著作を子細に検討すると、彼の意図には別のことがあったことがわかる。彼は、「交流が社会的あるいは相談的？（consultative）である場合は、出会いの間、接触したりつかんだりする」ことを指していた（p. 1023）。他の研究者たちがその後、この名称を、コンテクストを無視してすべての文化間接触に当てはめた（Dodd, 1987; Jandt, 1995; Malandro & Barker, 1983; Montague, 1977; Patterson, 1983）。Hallの著作は、北ヨーロッパ人は密接な接触空間を嫌う（1990, pp. 61-62）という証拠のない陳述をもって北ヨーロッパ人は非接触的文化であるという一般的信念を不滅のものにした。しかしHallの元々の分類は、役割と作業の関係について調べることを目的としていたから、非接触文化という名称は本研究の対象となったようなペアに見られる個人的な人間関係には適用できないかもしれない。

複数の国の間で社会的あるいは相談的な接触性を比較したわずかな数の研究は、この用語が正当なものであるという結果を出していない。Shuter（1977）の非言語コミュニケーション研究では、公衆場面でイタリア人、ドイツ人、アメリカ合衆国人のペアを対象として、それぞれの国の中にも多様性があるので、単純に接触的、非接触的と名付けるわけにはいかないと述べている。さらに、オランダ、フランス、イングランドでRemlandら（1991）によって行われたクロスカルチュラルな研究

は、接触／非接触という分類を実証することができなかった。彼らのデータはこれらの三国間の接触行動、非言語行動にほとんど差を見いださなかった。

Burgoon, Buller, and Woodall (1989) の示唆によれば、接触—非接触の分類は単純すぎ、「コンテクスト、地位、知己度（p. 195）」のような他の変数が接触行動に影響するという。この示唆は Shutter (1977)や Remland ら（1991）の知見と一致し、また本研究の結果ともおおむね整合するものである。

今回の研究結果と全体としてながめると、西側の社会においては接触は、文化的にパターン化された、シナリオ依存の行動であると言える。人間関係や状況は表出される接触の程度と受容とに影響する。データに基づくかぎり、西側社会を接触社会とか非接触社会とラベルづけすることは一般化のしすぎであろう。

それに比較して、アジアの諸国、とりわけ中国、韓国、日本が非接触的であるという諸文献の記述は確認された。これらの国々の成人間で接触的交流が回避されることは、データ収集時から明らかであったが、アジア人以外の場合と好対照である。

東アジア人が対人的接触に抵抗があるのは、おそらく部分的には儒教の影響があるだろう。儒教は東北アジアに、いまでも影響を持っている（Fairbanks, Reischauer, & Craig, 1973; Joe, 1972）。儒教では、正直・誠実、正直・廉直まっすぐなこと、きめられた社会的行儀・品行に重点が置かれている。さらに儒教は、仏教と同様に家父長的であり、また女性を下位に置いている。東北アジアでは異性に対して過度に情緒的な表出は保守的な公衆的礼儀作法にとって破壊的であると解釈することができる。東北アジアの男性はまた、これらの表出を女性の地位を不適切に向上させるのではないかと考えているかもしれない。これらの社会的観念は、公衆場面で異性と対人関係的活動を行うことを避ける社会的規範を生み出すように合体し、発展したのかもしれない。

結論

本研究の欠点は、いくつかの国についてはサンプル数が少ないことである。いくつかの例において、特定国の観察数が少なく、十分な一般化ができなかった。そのため、サンプルはよく知られている地理的地域にまとめる必要があった。また、各カテゴリーごとの観察数を見ると、「友人・恋人」というカテゴリーは東北アジアの人々の間では代表性がないため、地域の効果と人間関係とが混交してしまったかもしれない。これが原因で、東北アジア群の接触得点が低くなったかもしれない。もう一つの制約は、本研究が公衆の場における接触のみを調べたことである。異性間の私的接触がここで述べられた知見を同様に裏付けるという保証はない。

さらに、サンプルはほぼ例外なく、なんらかの情緒的結びつきをもったペアであった（つまり友人、恋人、家族、配偶者）。非アジアの多くの国々のデータは文献から推定されるより、接触される身体部位の数が多いことを示している。このことは少なくとも部分的に、人間関係（の濃さ）によって生じたものかもしれない。4つの例を除き、154 例で友人関係、家族関係、婚姻関係であった。さらに公式の場面であれば、非アジア人はこの研究で観察されたよりも少ない接触を示すかもしれない。

接触の測度は、接触される身体の部位だけであったことも、結果を限定した。接触の型、時間、回数は記録されなかった。接触行動のこれら記録されなかった測度も、重要な社会的変動を生み出したろう。分析対象としなかった測度の中には、関係の親密さ、旅行者の離別（予定）期間、社会経済的な所得水準、教育程度がある。これらの要因もまた、個人の接触行動に関係するだろう。

最後に、アメリカ合衆国のペアを例外として、サンプルの中には移住する人々も含まれており、彼らが代表する国のよいサンプルとは言えなかった。この場合、観察対象となった人々は文化的には例外であって、当該国の文化の影響量を測ることは難しい。今後の異文化比較研究においては、土着的環境における観察が必要である。

以上

付表1　地理学的地域別のサンプル分布（省略）

付表2　国別の接触部位合計値（省略）

資料　3

調査地域分布図

資料　4

調査を実施した大学の一覧表

大学名	北京林業大学	北京航空航天大学	蘭州大学	南京理工大学	武漢大学	アモイ大学	神戸大学	大阪国際大学	東北学院大学
学生数（単位：人）	院生 1895 人，学部生 12832 人	院生 9500 あまり，学部生 14300 あまり	院生 6952 人(博士 1106 人)，学部生 18114 人	院生 7140 人，学部生 16752 人	院生 17000 余、学部生 48000 あまり	院生 12401 人(博士 1810 人)，学部生 18989 人	院生 4396(博士 1745 人)、学部生 12829 人	4400 人	院生 242 人、学部生 12414 人
学校規模：面積(単位：km²)	8,196,707	1,200,006	2,000,010	1,800,009	3,356,017	5,333,360	1,184,955	不明	不明
学校(本部)所在地	北京市		甘粛省蘭州市	江蘇省南京市	湖北省武漢市	福建省アモイ市	兵庫県神戸市	大阪府大阪市	宮城県仙台市
都市の基本情報（行政種別）	国の直轄市		甘粛省の県庁所在地	江蘇省の県庁所在地	湖北省の県庁所在地	福建省の大都市	兵庫県の大都市	大阪府の県庁所在地	宮城県の県庁所在地
配布枚数（単位：枚）	130		135	100	120	105	275	78	125
回収枚数（単位：枚）	116		103	100	106	100	260	78	116
集計枚数（単位：枚）	98		97	99	96	92	210	60	112
回収率	75.4%		71.9%	99.0%	80.0%	87.6%	76.4%	76.9%	89.6%
男女比	2 1/3		3/4	1	5/8	2	3/4	1/2	2/3

資料 5

身体接近度についてのアンケート

このアンケートはタッチング(身体接触)行動(touching behavior)調査研究の一環として、身体接近度(body-accessibility)を調査するものです。目的は相手(target persons)とどのくらい接触することが可能なのかを測定することです。このアンケートは匿名で行い、個人情報や得られたデータは研究分析以外に用いることはありません。また、どの回答が正しく、どの回答が間違いということはありません。あなたの経験に基づき、率直に回答してください。以下全ての項目の回答にご協力をよろしくお願いします。

連絡先：神戸大学大学院総合人間科学研究科
宇津木 成介： utsuki@kobe-u.ac.jp
呉 映妍： woiujia@hotmail.com

I．あなた自身についてお聞きします。選択の問題は、当てはまる選択肢の前の○にチェックをお入れください。(都道府県を以下では県と略す)

1. 学校：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 今日の日付：20　年　月　日
2. 学部：＿＿＿＿＿＿＿＿ 学科：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ (＿＿＿年生)
   サークル：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 性別：○男　○女
3. 年齢：　○18歳　○19歳　○20歳　○21歳　○22歳　○その他(＿＿歳)
   婚姻状況：　○既婚　○未婚
4. 出身地：＿＿県(番号)＿＿＿＿市町村 (最後のページにある表8.を参照し、一番長く暮らした(都道府)県名に該当する番号を記入し、市町村名をご記入ください)
   そこはどのような所ですか？　○郊外
   ○小都市
   ○地方都市
   ○主要都市
   ○その他 ＿＿＿＿
   あなたが現在住んでいる市町村名をお書きください。＿＿県(番号)＿＿＿＿市町村
5. あなたは海外に行ったことがありますか？具体的に下にお書きください。
   (例：合計＿1＿回。一回目、観光のため、1週間、パリ(フランス)へ行った。)

   合計＿＿回 {
   ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
   ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
   ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
   ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
   }

6. 例のように、あなたの実家の家族構成を教えてください。

例：

祖父	祖母	父親	母親	兄	弟	姉	妹
0	0	1	0	0	2	1	0

実際：

祖父	祖母	父親	母親	兄	弟	姉	妹

7. あなたの現在の居住について、どなたと何人一緒に暮らしていますか？
○親(兄弟)と祖父母と同居　○親(兄弟)と同居(祖父母なし)
○祖父母と同居(親なし)　○兄弟と同居(祖父母、親なし)
○恋人と同居　○同性の友人と同居　○異性の友人と同居
○一人暮らし　○相部屋の寮　○その他＿＿＿＿＿＿

8. 今現在彼氏(彼女)がいますか？
○いる
○いない
○その他 ＿＿＿＿

9. あなた自身の魅力度について、友人からどのように評価されていると思いますか？当てはまる所の下の空欄に○を付けてください。

非常に魅力的でない	やや魅力的でない	普通	やや魅力的	非常に魅力的

Ⅱ．あなたは日常生活において、どのくらい接触行動を行うのかについてお聞きします。

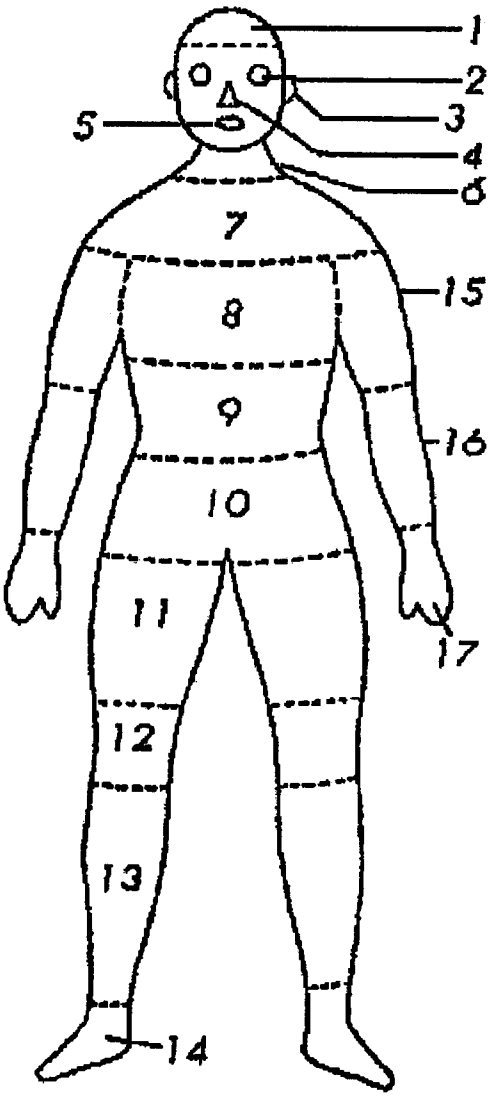
接触行動は「能動的接触（触ること）」と「受動的接触(触られること)」に分けることができます。また、公的状況と私的状況において、表に挙げた異なる相手に対し、異なる接触行動が行われるかもしれません。以下の問いは過去一年間の接触行動の内、「能動的接触」と「受動的接触」についてお聞きします。但し、この一年の間に、死別や離縁などの何らかの理由で、親や恋人を失くした場合は、過去の記憶に基づいて書いても構いません。

図.身体の部位(別紙に添付）の正面と背面の２枚を見ながら、お答えください。この図は身体の２４箇所に番号を付けてあり、性別はありません。例のように、身体部位の中で、自分が過去一年間に、相手の体を一度でも触ったことがあれば、その部位に「１」、触ったことがない部位に「０」を表に書き込んでください。

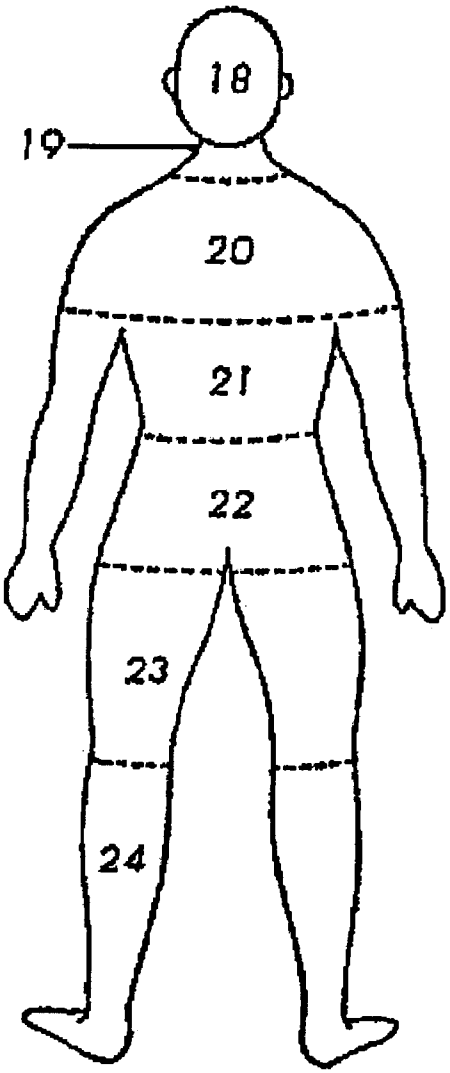
例：　あなたは相手を触ったか？

体の部位	相手									
	父親		母親		恋人		同性友人		異性友人	
	接触した時	接触された時	接触した時	接触された時	接触した時	接触された時	接触した時	接触された時	接触した時	接触された時
例えば25	1	1	1	0	1	1	0	0	0	1

図. 身体の部位



正面



背面

1. 私的な状況における接触の有無についてお聞きします。

あなたが過去一年間に私的な状況（相手と二人きり、或は親しい人のみの場合など）において、相手に、体の各部位を接触したか(能動的な接触)、また接触されたか（受動的な接触）を、表１に記入してください。

接触について接触した(された)ことがあれば「１」、全く接触した(された)ことがなければ「０」を用いて記入してください。恋人がいなかった人も、いたと仮定し、記入してください。

表１.

体の部位		相手による接触の有無									
		父親		母親		恋人		同性友人		異性友人	
		接触した時	接触された時	接触した時	接触された時	接触した時	接触された時	接触した時	接触された時	接触した時	接触された時
頭部	1										
	2										
	3										
	4										
	5										
	6										
胴体	7										
	8										
	9										
	10										
足	11										
	12										
	13										
	14										
手	15										
	16										
	17										
背部	18										
	19										
	20										
	21										
	22										
	23										
	24										

2．　公的な状況における接触の有無についてお聞きします。

あなたが過去一年間に公的な状況（知らない人たちが周囲にいる場合など）において、相手に、体の各部位を接触したか(能動的な接触)、また接触されたか（受動的な接触）を、表２に記入してください。

接触について接触した(された)ことがあれば「１」、全く接触した(された)ことがなければ「０」を用いて記入してください。恋人がいなかった人も、いたと仮定し、記入してください。

表２.

体の部位		相手による接触の有無									
		父親		母親		恋人		同性友人		異性友人	
		接触した時	接触された時	接触した時	接触された時	接触した時	接触された時	接触した時	接触された時	接触した時	接触された時
頭部	1										
	2										
	3										
	4										
	5										
	6										
胴体	7										
	8										
	9										
	10										
足	11										
	12										
	13										
	14										
手	15										
	16										
	17										
背部	18										
	19										
	20										
	21										
	22										
	23										
	24										

3．私的な状況における接触欲の有無についてお聞きします。

あなたが過去一年間に私的な状況（相手と二人きり、或は親しい人のみの場合など）において、相手に、体の各部位を接触したかったか(能動的接触)、そして、相手から体の各部位を接触されたかったか(受動的接触)を、表３に記入してください。

接触について接触したかった(されたかった)部位に「２」、全くしたく(されたく)なかった部位に「０」、どちらでもない部位に「１」を用いて記入してください。恋人がいなかった人も、いたと仮定し、記入してください。

表３．

体の部位		相手による接触欲の有無									
		父親		母親		恋人		同性友人		異性友人	
		接触したかった	接触されたかった	接触したかった	接触されたかった	接触したかった	接触されたかった	接触したかった	接触されたかった	接触したかった	接触されたかった
頭部	1										
	2										
	3										
	4										
	5										
	6										
胴体	7										
	8										
	9										
	10										
足	11										
	12										
	13										
	14										
手	15										
	16										
	17										
背部	18										
	19										
	20										
	21										
	22										
	23										
	24										

4．公的な状況における接触欲の有無についてお聞きします。

あなたが過去一年間に公的な状況（知らない人たちが周囲にいる場合など）において、相手に、体の各部位を接触したかったか(能動的接触)、そして、相手から体の各部位を接触されたかったか(受動的接触)を、表４に記入してください。

接触について接触したかった(されたかった)部位に「２」、全くしたく(されたく)なかった部位に「０」、どちらでもない部位に「１」を用いて記入してください。恋人がいなかった人も、いたと仮定し、記入してください。

表４．

体の部位		相手による接触欲の有無									
		父親		母親		恋人		同性友人		異性友人	
		接触したかった	接触されたかった	接触したかった	接触されたかった	接触したかった	接触されたかった	接触したかった	接触されたかった	接触したかった	接触されたかった
頭部	1										
	2										
	3										
	4										
	5										
	6										
胴体	7										
	8										
	9										
	10										
足	11										
	12										
	13										
	14										
手	15										
	16										
	17										
背部	18										
	19										
	20										
	21										
	22										
	23										
	24										

5．自分の父親、母親、恋人、同性の友人、異性の友人を対象として、生まれてから現在に至るまで、以下のそれぞれの時期においてどの程度触られたかを自己評価し、下の物差しを参考に、1(全く触られなかった)から10(非常によく触られた)の10段階で記入してください。

全然触られなかった

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

非常によく触られた

表5．　＊いない(いなかった)時期には記入しなくて構いません。

時期	相手				
	父親	母親	恋人	同性友人	異性友人
幼稚園まで					
小学校1年生から3年生まで					
小学校4年生から6年生まで					
中学校時代					
高校時代					
現在					

Ⅲ．感想や疑問など、書きたいことがあれば、お書きください。

ご協力ありがとうございました。
ご質問などございましたら表紙の宛先まで、御連絡ください。

表8．

都道府県	番号	都道府県	番号	都道府県	番号	都道府県	番号
北海道	1	青森	2	岩手	3	宮城	4
秋田	5	山形	6	福島	7	東京	8
神奈川	9	埼玉	10	千葉	11	茨城	12
栃木	13	群馬	14	山梨	15	新潟	16
長野	17	富山	18	石川	19	福井	20
愛知	21	岐阜	22	静岡	23	三重	24
大阪	25	兵庫	26	京都	27	滋賀	28
奈良	29	和歌山	30	鳥取	31	島根	32
岡山	33	広島	34	山口	35	徳島	36
香川	37	愛媛	38	高知	39	福岡	40
佐賀	41	長崎	42	熊本	43	大分	44
宮崎	45	鹿児島	46	沖縄	47		

关于身体接近度的调查

这份问卷是身体接触行为(touching behavior)调查研究的一部分，我们在做关于身体接近度(body-accessibility)的调查. 目的是测定人们和其他人(target persons)之间能达到什么程度的接触. 这份问卷调查是以不记名的方式进行，保证不会泄漏您的个人信息. 而且，答案没有对错之分，希望您能根据您的实际情况回答以下所有的项目. 谢谢您的合作!

联系人：吴 映妍
电子信箱：woiujia@hotmail.com

请在适当的地方划☑ 或者填写.

1. 学校：_____ 今天的日期(2005.___.___)
2. 系：_____ 专业：_____(__年级)
   社团,协会等：_____ 性别：□男 □女
3. 年龄：□18 岁 □19 岁 □20 岁 □21 岁 □22 岁 □其他(_____岁)
   婚姻状况：□已婚 □未婚
4. 籍贯:___省(编号) _____ 市(请参照最后一页的附表，从中选出该省(直辖市，自治区,特别行政区(以下简称为省)的编号填上，并写出该市的名称)
   你认为那里是：□农村
   □小城镇
   □小都市
   □大都市
   □其他 _____
   你现在住在 _____省(编号)_____市
5. 你去过国外吗？请具体地写在下面.
   (例：共_1_次. 第_1_次，去 _法国(巴黎)_ ，_学习了 1 年_ .)
   共___次 {_____ _____ _____ _____ _____}
6. 模仿下例(父亲,一人；母亲，无；弟弟,两人；姐姐,一人的情况)，请具体填写你的家庭成员构成状况.

例：

祖父	祖母	父亲	母亲	兄	弟	姐	妹
0	0	1	0	0	2	1	0

实际情况：

祖父	祖母	父亲	母亲	兄	弟	姐	妹

7. 请选择(填写)你现在的居住状况:
   □和父母(兄弟姐妹),祖父母一起　□和父母(兄弟姐妹)一起(祖父母不在一起)
   □和祖父母一起住(父母,兄弟姐妹不在一起)
   □和兄弟姐妹一起住(父母,祖父母不在一起)
   □和男(女)朋友一起租房子住　□和同性朋友一起租房子住
   □和异性朋友一起租房子住　□住学校宿舍(____个人/房间)
   □自己一个人租房子住　□其他_____
8. 现在有男(女)朋友吗?
   □有　□没有　□其他_____
9. 朋友说你有魅力吗? 请在适当的方框里划勾.

非常有魅力	稍微有一些魅力	一般	不怎么有魅力	非常没有魅力

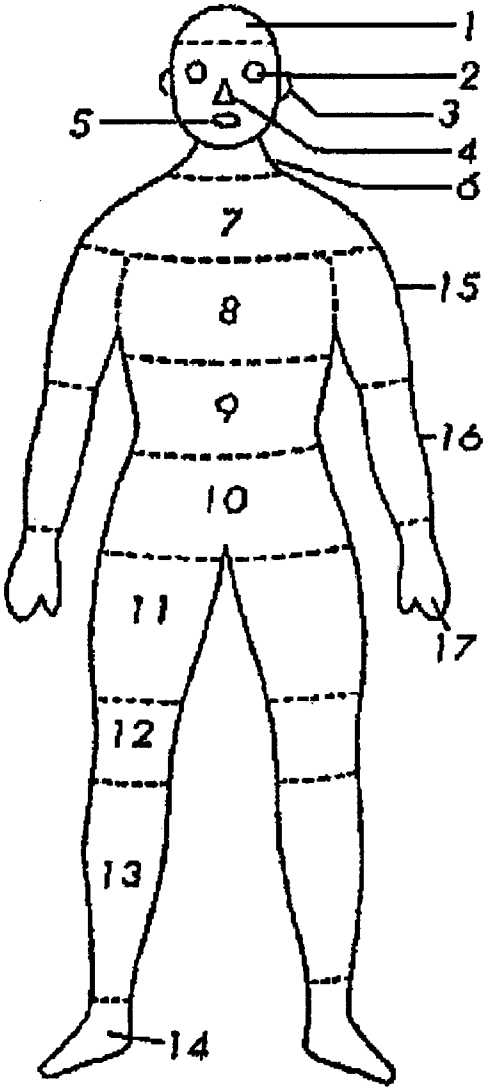
身体接触行为可以分为能动接触(触摸别人)和被动接触(被别人触摸)两种. 而且在不同的场合(公众场合和私人场合), 还有接触对象的不同, 所表现出来的接触行为可能有所不同. 请参照您过去一年的身体接触行为, 回答下面的问题. (如果在这一年里您和您的某位亲人由于某种原因分开(离别)了, 您可以参考以前的经历填写. 如果您暂时没有男(女)朋友, 就请假设有的情况下, 您会怎么做)

请参照正反面的身体部位图(附在下一页), 回答下面的问题. 图上把身体划分成 24 个部分, 每个部分都标了号码. 此图无性别之分. 请模仿下面的例子填写. 其中, 在过去一年里, 只要接触过对方身体的该部位(只要有一次就算)就填"1", 完全没有接触过就填"0".

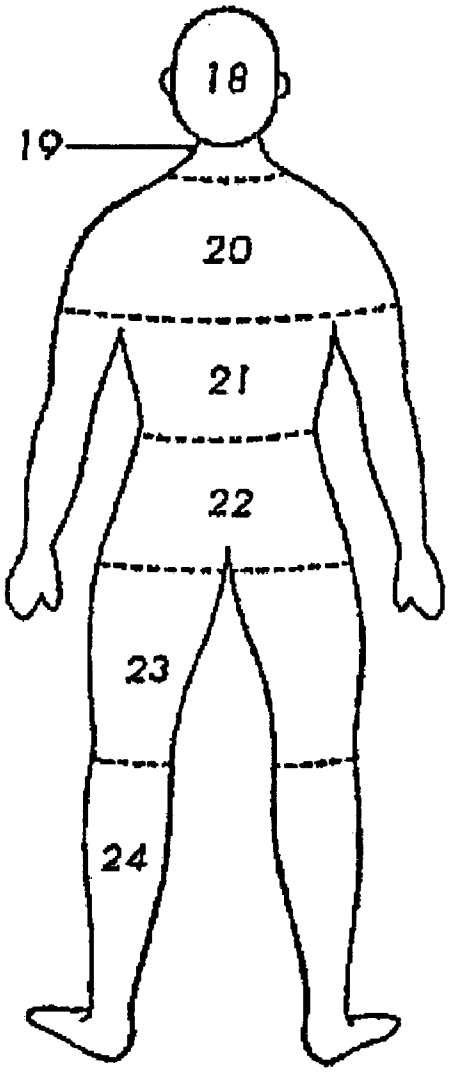
例: 你曾经接触过对方的身体吗?

身体部位	对方									
	父亲		母亲		男(女)朋友		同性朋友		异性朋友	
	主动接触	被动接触	主动接触	被动接触	主动接触	被动接触	主动接触	被动接触	主动接触	被动接触
比如说 25	1	1	1	0	0	1	1	0	0	0

图.　身体部位图



正面



背面

1. 请在下表 1. 中填写出过去一年里，在私人场合(只有你们俩，或者只有熟人在场的时候)，你对别人的身体接触情况和别人对你的身体接触情况.
其中，接触过(或被接触到)该部位一次或一次以上就填“1”，完全没有接触过就填“0”.

表 1.

身体部位		和对方身体接触的有无									
		父亲		母亲		男(女)朋友		同性朋友		异性朋友	
		主动接触	被动接触	主动接触	被动接触	主动接触	被动接触	主动接触	被动接触	主动接触	被动接触
头部	1										
	2										
	3										
	4										
	5										
	6										
身体	7										
	8										
	9										
	10										
脚	11										
	12										
	13										
	14										
手	15										
	16										
	17										
背部	18										
	19										
	20										
	21										
	22										
	23										
	24										

2. 请在下表 2. 中填写出过去一年里，在公众场合(有不认识的人在场的时候)，你对别人的身体接触情况和别人对你的身体接触情况.
其中，接触过(或被接触到)该部位一次或一次以上就填“1”，完全没有接触过就填“0”.

表 2.

身体部位		和对方身体接触的有无									
		父亲		母亲		男(女)朋友		同性朋友		异性朋友	
		主动接触	被动接触	主动接触	被动接触	主动接触	被动接触	主动接触	被动接触	主动接触	被动接触
头部	1										
	2										
	3										
	4										
	5										
	6										
身体	7										
	8										
	9										
	10										
脚	11										
	12										
	13										
	14										
手	15										
	16										
	17										
背部	18										
	19										
	20										
	21										
	22										
	23										
	24										

3. 请在下表 3. 中填写出过去一年里，在私人场合(只有你们俩，或者只有熟人在场的时候)，你是否希望和别人进行身体接触.

其中，非常希望的部位就填“2”，有点希望(或者接触到也没有关系)的部位就填“1”，不希望和别人有身体接触的部位就填“0”.

表 3.

身体的部位		是否希望和对方进行身体接触									
		父亲		母亲		男(女)朋友		同性朋友		异性朋友	
		希望主动接触对方	希望接受对方接触	希望主动接触对方	希望接受对方接触	希望主动接触对方	希望接受对方接触	希望主动接触对方	希望接受对方接触	希望主动接触对方	希望接受对方接触
头部	1										
	2										
	3										
	4										
	5										
	6										
身体	7										
	8										
	9										
	10										
脚	11										
	12										
	13										
	14										
手	15										
	16										
	17										
背部	18										
	19										
	20										
	21										
	22										
	23										
	24										

4. 请在下表 4. 中填写出过去一年里，在公众场合(有不认识的人在场的时候)，你是否希望和别人进行身体接触.

其中，非常希望的部位就填“2”，有点希望(或者接触到也没有关系)的部位就填“1”，不希望和别人有身体接触的部位就填“0”.

表 4.

身体的部位		是否希望和对方进行身体接触									
		父亲		母亲		男(女)朋友		同性朋友		异性朋友	
		希望主动接触对方	希望接受对方接触	希望主动接触对方	希望接受对方接触	希望主动接触对方	希望接受对方接触	希望主动接触对方	希望接受对方接触	希望主动接触对方	希望接受对方接触
头部	1										
	2										
	3										
	4										
	5										
	6										
身体	7										
	8										
	9										
	10										
脚	11										
	12										
	13										
	14										
手	15										
	16										
	17										
背部	18										
	19										
	20										
	21										
	22										
	23										
	24										

5. 请在下表 5. 中填写出在各个阶段，你分别接受到以下各种人的身体接触情况的自我评价. 请从“1”(完全没有接触)到“10”(非常经常接触)中选择恰当的数字来写.

完全没有接触

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

非常经常接触

表 5.

阶段	对方				
	父亲	母亲	男(女)朋友	同性朋友	异性朋友
从出生到幼儿园					
从小学一年级到三年级					
从小学四年级到六年级					
初中时候					
高中时候					
现在					

最后，如果您对这份调查有什么看法，请写在下面或者和 woiujia@hotmail.com 联系.

_____

_____

非常感谢您的合作，谢谢!

附：表 8

省	编号	省	编号	省	编号	省	编号
安徽省	1	福建省	2	甘肃省	3	广东省	4
贵州省	5	海南省	6	河北省	7	黑龙江省	8
河南省	9	湖北省	10	湖南省	11	江苏省	12
江西省	13	吉林省	14	辽宁省	15	青海省	16
陕西省	17	山东省	18	山西省	19	四川省	20
云南省	21	浙江省	22	台湾省	23	广西壮族自治区	24
内蒙古自治区	25	宁夏回族自治区	26	新疆维吾尔自治区	27	西藏自治区	28
北京市	29	天津市	30	上海市	31	重庆市	32
香港特别行政区			33	澳门特别行政区			34

資料 7

Questionnaire on Body-accessibility

This questionnaire is part of investigation on body touching behaviour. We are doing investigation on body-accessibility aiming to determine the degree of touch between people and target persons. This questionnaire is carried out in non-registered way so that no personal information will be disclosed. Moreover, no answer has to be correct or false. Just answer all of the following items according to your situation, thanks for your cooperation!

Contact: UTSUKI, Narisuke: utsuki@kobe-u.ac.jp
WU, Yingyan: woiujia@hotmail.com

Please tick ☐ (e.g. ☑) or fill in at appropriate place.

1. School _____ Date [_ _/_ _/200_ (dd/mm/yyyy)]
2. Department _____ Major _____ (Grade__)
   Cooperation, associations _____ Sex: ☐ male ☐ female
3. Age: ☐ 18 ☐ 19 ☐20 ☐ 21 ☐ 22 others (____)
   Marriage: ☐ married ☐ single
4. Native place _____ Province (code)_____City (Please refer to the attached form at the last page and choose the code of your province [Municipality directly under central government, Autonomous region, Special Administrative Region (hereinafter called Province)] and then fill in the name of city)
   You classify the place as: ☐ Rural area
   ☐ Small town
   ☐ Small city
   ☐ Metropolis
   ☐ Others _____
   You currently live in _____ Province (code)_____City
5. Have you ever been to overseas? Please fill in the details in the following
   (e.g. 1 time(s) in total, 1st time, to France (Paris) , study for 1 year.)

___ time(s) in total { _____ _____ _____ _____ }

6. Follow the example (father, one; mother, none; brother, two; sister, one) and fill in the constitution of your family members.

Example:

Grandfather	Grandmother	Father	Mother	Elder bother	Younger brother	Elder sister	Younger sister
0	0	1	0	0	2	1	0

Facts:

Grandfather	Grandmother	Father	Mother	Elder bother	Younger brother	Elder sister	Younger sister

7. Choose (fill in) your current residence:
   - ☐ live with parents (brothers/sisters), grandparents
   - ☐ live with parents(brothers/sisters) (not with grandparents)
   - ☐ live with grandparents (not with parents and brothers/sisters)
   - ☐ live with brothers/sisters (not with parents and grandparents)
   - ☐ rent dwelling with boy(girl)friend
   - ☐ rent dwelling with friends of same sex
   - ☐ rent dwelling with friends of different sex
   - ☐ live in school's dormitory (___ person/room)
   - ☐ rent dwelling by yourself
   - ☐ others _____
8. Do you have boy (girl) friends?
   ☐ yes ☐ no ☐ others _____
9. Do your friends say you are attractive? Please tick in the appropriate column.

Very much	A little bit	plain	Not too good	Very poor

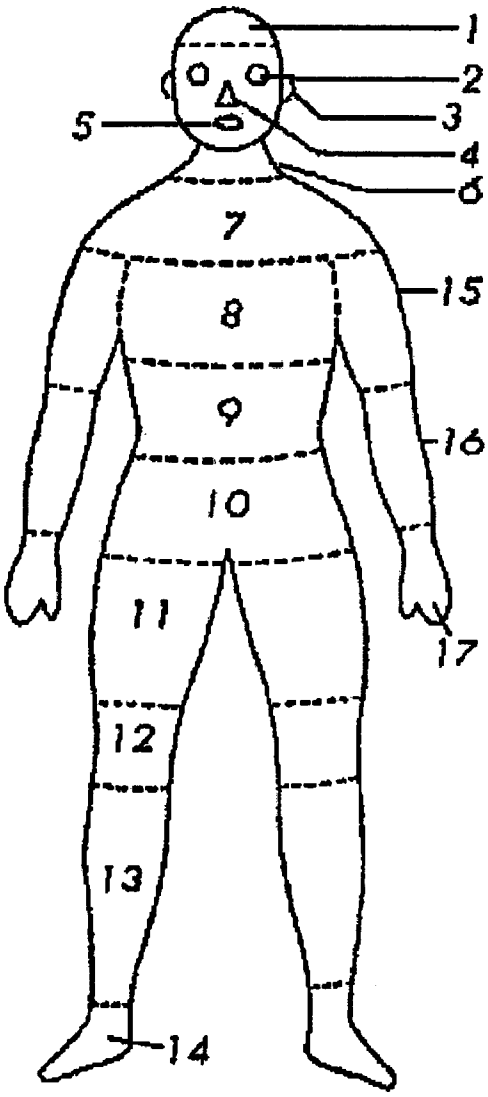
Body touching behaviour can be divided into dynamic **touching (touching others)** and **passive touching (touched by others)**. It varies with different locations (**public location** or **private location**) and different touching targets. Please answer following questions referring to your body touching behaviour **over the past year**. **(If you separated with your relatives due to some reasons over the past year, just fill in according to your previous experience. If you have no boy (girl) friend temporarily, just write what you will do on the assumption that you have)**

Please refer to obverse and reverse side of toponym diagram (attached on next page) to answer the following question. The diagram divides human body into 24 parts and marks number on each part. It has no differences between genders. Please fill out as per following example. Fill in "1" if you have touched the body part (once you touch, it will be considered as one) and "0" if you have never touched over the past year.

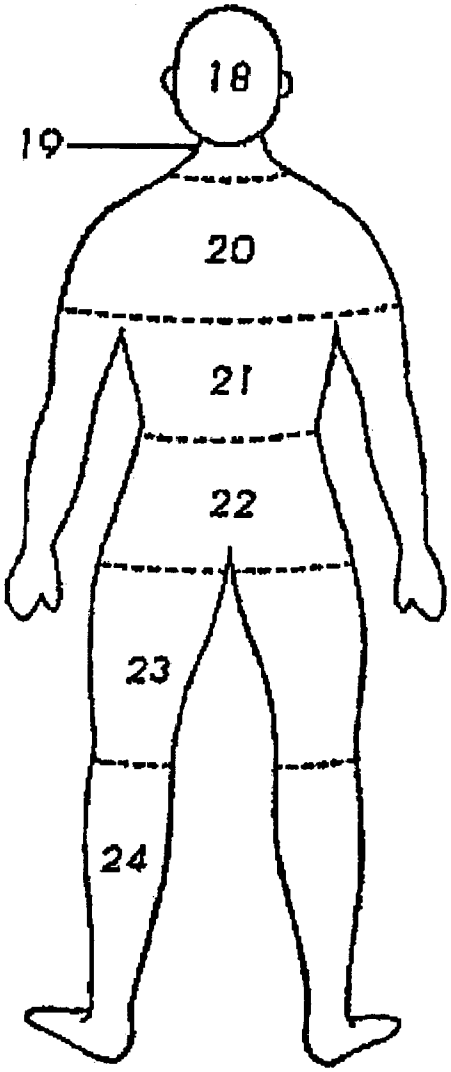
Example: Have you ever touched someone's body?

Parts of body	Touching target									
	Father		Mother		Boy(girl) friend		Friend of same sex		Friend of different sex	
	Dynamic	Passive	Dynamic	Passive	Dynamic	Passive	Dynamic	Passive	Dynamic	Passive
e. g. 25	1	1	1	0	0	1	1	0	0	0

Toponym diagram



obverse



reverse

1. Fill in the facts of your **touching** and **being touched** **over the past year** at **private location** (only you two alone or with acquaintance on the spot) in the Form 1. If you have touched or being touched once or over once on one part, just fill in "1" and "0" for never touching or being touched.

Form 1.

Parts of body		Touch with others or not									
		Father		Mother		Boy(girl) friend		Friend of same sex		Friend of different sex	
		Dynamic	Passive	Dynamic	Passive	Dynamic	Passive	Dynamic	Passive	Dynamic	Passive
Head	1										
	2										
	3										
	4										
	5										
	6										
Body	7										
	8										
	9										
	10										
Feet	11										
	12										
	13										
	14										
Hands	15										
	16										
	17										
Back	18										
	19										
	20										
	21										
	22										
	23										
	24										

2. Fill in the facts of your **touching** and **being touched** **over the past year** at **public location** (with someone unfamiliar on the spot) in the Form 2. If you have touched or being touched once or over once on one part, just fill in "1" and "0" for never touching or being touched.

Form 2.

Parts of body		Touch with others or not									
		Father		Mother		Boy(girl) friend		Friend of same sex		Friend of different sex	
		Dynamic	Passive	Dynamic	Passive	Dynamic	Passive	Dynamic	Passive	Dynamic	Passive
Head	1										
	2										
	3										
	4										
	5										
	6										
Body	7										
	8										
	9										
	10										
Feet	11										
	12										
	13										
	14										
Hands	15										
	16										
	17										
Back	18										
	19										
	20										
	21										
	22										
	23										
	24										

3. Fill in whether or not you expect to **touch** and **be touched** **over the past year** at **private location** (only you two alone or with acquaintance on the spot) **over the past year** in the Form 3. Fill in "2" for the part you expect to touch very much, "1" for a little bit (doesn't matter if have touched) and "0" for not at all.

Form 3.

Parts of body		Expect to touch with others or not									
		Father		Mother		Boy(girl) friend		Friend of same sex		Friend of different sex	
		Dynamic	Passive	Dynamic	Passive	Dynamic	Passive	Dynamic	Passive	Dynamic	Passive
Head	1										
	2										
	3										
	4										
	5										
	6										
Body	7										
	8										
	9										
	10										
Feet	11										
	12										
	13										
	14										
Hands	15										
	16										
	17										
Back	18										
	19										
	20										
	21										
	22										
	23										
	24										

4. Fill in whether or not you expect to **touch** and **be touched** **over the past year** at **public location** (with someone unfamiliar on the spot) **over the past year** in the Form 4. Fill in "2" for the part you expect to touch very much, "1" for a little bit (doesn't matter if have touched) and "0" for not at all.

Form 4.

Parts of body		Expect to touch with others or not									
		Father		Mother		Boy(girl) friend		Friend of same sex		Friend of different sex	
		Dynamic	Passive	Dynamic	Passive	Dynamic	Passive	Dynamic	Passive	Dynamic	Passive
Head	1										
	2										
	3										
	4										
	5										
	6										
Body	7										
	8										
	9										
	10										
Feet	11										
	12										
	13										
	14										
Hands	15										
	16										
	17										
Back	18										
	19										
	20										
	21										
	22										
	23										
	24										

5. Fill in the self evaluation separately on your body touching facts with following person at different stages. Please select appropriate number from "1" (never touched) to "10"(touched frequently).

Never touched touched frequently

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

Form 5.

Stages	Touching target				
	Father	Mother	Boy(girl) friends	Friend of same sex	Friend of different sex
From birth to kindergarten					
From year 1 to year 3 of primary school					
From year 4 to year 6 of primary school					
Junior high school					
Senior high school					
now					

If you have any suggestion or question on this investigation, please write it down or contact us.

_____

_____

_____

_____

Your cooperation is highly appreciated!

Attachment: Form 8

Province	Code	Province	Code	Province	Code	Province	Code
An Hui	1	Fu Jian	2	Gan Su	3	Guang Dong	4
Gui Zhou	5	Hai Nan	6	He Bei	7	Heilongjiang	8
He Nan	9	Hu Bei	10	Hu Nan	11	Jiang Su	12
Jiang Xi	13	Ji Lin	14	Liao Ning	15	Qin Hai	16
Shan Xi	17	Shan Dong	18	Shan Xi	19	Si Chuan	20
Yun Nan	21	Zhe Jiang	22	Tai Wan	23	Guangxi Zhuang Autonomous Region	24
Inner Mongolia Autonomous Region	25	Ninxia Hui Autonomous Region	26	Xinjiang Uygur Autonomous region	27	Tibet Autonomous Region	28
Beijing	29	Tian Jin	30	Shang Hai	31	Chong Qing	32
HK Special Administrative Region			33	Macao Special Administrative Region			34

신체 접근도에 관한 설문조사

이 설문조사는 터칭(신체접촉)행동(touching behavior)조사연구의 일환으로서, 신체접근도 (body-accessibility)를 조사하는 것입니다. 목적은 상대방(target persons)과 어느정도 접촉하는것이 가능한지를 측정하는 것입니다. 이 설문조사는 익명으로 실시하며, 개인정보와 데이터(조사결과)는 연구분석 이외의 목적으로 사용하지 않으며, 설문조사의 회답또한 옳고 그름을 판단하는 것을 목적으로 하지 않습니다. 당신의 경험을 바탕으로 솔직히 회답해 주시기 바랍니다.

아래의 전항목에 관한 회답과 협력을 부탁드립니다.

연락처 : 고베대학 대학원 종합인간과학연구과
우즈키 나리스케 : utsuki@kobe-u.ac.jp
고 에이켄 : woiujia@hotmail.com

Ⅰ。 당신에 관한 질문입니다. 선택사항이 있는 질문에 관해서는 적합한 선택사항의 ○부분에 체크 해주시기 바랍니다.

1. 학교 : _____ 설문조사일 : _____ 년 월 일
2. 학부 : _____ 학과 : _____ (_____학년)
   써클 : _____ 성별 : ○남 ○여
3. 연령 : ○18 세 ○19 세 ○20 세 ○21 세 ○22 세 ○그외 (____세)
   혼인여부 : ○기혼 ○미혼
4. 출신지 : _____ 특별시/광역시/도(번호) _____ 시/구/군 (번호)
   (마지막 페이지에 있는 표 8.을 참고하여 가장 오래 살았던 도시명 「특별시/광역시/도」의 해당 번호를 기입한후, 도시명 「특별시/광역시/도」를 기입해 주십시오) 그곳에서 어느정도의 기간동안 살았습니까? 지금까지의 모든 경험을 전부 기입해 주십시오 (____년 ____개월) 그곳은 어떤 곳입니까?
   ○교외 ○소도시 ○지방도시 ○대도시 ○그외_____
   당신이 현재 살고있는 도시명과 번호를 기입해 주십시오.
   _____ 특별시/광역시/도 ( ) _____ 시/구/군 ( )
5. 당신은 해외에 간 경험이 있습니까? 구체적인 사항을 기입해 주십시오.
   (예 : 합계 1번 처음, 관광으로, 1주일, 파리(프랑스)에 갔다.)
   합계
   ____번 { _____ _____ _____ _____ }
6. 아래의 예와같이 당신의 가족구성을 적어 주십시오.
   예)

할아버지	할머니	아버지	어머니	형(오빠)	남동생	누나(언니)	여동생
0	0	1	0	0	2	1	0

   실제)

할아버지	할머니	아버지	어머니	형(오빠)	남동생	누나(언니)	여동생

7. 당신의 현재 주거상황에 관한 질문입니다. 누구(몇명)와 함께 살고 있습니까?
○부모님(형제)할아버지、할머니와 동거
○부모님(형제)과 동거(할아버지、할머니제외)
○할아버지、할머니와 동거(부모님제외)
○형제와 동거(할아버지、할머니、부모님제외)
○애인과 동거 ○동성의 친구와 동거 ○이성의 친구와 동거
○혼자 살고 있음 ○기숙사 ○그외_____

8. 지금 현재 남자친구(여자친구)가 있습니까?
○있다 ○없다 ○그외_____

9. 당신의 매력에 관해 친구에게서 어떠한 평가를 받고 있다고 생각합니까?
적합한 곳에 ○를 기입해 주십시오.

전혀 매력적이지않다	별로 매력적이지않다	보통	조금 매력적이다	대단히 매력적이다

II。당신이 일상생활에서 어느정도 접촉행동을 하고있는지에관한 질문입니다.

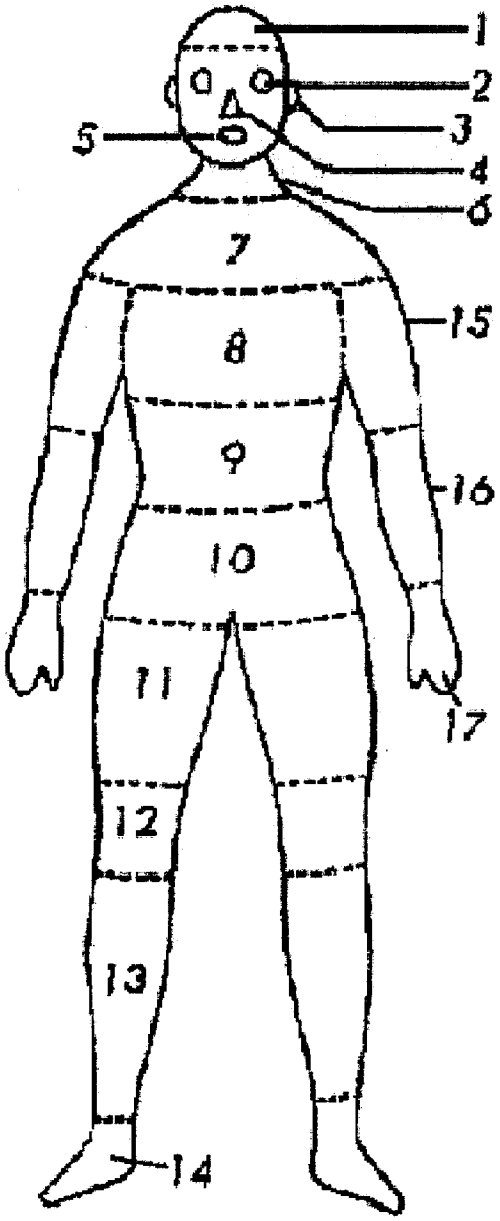
접촉행동은 「능동적접촉 (본인이 상대방을 만지는 것)」 과 「수동적접촉 (상대방이 본인을 만지는 것)」 으로 구분할수 있습니다. 또한, 공적상황과 사적상황에서는 아래의 표와같이 상대방에 따라 다른 접촉행동을 하고있을지도 모릅니다. 아래의 질문은 당신의 과거 1 년간의 접촉행동에 관한 「능동적접촉」 과 「수동적접촉」 에 대한 질문입니다. 단, 최근 1 년간 불가피한 이유로 인해 부모님이나 애인과 사별을 한 경우, 과거의 기억을 바탕으로 기입해 주셔도 괜찮습니다.

★표. 신체의 부위 (별지에 첨부)의 정면 (앞모습) 과 배면 (뒷모습) 을 보면서 회답해 주십시오. 이 표는 신체의 24 곳을 번호로 표시하였으며, 성별은 표시하지 않았습니다. 예와같이 신체부위중에서 당신이 과거 1 년간 상대방의 신체를 1 번이라도 접촉한적(만진적)이 있으면 그 부위에 1, 접촉한적(만진적)이 없는 부위에 0 을 표안에 써 넣어 주십시오.

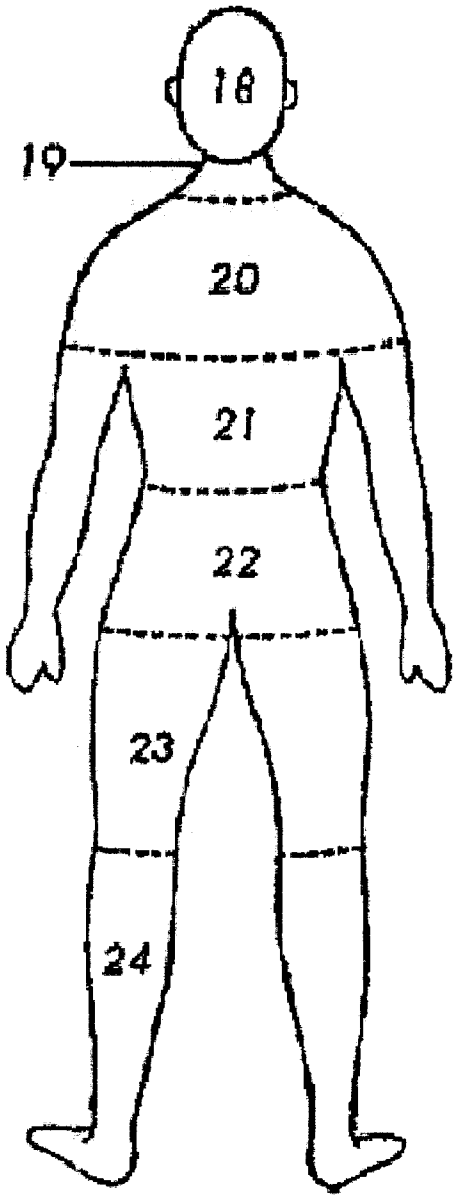
예 : 당신은 상대방을 만졌습니까?

신체의 부위	상대방									
	아버지		어머니		애인		동성의 친구		이성의 친구	
	본인이 접촉한 경우	상대방이 접촉한 경우	본인이 접촉한 경우	상대방이 접촉한 경우	본인이 접촉한 경우	상대방이 접촉한 경우	본인이 접촉한 경우	상대방이 접촉한 경우	본인이 접촉한 경우	상대방이 접촉한 경우
25	1	1	1	0	1	1	0	0	0	1

★표. 신체의 부위



정면 (앞모습)



배면 (뒷모습)

1. 사적인 상황에서의 접촉유무에 관한 질문입니다.

당신은 과거 1 년간에 있어서 사적인 상황(상대방과 둘만의 공간에서, 혹은 가깝게 지내는 사람들만 있을 경우)에서 상대방의 신체의 각 부위를 접촉했는지 (능동적 접촉)、또는 상대방이 당신에게 접촉을 했는지(수동적 접촉)에 관해 표 1 안에 써 넣어 주십시오. 접촉에 관해서는 당신이 접촉한 경우(상대방이 당신에게 접촉한 경우)가 있으면 1, 당신이 접촉한 경우(상대방이 당신에게 접촉한 경우)가 전혀 없으면 0 을 기입해 주십시오. 애인이 없었던 사람도 있었다고 가정하여 기입해 주십시오.

★표 1

신체의 부위		상대방에 따른 접촉의 유무									
		아버지		어머니		애인		동성의 친구		이성의 친구	
		본인이 접촉	상대방이 접촉	본인이 접촉	상대방이 접촉	본인이 접촉	상대방이 접촉	본인이 접촉	상대방이 접촉	본인이 접촉	상대방이 접촉
두부	1										
	2										
	3										
	4										
	5										
	6										
동체	7										
	8										
	9										
	10										
다리·발	11										
	12										
	13										
	14										
팔·손	15										
	16										
	17										
배부/뒷면	18										
	19										
	20										
	21										
	22										
	23										
	24										

2. 공적인 상황에서의 접촉유무에 관한 질문입니다.

당신은 과거 1 년간에 있어서 공적인 상황(모르는 사람들이 주변에 있을 경우)에서 상대방의 신체의 각 부위를 접촉했는지(능동적 접촉) 또는 상대방이 당신에게 접촉했는지(수동적 접촉)에 관해 표 2 안에 써 넣어 주십시오.

접촉에 관해서는 당신이 접촉한 경우(상대방이 당신에게 접촉한 경우)가 있으면 1, 당신이 접촉한 경우(상대방이 당신에게 접촉한 경우)가 전혀 없으면 0 을 기입해 주십시오. 애인이 없었던 사람도 있었다고 가정하여 기입해 주십시오.

★표 2

신체의 부위		상대방에 따른 접촉의 유무									
		아버지		어머니		애인		동성의 친구		이성의 친구	
		본인이 접촉	상대방이 접촉	본인이 접촉	상대방이 접촉	본인이 접촉	상대방이 접촉	본인이 접촉	상대방이 접촉	본인이 접촉	상대방이 접촉
두부	1										
	2										
	3										
	4										
	5										
	6										
동체	7										
	8										
	9										
	10										
다리·발	11										
	12										
	13										
	14										
팔·손	15										
	16										
	17										
배부/뒷면	18										
	19										
	20										
	21										
	22										
	23										
	24										

3. 사적인 상황에서의 접촉욕구의 유무에 관한 질문입니다.

당신은 과거 1 년간, 사적인 상황(상대방과 둘만의 공간, 혹은 가깝게 지내는 사람들만 있을때)에서 상대방의 신체의 각 부위를 접촉 하고싶었는지(능동적 접촉)또는 상대방이 당신의 신체의 각 부위를 접촉 하기를 바랬는지(수동적접촉)에 관해 표3안에 써 넣어 주십시오. 접촉에 관해서는 당신이 상대방에게 접촉 하고싶었던(상대방이 당신에게 접촉하기를 바랬던)부위에 2, 당신이 상대방에게 전혀 접촉 하고싶지 않았던(상대방이 당신에게 접촉 하지않기를 바랬던)부위에 0, 어느쪽도 아닌 부위에 1 을 기입해 주십시오. 애인이 없었던 사람도 있었다고 가정하여 기입해 주십시오.

★표 3

신체의 부위		상대방에 따른 접촉욕구의 유무									
		아버지		어머니		애인		동성의 친구		이성의 친구	
		본인이 접촉	상대방이 접촉	본인이 접촉	상대방이 접촉	본인이 접촉	상대방이 접촉	본인이 접촉	상대방이 접촉	본인이 접촉	상대방이 접촉
두부	1										
	2										
	3										
	4										
	5										
	6										
동체	7										
	8										
	9										
	10										
다리·발	11										
	12										
	13										
	14										
팔·손	15										
	16										
	17										
배부/뒷면	18										
	19										
	20										
	21										
	22										
	23										
	24										

4. 공적인 상황에서의 접촉욕구의 유무에 관한 질문입니다.

당신은 과거 1 년간, 공적인 상황(모르는 사람들이 주변에 있을 경우)에서 상대방의 신체의 각 부위를 접촉 하고싶었는지(능동적 접촉)또는 상대방이 신체의 각 부위를 접촉 하기를 바랬는지(수동적 접촉)에 관해 표 4 안에 써 넣어 주십시오.

접촉에 관해서는 당신이 상대방에게 접촉 하고싶었던(상대방이 당신에게 접촉 하기를 바랬던)부위에 2, 당신이 상대방에게 전혀 접촉 하고싶지 않았던(상대방이 당신에게 접촉 하지않기를 바랬던)부위에 0, 어느쪽도 아닌 부위에 1 을 기입해 주십시오. 애인이 없었던 사람도 있었다고 가정하여 기입해 주십시오.

★표 4

신체의 부위		상대방에 따른 접촉욕구의 유무									
		아버지		어머니		애인		동성의 친구		이성의 친구	
		본인이 접촉	상대방이 접촉	본인이 접촉	상대방이 접촉	본인이 접촉	상대방이 접촉	본인이 접촉	상대방이 접촉	본인이 접촉	상대방이 접촉
두부	1										
	2										
	3										
	4										
	5										
	6										
동체	7										
	8										
	9										
	10										
다리·발	11										
	12										
	13										
	14										
팔·손	15										
	16										
	17										
배부/뒷면	18										
	19										
	20										
	21										
	22										
	23										
	24										

5. 당신의 아버지, 어머니, 애인, 동성의 친구, 이성의 친구를 대상으로 당신이 태어난후부터 지금까지를 아래의 각 시기를 기준으로 어느정도 접촉했는지를 자기평가하여 아래의 기준을 참고로하여 1(상대방이 당신을 전혀 만지지 않았다) 부터 10(상대방이 매우 자주 당신을 만졌다)까지, 10 단계로 기입해 주십시오.

상대방이 당신을 전혀 만지지 않았다 — 상대방이 당신을 매우 자주 만졌다

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

★表5 *아무도 없는(없었던) 시기에는 기입하지 않아도 괜찮습니다.

시기	상대방				
	아버지	어머니	애인	동성의 친구	이성의 친구
유치원까지					
초등학교 1 학년부터 3 학년까지					
초등학교 4 학년부터 6 학년까지					
중학교시절					
고등학교시절					
현재					

Ⅲ。감상 및 의문점등을 기입해 주십시오.

지금까지 설문조사에 협력해 주신점 진심으로 감사드립니다.
설문조사에 관해 질문이 있으시면 표지에 적혀있는 연락처로 연락해 주시기 바랍니다.

★表8

특별시/광역시/도	번호	특별시 광역시/도	번호	특별시/광역시/도	번호	특별시/광역시/도	번호
서울특별시	1	부산광역시	2	대구광역시	3	인천광역시	4
광주광역시	5	대전광역시	6	울산광역시	7	경기도	8
강원도	9	충청북도	10	충청남도	11	전라북도	12
전라남도	13	경상북도	14	경상남도	15	제주특별자치도	16

แบบสอบถามเรื่องพื้นที่ในร่างกายที่ง่ายต่อการสัมผัส

แบบสอบถามเรื่องพื้นที่ในร่างกายที่ง่ายต่อการสัมผัส (body-accessibility) นี้ ผู้ศึกษาได้จัดทำขึ้นเพื่อใช้เป็นข้อมูลในการวิจัยเกี่ยวกับพฤติกรรมการสัมผัส (touching behavior) ซึ่งเป็นส่วนหนึ่งของการศึกษาตามหลักสูตรปริญญาเอก สาขาวิชาการสื่อสาร มหาวิทยาลัยโกเบ ประเทศญี่ปุ่นซึ่งการสำรวจครั้งนี้มีวัตถุประสงค์เพื่อวัดปริมาณและความถี่ในการสัมผัสโดยข้อมูลที่ได้รับจะนำไปใช้ประโยชน์เพื่อการศึกษาเท่านั้น มิได้มีวัตถุประสงค์อื่นแอบแฝงแต่ประการใดและการแสดงข้อมูลจะเป็นการแสดงและตีความทางสถิติซึ่งไม่มีผลเป็นการเปิดเผยความลับส่วนบุคคลแต่อย่างใด คำตอบในแบบสอบถามนี้ไม่มีข้อใดถูกและข้อใดผิดโปรดตอบแบบสอบถามทุกข้อตามประสบการณ์จริงของท่าน จะเป็นพระคุณยิ่ง

ขอแสดงความนับถือ

ผู้ศึกษา Cross- Cultural Communication Kobe University
宇津木 成介(Naritsuke Utsuki) : utsuki@kobe-u.ac.jp
吳 映妍(Ying yan Wu) : woiujia@hotmail.com

I. ข้อมูลส่วนตัว (โปรดเขียนรายละเอียดในช่องว่างและขีดถูกในวงกลมที่ตรงกับข้อมูลของท่าน)

1. มหาวิทยาลัย : _____ วันที่ตอบ : 20 ปี เดือน วัน
2. คณะ : _____ สาขา : _____ (ชั้นปี_____)
   กิจกรรม / ชมรม : _____ เพศ: ○ ชาย ○ หญิง
3. อายุ : ○ 18 ปี ○ 19 ปี ○ 20 ปี ○ 21 ปี ○ 22 ปี ○ อื่นๆ(ปี)
   สถานภาพสมรส : ○ แต่งงาน ○ โสด
4. สถานที่เกิด : จังหวัด _____ (ใส่หมายเลขจังหวัดตามตารางที่ 8 ด้านท้ายแบบสอบถาม)
   อำเภอ _____
   สถานที่เกิดนี้เป็นเมืองลักษณะอย่างไร ○ นอกเมือง
   ○ เมืองเล็ก
   ○ เมืองใหญ่
   ○ เมืองหลวง
   ○ อื่นๆ _____

สถานที่อาศัยในปัจจุบัน : จังหวัด ____(ใส่หมายเลขจังหวัดตามตารางด้านท้ายแบบสอบถาม)
อำเภอ _____

5.คุณเคยไปต่างประเทศหรือไม่ (เขียนอธิบาย)
(ตัวอย่าง : เคยไปเมืองปารีส ประเทศฝรั่งเศส 1 ครั้ง / ไปครั้งแรก / ไปเที่ยว / ใช้เวลา 1 สัปดาห์)

จำนวนครั้งที่ไป ____ครั้ง
_____
_____
_____
_____

6. ระบุจำนวนสมาชิกในครอบครัวตามตัวอย่าง

ตัวอย่าง	ปู่ / ตา	ย่า / ยาย	ฟ่อ	แม่	พี่ชาย	น้องชาย	พี่สาว	น้องสาว
	0	0	1	0	0	2	1	0

สมาชิกใน ครอบครัว	ปู่ / ตา	ย่า / ยาย	ฟ่อ	แม่	พี่ชาย	น้องชาย	พี่สาว	น้องสาว

7. ที่พักอาศัยในปัจจุบัน คุณพักอาศัยอยู่กับใคร

○ ฟ่อแม่ และพี่น้อง และปู่ย่าตายาย ○ ฟ่อแม่ และ พี่น้อง (ไม่มีปู่ย่าตายาย)

○ ปู่ยาตายาย (ไม่มีฟ่อแม่พี่น้อง) ○ พี่น้อง (ไม่มีฟ่อแม่และปู่ย่าตายาย)

○สามีหรือภรรยา ○เพื่อนเพศเดียวกัน ○เพื่อนต่างเพศ

○ อยู่คนเดียว ○หอพัก ○อื่นๆ_____

8. ปัจจุบันคุณมีแฟน หรือคนรักหรือไม่ ○ มี ○ ไม่มี ○อื่นๆ

9. คุณคิดว่าเพื่อนของคุณรู้สึกว่าคุณมีเสน่ห์แค่ไหน (วงกลมในช่องว่าง)

ไม่มีเสน่ห์เลย	ไม่ค่อยมีเสน่ห์	ธรรมดา	ค่อนข้างมีเสน่ห์	มีเสน่ห์มาก

II.พฤติกรรมการสัมผัสในชีวิตประจำวัน

พฤติกรรมการสัมผัสสามารถแบ่งได้เป็น 2 ส่วนคือ การสัมผัส และการถูกสัมผัส อีกทั้งการสัมผัสบุคคลและการถูกสัมผัสจากบุคคลต่างๆอาจจะแตกต่างกันไปตามสถานการณ์ สิ่งแวดล้อม เช่น ในที่สาธารณะ หรือในที่ส่วนตัว

คำถามในส่วนนี้มีเนื้อหาเพื่อสอบถามพฤติกรรมการสัมผัส (ทั้งการที่คุณสัมผัสคนอื่นและการที่ถูกคนอื่นสัมผัส) ของคุณในช่วงเวลา1ปีที่ผ่านมา ถ้าในช่วงนั้นสมาชิกในครอบครัวเสียชีวิตหรือแยกกันอยู่ให้คุณตอบตามความทรงจำในอดีตเกี่ยวกับการสัมผัสและถูกบุคคลนั้นๆสัมผัส

<u>วิธีการตอบ</u> ให้ดูรูปการแบ่งส่วนต่างๆของร่างกาย (รูปที่ 1)ประกอบการตอบคำถาม ซึ่งแบ่งร่างกายทั้งด้านหน้าและด้านหลังออกเป็น24ส่วน โดยไม่คำนึงถึงความแตกต่างเรื่องเพศ

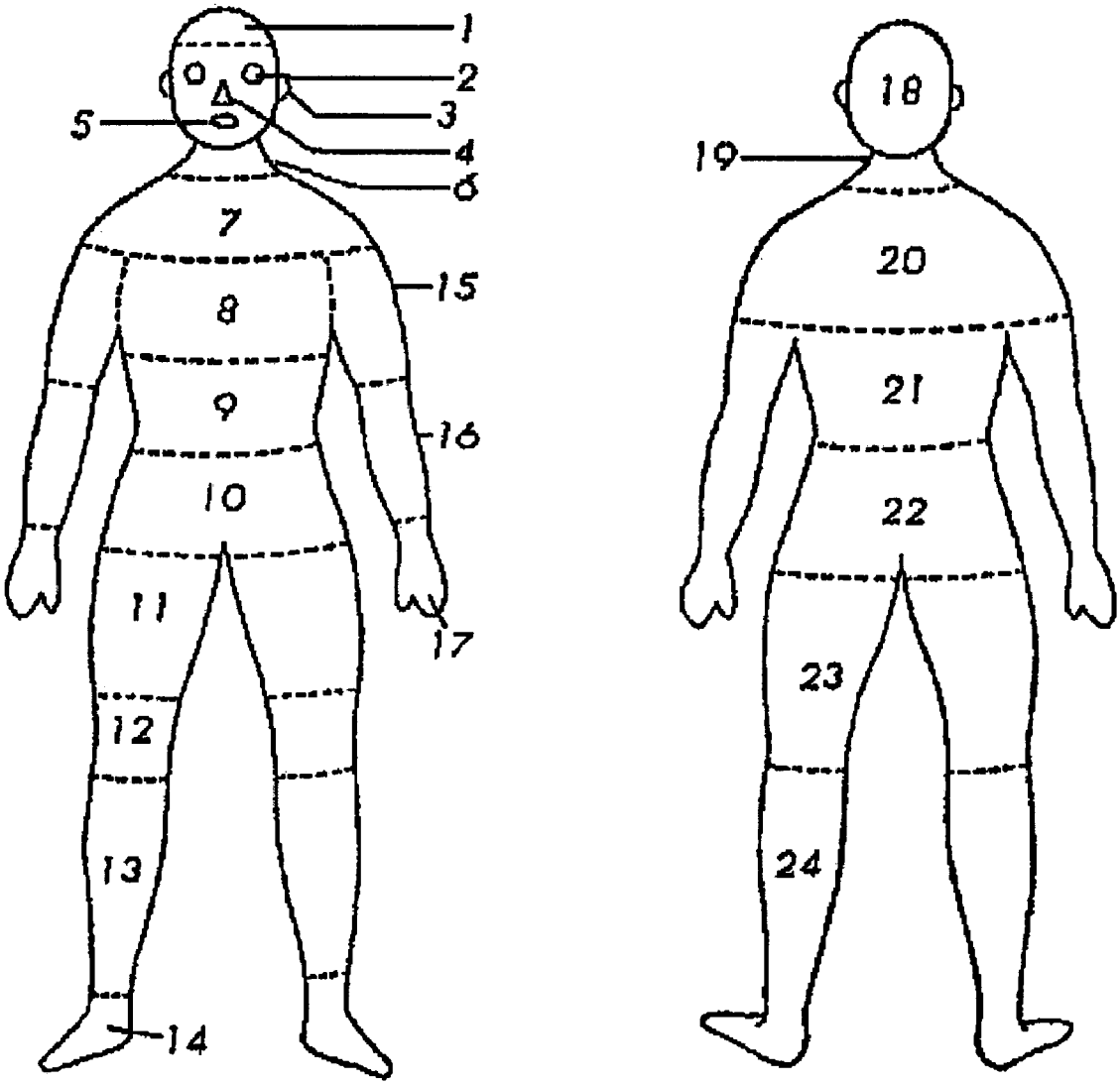
<u>ตัวอย่างการตอบคำถาม</u> ในตารางหมายเลข 1 -24 แสดงส่วนต่างๆของร่างกาย ให้คุณคิดว่าในช่วงเวลา1ปีที่ผ่านมาคุณได้สัมผัสร่างกายส่วนใดบ้างของคู่สนทนาและคุณถูกคู่สนทนานั้นสัมผัสร่างกายส่วนใดบ้าง

ถ้าคุณสัมผัสคู่สนทนาหรือถูกสัมผัสจากคู่สนทนาในส่วนนั้นแม้เพียง1ครั้ง ให้เขียนเลข 1 ถ้าไม่เคยสัมผัสหรือถูกสัมผัสในส่วนนั้นเลย ให้เขียนเลข 0

ตัวอย่าง : คุณสัมผัสคู่สนทนาบ่อยแค่ไหน

ส่วนของร่างกาย	คู่สนทนา									
	ฟ่อ		แม่		สามี / ภรรยา		เพื่อนเพศเดียวกัน		เพื่อนต่างเพศ	
	<u>สัมผัส</u>	ถูกสัมผัส	<u>สัมผัส</u>	ถูกสัมผัส	<u>สัมผัส</u>	ถูกสัมผัส	<u>สัมผัส</u>	ถูกสัมผัส	<u>สัมผัส</u>	ถูกสัมผัส
ส่วนที่25	1	1	1	0	1	1	0	0	0	1

รูปที่ 1 การแบ่งส่วนต่างๆของร่างกาย



ด้านหน้า ด้านหลัง

1.คำถามเรื่องการสัมผัสในสถานการณ์ที่เป็นส่วนตัวหรือเป็นกันเอง

ช่วงเวลา 1 ปีที่ผ่านมาในสถานการณ์ที่เป็นส่วนตัว (เช่นอยู่กับคู่สนทนาเพียงลำพังหรืออยู่กับคนใกล้ชิด)คุณได้สัมผัสร่างกายส่วนใดบ้างของคู่สนทนาในตารางและคุณถูกคู่สนทนานั้นสัมผัสร่างกายส่วนใดบ้าง จงตอบคำถามลงในตารางที่ 1

ถ้าเคยสัมผัสหรือถูกสัมผัสให้ตอบ 1 ถ้าไม่เคยสัมผัสหรือถูกสัมผัสเลยให้ตอบ 0

กรณีไม่มีแฟนหรือคนรักให้สมมุติว่ามีแล้วตอบคำถาม

ตารางที่ 1 .

ส่วนของร่างกาย		คู่สนทนาที่สัมผัสหรือถูกสัมผัส									
		พ่อ		แม่		สามี / ภรรยา		เพื่อนเพศเดียวกัน		เพื่อนต่างเพศ	
		สัมผัส	ถูกสัมผัส	สัมผัส	ถูกสัมผัส	สัมผัส	ถูกสัมผัส	สัมผัส	ถูกสัมผัส	สัมผัส	ถูกสัมผัส
ความสะ	1										
	2										
	3										
	4										
	5										
	6										
ความอก-ทอง	7										
	8										
	9										
	10										
ขา	11										
	12										
	13										
	14										
เท้า	15										
	16										
	17										
ความหลัง	18										
	19										
	20										
	21										
	22										
	23										
	24										

2. คำถามเกี่ยวกับการสัมผัสในสถานการณ์ที่ไม่เป็นส่วนตัว เช่นในที่สาธารณะ

ช่วงเวลา1ปีที่ผ่านมาในสถานการณ์ที่ไม่เป็นส่วนตัว(เช่นมีคนที่ไม่รู้จักสนิทสนมอยู่ในกลุ่มสนทนาด้วย เป็นต้น)

คุณได้สัมผัสร่างกายส่วนใดบ้างของคู่สนทนาในตารางและคุณถูกคู่สนทนานั้นสัมผัสร่างกายส่วนใดบ้าง จงตอบคำถามลงในตารางที่ 2

ถ้าเคยสัมผัสหรือถูกสัมผัสให้ตอบ 1 ถ้าไม่เคยสัมผัสหรือถูกสัมผัสเลยให้ตอบ 0

กรณีไม่มีแฟนหรือคนรักให้สมมุติว่ามีแล้วตอบคำถาม

ตารางที่ 2

ส่วนของร่างกาย		คู่สนทนาที่สัมผัสหรือถูกสัมผัส									
		พ่อ		แม่		สามี / ภรรยา		เพื่อนเพศเดียวกัน		เพื่อนต่างเพศ	
		สัมผัส	ถูกสัมผัส	สัมผัส	ถูกสัมผัส	สัมผัส	ถูกสัมผัส	สัมผัส	ถูกสัมผัส	สัมผัส	ถูกสัมผัส
ศีรษะ	1										
	2										
	3										
	4										
	5										
	6										
ลำตัว-หลัง	7										
	8										
	9										
	10										
ขา	11										
	12										
	13										
	14										
เท้า	15										
	16										
	17										
ศูนย์กลาง	18										
	19										
	20										
	21										
	22										
	23										
	24										

3. คำถามเกี่ยวกับความต้องการสัมผัสในสถานการณ์ที่เป็นส่วนตัวหรือเป็นกันเอง

ช่วงเวลา 1 ปีที่ผ่านมาในสถานการณ์ที่เป็นส่วนตัว (เช่นอยู่กับคู่สนทนาเพียงลำพังหรืออยู่กับคนใกล้ชิด)คุณอยากสัมผัสร่างกายส่วนใดบ้างของคู่สนทนาในตารางและคุณอยากให้คู่สนทนานั้นสัมผัสร่างกายส่วนใดบ้าง จงตอบคำถามลงในตารางที่ 3

ถ้าเคยอยากสัมผัสหรืออยากให้คู่สนทนาสัมผัสให้ตอบ1ถ้าไม่เคยอยากสัมผัสหรือไม่อยากให้คู่สนทนาสัมผัสเลยให้ตอบ 0 กรณีไม่มีแฟนหรือคนรักให้สมมุติว่ามีแล้วตอบคำถาม

ตารางที่ 3 .

ส่วนของร่างกาย		คู่สนทนาที่อยากสัมผัสหรืออยากให้สัมผัส									
		พ่อ		แม่		สามี / ภรรยา		เพื่อนเพศเดียวกัน		เพื่อนต่างเพศ	
		อยากสัมผัส	อยากให้สัมผัส	อยากสัมผัส	อยากให้สัมผัส	อยากสัมผัส	อยากให้สัมผัส	อยากสัมผัส	อยากให้สัมผัส	อยากสัมผัส	อยากให้สัมผัส
ศีรษะ	1										
	2										
	3										
	4										
	5										
	6										
ลำตัว-หลัง	7										
	8										
	9										
	10										
ขา	11										
	12										
	13										
	14										
เท้า	15										
	16										
	17										
อวัยวะเพศ	18										
	19										
	20										
	21										
	22										
	23										
	24										

4. คำถามเกี่ยวกับความต้องการสัมผัสในสถานการณ์ที่ไม่เป็นส่วนตัว เช่น ในที่สาธารณะ

ช่วงเวลา1ปีที่ผ่านมาในสถานการณ์ที่ไม่เป็นส่วนตัว(เช่นมีคนที่ไม่รู้จักสนิทสนมอยู่ในกลุ่มสนทนาด้วย เป็นต้น)

คุณอยากสัมผัสร่างกายส่วนใดบ้างของคู่สนทนาในตารางและคุณอยากให้คู่สนทนานั้นสัมผัสร่างกายส่วนใดบ้าง จงตอบคำถามลงในตารางที่4

ถ้าเคยอยากสัมผัสหรืออยากให้คู่สนทนาสัมผัสให้ตอบ1ถ้าไม่เคยอยากสัมผัสหรือไม่อยากให้คู่สนทนาสัมผัสเลยให้ตอบ 0 กรณีไม่มีแฟนหรือคนรักให้สมมุติว่ามีแล้วตอบคำถาม

ตารางที่ 4

ส่วนของร่างกาย		คู่สนทนาที่อยากสัมผัสหรืออยากให้สัมผัส									
		พ่อ		แม่		สามี / ภรรยา		เพื่อนเพศเดียวกัน		เพื่อนต่างเพศ	
		อยากสัมผัส	อยากให้สัมผัส	อยากสัมผัส	อยากให้สัมผัส	อยากสัมผัส	อยากให้สัมผัส	อยากสัมผัส	อยากให้สัมผัส	อยากสัมผัส	อยากให้สัมผัส
ศีรษะ	1										
	2										
	3										
	4										
	5										
	6										
ลำตัว-ท้อง	7										
	8										
	9										
	10										
ขา	11										
	12										
	13										
	14										
เท้า	15										
	16										
	17										
ศีรษะ	18										
	19										
	20										
	21										
	22										
	23										
	24										

5. ในช่วงเวลาต่างๆ ตั้งแต่เกิดจนถึงปัจจุบัน คุณถูกสัมผัสจาก คุณพ่อ / คุณแม่ / แฟนหรือคนรัก / เพื่อนเพศเดียวกัน / เพื่อนต่างเพศบ่อยแค่ไหน

ให้คุณประเมินความบ่อยโดยแบ่งออกเป็น10ระดับตั้งแต่ระดับที่ 1 (ไม่เคยถูกสัมผัสเลย) จนถึง ระดับที่ 10 (เคยถูกสัมผัสบ่อยมาก) แล้วตอบคำถามลงในตารางที่ 5

ไม่เคยถูกสัมผัสเลย

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

เคยถูกสัมผัสบ่อยมาก

ตารางที่ 5 * ช่วงเวลาที่ไม่มีอาจจะเว้นว่างไว้ได้

ช่วงเวลา	คู่สนทนา				
	คุณพ่อ	คุณแม่	แฟนหรือคนรัก	เพื่อนเพศเดียวกัน	เพื่อนต่างเพศ
ช่วงอนุบาล					
ประถมศึกษาปีที่ 1 -3					
ประถมศึกษาปีที่ 1 -6					
มัธยมศึกษา					
เตรียมอุดมศึกษา					
ปัจจุบัน					

III . ความคิดเห็นและข้อเสนอแนะอื่นๆ

_____

_____

_____

_____

ขอขอบคุณที่ให้ความร่วมมือในการตอบแบบสอบถาม

ตารางที่ 8

จังหวัด	หมายเลข	จังหวัด	หมายเลข	จังหวัด	หมายเลข	จังหวัด	หมายเลข
กรุงเทพ	1	สมุทรปราการ	2	นนทบุรี	3	สมุทรสาคร	4
สมุทรสงคราม	5	นครปฐม	6	สิงห์บุรี	7	อ่างทอง	8
ปทุมธานี	9	อยุธยา	10	สระบุรี	11	นครนายก	12
ฉะเชิงเทรา	13	ชลบุรี	14	ระยอง	15	จันทบุรี	16
ตราด	17	ปราจีนบุรี	18	ลพบุรี	19	นครราชสีมา	20
บุรีรัมย์	21	สุรินทร์	22	ศรีสะเกษ	23	อุบลราชธานี	24
ยโสธร	25	ร้อยเอ็ด	26	มหาสารคาม	27	ขอนแก่น	28
ชัยภูมิ	29	เพชรบูรณ์	30	กาฬสินธุ์	31	มุกดาหาร	32
สกลนคร	33	หนองคาย	34	อุดรธานี	35	เลย	36
พิษณุโลก	37	อุตรดิตถ์	38	น่าน	39	แพร่	40
พะเยา	41	เชียงราย	42	ลำปาง	43	เชียงใหม่	44
แม่ฮ่องสอน	45	ลำพูน	46	ตาก	47	สุโขทัย	48
กำแพงเพชร	49	พิจิตร	50	นครสวรรค์	51	ชัยนาท	52
อุทัยธานี	53	นครพนม	54	กาญจนบุรี	55	สุพรรณบุรี	56
ราชบุรี	57	เพชรบุรี	58	ประจวบคีรีขันธ์	59	ชุมพร	60
ระนอง	61	พังงา	62	สุราษฎร์ธานี	63	กระบี่	64
นครศรีธรรมราช	65	ตรัง	66	พัทลุง	67	สตูล	68
สงขลา	69	ปัตตานี	70	ยะลา	71	นราธิวาส	72
ภูเก็ต	73	สระแก้ว	74	อำนาจเจริญ	75	หนองบัวลำภู	76

謝辞

本研究を進めるに当たり、多くの方々にお世話になりました。ここに深く感謝の意を表します。

本論文は指導教員宇津木成介先生の丁寧なご指導がなければ完成できませんでした。謹んで御礼申し上げます。修士課程の頃より親身に丁寧なご指導を賜りました。先生がおられたからこそ、私は博士課程に進学する決心ができました。そして、研究計画、アンケートの作成、研究データの統計分析、論文の組み立て、そして論文の完成まで、全ての機会において、きめ細やかに丁寧な助言をいただきました。宇津木先生のご指導があったからこそここまで頑張れたのだと思います。心から感謝申し上げます。

副指導教員の米谷淳先生、坂本千代先生には大学院に入学してから常に丁寧なご指導、様々な視点からご助言を賜りました。さらに、水野マリ子先生、柏木治美先生、康敏先生、松本絵理子先生、三木原浩史先生には的確なご教示を賜り、お会いする度に励ましのお言葉をいただき、勇気付けられました。ここに厚く御礼を申し上げます。

また、被調査者の方々のご協力のお陰で、アンケート調査を実施することができました。アンケート調査を快く引き受けてくださった数多くの皆さまに感謝申し上げます。

そして、研究を行うに当たり、様々なアドバイスを下さった先生方、研究室の先輩方に厚く御礼申し上げます。また、研究生活をさまざまな形で支えてくださった同輩・後輩の皆様にも、感謝を申し述べたいと思います。

留学生として日本にやってきた私にたいへん親切にしていただき、心強い支えになって日本の方々にも感謝を申し上げたいと思います。

最後に、私の研究生活を温かく見守り、励ましつづけてくれた家族と友人に対し、心より感謝の言葉を送りたいと思います。